

「濟年報」第二章「一年來の幾個の重要問題」五「中國銀行業の現代化問題」を抄譯。

第四節 銀行資本の機能と作用

「資本主義的發展と共に、非生産的階級から銀行に預けられ、この手を通じて産業資本家に融通される貨幣額も亦絶えず増加する。産業に缺くべからざるこれらの貨幣の處分權は銀行の手にある。そこで資本主義及びそれらの信用組織の發展するにつれ、銀行に對する産業の隸屬が増して来る。他方において銀行が非生産的階級の貨幣を狩り集め、そして益々増加するその基本額を長期の融通にあてるためには、これらの貨幣に利子を支拂はねばならぬ。銀行は、これらの貨幣が餘りに多量でない間は、それを投機信用や、流通信用に充用することにより、かゝる利子を支拂ひ得た。然るに一方に於いては、これらの貨幣が増加し、他方に於いては投機や、商業の意義が減少するにつれ、それらの貨幣はますます産業資本に轉化せざるを得なかつた。若し生産信用が絶えず擴大されるといふことがなかつたならば、預金の充用、従つてまた銀行預金に對する利子の支拂も、とつと、もつともつと低下してゐたであらう。事實このことは一部分イギリスに於いては起つてゐる」。

とは、ヒルファディング氏の喝破するところであつた。これに反して支那の銀行資本は、前節に叙述した通り、驚くべき増大と、膨脹とを來たしたとは謂ひながら、而かもそれが「産業資本に轉化されること」なく、且つ「生産信用が絶えず擴大されるといふこと」がなかつたのであるにも拘らず、銀行預金に對する利子の支拂ひに於いて、

少しも低下しなかつたのみでなく、そのためにこそ巨額の預金を吸収し、莫大な兌換券を流通せしめ得たのは勿論、同時に高利な利潤の獲得を續けつゝ、現在に及んだのであり、こゝに支那の銀行資本のもつ作用と、機能とに於ける特殊性を見出し得るのである。支那の銀行資本を分析するに當り、先づその特殊性——特殊性の上に於ける銀行資本の機能と作用とを適確に把握認識せなければならぬ。

兎まれ支那の銀行は、政治借款、土地建物への投資、商工業及び農業に對する放資等々、先進資本主義國に於ける銀行の營むところの重要な業務は、すべてこれを營んでゐるのであるが、そのうち政治借款、土地建物への投資が頗る多く、商工業並びに農業に對する放資は、前各章のところ／＼に觸れておいた如く、極めて鮮少であつた。試みに全國銀行に於ける投資の内容を知らんがため、左の表を引用しておかう。

全國銀行の投資内容統計（百分比）

種別	一九三三年	一九三四年
商業	二七・〇二%	二九・七七%
工業	一一・〇八%	一三・二五%
同業銀行	六・五六%	二・一五%
政府機關	四三・九〇%	四一・九一%
團體	〇・七三%	一・〇八%
個人	二・五二%	三・二三%

支那資本機構・財閥・政權

交通	一・四一%	一八六
農業及び農産品	四・八一%	二・一五%
公用事業	〇・九七%	五・三八%
合計	一〇〇・〇〇%	一〇〇・〇〇%

(以上「民國二十四年、全國銀行年鑑」から)

即ち以上の表が示す通り、その約二分の一は、政府機關に對する投資(政府借款)及び交通、公用事業(この二つに對する投資も亦何れも中央政府または、地方政府の關係する事業への放資である)に向つての投資であり、斯くの如くにして支那の銀行は、その二分の一弱を政府または政府關係の交通、公共事業に投資し、生産に對する投資が約二割二分弱に足りないのであつた。

然しながら右の如く支那の銀行が兎角生産に對する投資を怠り勝ちであり、「生産信用が絶へず擴大される」ことによつて、「自身の利潤を維持しよう」とする、銀行資本の發展への作用が、著しく缺如してゐるにも拘らず、そこには、何等利潤の低下をも來たさないのであつた。この點に關し全國銀行の最近四年來に於ける總收入(總支出を差除せざるものであるが、その多くは利子收入、投機益金である)を列擧すると左の如く、

全國銀行の最近四年來に於ける總收入統計(單位元)

中央及び特許銀行	一九三二年	一九三三年	一九三四年	一九三五年
	三〇,五四四,八九二	三一,二一九,六三〇	三五,八四〇,七一六	三九,三八〇,三〇七

省市立銀行	三,九二六,九六〇	六,九四〇,二一五	七,三五六,九七二	一〇,八七五,一〇二
商業銀行	二〇,五二一,〇九八	二二,八一八,五八八	二九,八七七,九五八	三〇,〇六八,二八〇
儲蓄銀行	七七六,八八六	八四二,四二一	七五四,三一一	七六七,二九一
農工銀行	五,六八六,四四一	六,六〇〇,六八一	九,一五二,六六三	九,〇九五,八八三
專業銀行	四,〇〇二,九六一	四,九七〇,六一〇	四,七〇一,五八一	四,八二〇,九〇二
華僑銀行	五,七八一,〇五九	七,三〇四,五五六	七,〇六五,〇五九	六,三四八,九七八
總計	七一,二六〇,二九七	八〇,六九六,七一一	九四,七四九,二六一	一〇一,三五六,七四三

と、逐年巨額の利潤と、高度的な利潤率とを擧げ得たのであり、經濟恐慌の渦中に於いてすら、斯くの如き業績を示現し得たのは、銀行資本のみが、獨り恐慌の埒外に立つてゐた所以を物語つてをり、銀行放資がその大部分を政府借款または、政府關係事業への放資に偏傾しつゝ、そこに先進資本主義國に於ける銀行資本が生産に投資し、生産流通の擴大を圖ることによつて、その利潤の増加を促し得たのと、同様の結果を求め得たのであつた。

斯うした過程に於いて、支那の銀行資本が、その巨額の利潤を擧げ得たことは、預金に對して高率な利子を支持ふことが出來、さらに高率な利子を支持ひ得た結果は、當然巨額の預金を吸収し、その間相互間に因果關係を形成しながら、以て銀行資本の膨脹を促すに至つたのであるが、銀行としては斯かる利潤と、その利子の高率とを維持するために、多々益々膨脹の趨勢にある資本を、最も有利に運用しなければならなかつた。

先進資本主義國に於ける銀行資本は「生産信用の絶へず擴大されるといふことがなかつたならば、預金の充用、

従つてまた銀行預金に對する利子の利拂ひも、もつとく低下してゐたであらう」と同様、支那の銀行資本も亦、その資本の運用を擴大しなければ、利潤の獲得と、預金利子の支拂ひを低下せしめねばならなかつた。とくに生産に運用されるところの極めて鮮少な銀行資本であつたよけに――。

この間の経緯に對し「中國金融資本論」の著者は次の如く解説してゐる。

「銀行の商工業に投資しなかつたことに對しては、また別に、一つの大きな原因がある。それは銀行の預金利息が甚だしく高率であつたからである。このことはさらに政府の公債の濫發と密接な關係が結ばれてゐた。銀行の資金は、大部分社會的に吸收して來た預金であり、その場合預金利息の頗る高率であると謂ふことは結局に於いて貸出利率にこれを轉嫁せしめねばならぬ結果、必然的に貸出利息の遡高を促したことは謂ふまでもない。支那の預金利息は民國初年頃に於いては、尙ほ些程の高率を示現しなかつた。のち政府の公債の濫發により、または政府が屢々高利を以て銀行から借款するに至つた等、銀行としては政治投機が、その利益豊厚であるがため、それに趨るに至つた結果、そこに高利を以てする資金の吸收が行はれ出し、漸次競争の熾烈を加へつゝ、期せずして預金の吸收戰が展開され、預金利息の増高と共に貸出利息も亦これに隨伴して増大したのである。こゝに銀行の預金利息が頗る高率であること、政府の公債濫發との關係の基礎があつた。これがために工商業者としては、高利な銀行資金を借りる能力がなく、銀行も亦、工商業の基礎の危険性にかんがみて、その貸出を希望しなかつた。支那金融資本と工商業とが甚だしく疎遠となつた所以はこゝにある。尙ほ且つ銀行が、單に工商業に對する

融資を希望しなかつたのみでなく、時にはまたこれを壓迫した。例へば工商業者がその期限に至つて借款を返還し得ないとき、或は恐慌襲來に際して、銀行は往々債權人の資格を以てその營業を管理し、またはそれらの工商業者を破産せしめて、その財産を差押へ、乃至これを競賣處分に附した。このやうにして銀行資本は單に工商業を援助しなかつたのみに止らず、これに對して攻撃をすら加へたのである。こゝにも亦半植民地社會經濟の別の一寫圖があつた」(「中國金融資本論」第一章「中國金融資本の特殊性」五「中國金融資本と産業」の一節を抄譯)。

大體以上の如くにして、支那の銀行資本は、その對象を依然從來の政府借款、及び政府關係の各事業に對する放資に向けつゝ、さらに益々その充用を擴大したのであり、とくにその營業をして、公債と地産とに、集中せしめたのであつた。

x x

こゝで支那に於ける銀行の預金利子が如何に高率であるかを附記しておきたい。尤も國民政府の幣制改革以後、低金利政策が、漸次輿論の中心となり、後章に叙述するが如く、統一公債の發行に伴ふ公債に對する利廻りの引下げを機會として、漸次具體化への傾向を示しつゝあつた。

但しこれは、銀行資本家が、その自衛策上、さうした要求を提出するに至つたからであり、結局低金利の實現によつて、預金利子の引下げを斷行しながら、極度にまで膨脹するに至つた預金に對する利子支拂ひの負擔を軽減し、同時にその高度的利潤の獲得を維持しようとした試みであつたことは謂ふまでもない。従つて金融業者らは「貸出

し利子の低減は先づ預金利子の引下げを先決問題とする」旨の主張をなしつつあつたのに徴して這般の消息を窺知することが出来るのであつた。即ち次の如く、

「金融市場に於ける貸出は、すべて預金の吸収によつて資金が作られ、然るのちに行はれるものである。貸出利子を引下げんとするには、先づ預金利子から引下げなければならぬ。さうでなければ金融界ではその營業を維持することが不可能である。試みに上海の預金利子を見るに在支外國銀行は最高年利五分であるに對し、華商銀行のそれは最高年利一割であり、錢莊は最高月利一分である。貸出利子に至つては、在支外國銀行、華商銀行、錢莊とも、最低年利六分内外、最高一割二、三分である。金融市場の安定を維持せんとせば、預金利子と貸出利子との間に相當の格差を保たしめる必要がある」。

等の主張がその代表的のものであり、これに對し、一部の間に於いて、次のやうな評價を下してゐた。

「このことは所謂金融業者の、自身の利益から打算した要求に過ぎない。彼等が自身の利益を保障せんとする上に於いて、貸出利息の引下げには反對するものでない。換言せば貸出利子の引下げを行つて産業界の負擔輕減を謀ることに對しては、當然金融界の希望するところであらねばならぬからである。たゞ自身の利益を犠牲にしてまでも、産業界を援助しようとはしないのみであつた。自然預金利子の引下げに對して彼等は衷心からこれを希望してゐることは勿論である。但し預金利子の引下げは、必然的に預金者の希望を裏切る行爲であつた。斯くの如くにして所謂低金利問題は其の解決の至難な問題である」(一九三六年四月十一日の「中華日報」から)。

然らば現在支那に於ける金融の中心市場たる上海の銀行預金利子がどうであつたか。左にその概略を摘録しておかう。

普通預金(上海の主要銀行たる交通、上海商業儲蓄、中國企業、中華勸工、永亨、中孚、中國、中國通商、中南、四明商業儲蓄、中國墾業、聚興誠、中國實業、中匯、浙江實業、中國國貨、恒利、國華、等の十八銀行)。

期限	最高	最低	平均
三個月	六%	四%四八七五	五%
六個月	七%	六%	五%九
九個月	八%	六%五	七%一
一年	一〇%	七%	七%五
二年	一一%	七%五	八%二七八
三年	一二%	八%三	九%三
四年	一〇%	一〇%	九%
五年	九%	九%	九%

支那の銀行業が、預金利息の支拂ひと、その高度的利潤の維持上、益々膨脹して行つた資本の運用能率を昂めるべく、さらに公債と地産とに對して、積極的の出勤を試みるに至つたことは前述の如くであるが、その結果は、銀

行資本と、中央財政との結合關係をして、愈々深めしめた。

「支那の銀行は、その最初に創設されたところの中國通商銀行の成立以來、毎年増加したが、とくに歐洲戰爭後に於ける六箇年中を最大とし、九十行に達した（一九二五年閉鎖したものを含まない）。これは當時の我國を中心とする工業の勃興と關係なしとしないのであるが、然しながら、就中最も重要な原因は、政治投資による雄厚な利潤が、銀行の創設を誘致したからである。例へば北京政府の發行した公債庫券が、一九一八年から一九二二年の間に於いて最も多く、同時に借款も亦夥しかつた。勢ひこの期間に於いて設立されたところの投機的銀行が随つて増加し、一九二二年の如きは一年中の新設銀行数が、二十三行に達したのである。それに次いで國民政府は、一九二七年から一九三一年までの間に於いて公債庫券十億元を發行し、而してその期間に於いては、新設銀行が、雨後の筍の如くに發生した。例へば一九二八年には十三行増設され、一九九年には六行、三〇年には十四行、三一年には十一行の銀行がそれ／＼新設された。こゝに全國に於ける銀行（支分行をも合して）の逐年新設統計表を示すと、次の如く、

民國元年以前に設立されたもの……………	一八
民國元年から同十年に至る間の設立……………	二〇二
民國十一年から同二十年に至る間の設立……………	三五〇
民國二十一年中に設立されたもの……………	一一一
民國二十二年中に設立されたもの……………	一四八

民國二十三年中に設立されたもの……………	二九六
民國二十四年上半年中に設立されたもの……………	六二
總計……………	一、一八八

と、銀行新設の最も多かつたのは、北京政府時代に於いても、南京政府の時代に於いても、その公債發行の最も多かつた時代に於いてあり、斯くの如くにして、銀行の増設は、疑ふべくもなく、公債に對する投機がこれを誘惑したものであると謂はざるを得ない。而かも民國二十一年及び二十三年には、全國に於いて本支分行の増設されたものが、四百行以上に達したのであり、これは政府と公債と、金融公債との繁榮によつて造成されたものに外ならぬ（「中國金融資本論」第一章「中國金融資本の特殊性」四「中國金融資本と財政」の一部を抄譯）。

とは「中國金融資本論」の著者の説くところである。

銀行資本が、政府及び政府關係事業に對する投資にのみ趨り、それによつて巨大な利潤を獲得し、換言せば各銀行がその膨脹して行く資金を、何れも政府事業に向つての放資——政府の發行する公債庫券に對する投資、若くはその他の交通、公用事業乃至地方政府の事業への資金融通——にのみ運用して來た事實は、各銀行に於ける有價證券の手持ち額がこれを的確に證明してゐる。

各銀行の手持ちせる有價證券額

年	兌換券保證準備	兌換券保證準備及 手持券有價證券の合計
一九二一年	三六、七六二、〇五二	九一、〇七三、一八三
一九二二年	四三、五八七、一六七	九九、四六六、七七六
一九二三年	五二、二二七、四五七	一〇三、五七四、九〇二
一九二四年	五八、八七六、五一五	一一八、九二三、七九七
一九二五年	七八、七九七、一六八	一四三、五二七、三九六
一九二六年	八七、七八九、二八九	一七七、八四七、四二四
一九二七年	九九、四八〇、三七八	二〇三、八〇四、五九五
一九二八年	一一七、八三四、四一五	二三四、〇五六、一八八
一九二九年	一三四、四〇三、七五一	二七六、二六七、五〇三
一九三〇年	一五九、五〇五、四九六	三八一、八一六、六八五
一九三一年	一五四、三一八、四八六	三九三、五四五、四六〇
一九三二年	一八〇、六三六、一六七	四〇七、〇〇四、四三三
一九三三年	二一四、〇七六、三七三	四七〇、九七七、四四七
一九三四年	二四九、〇〇八、八八九	七一五、二二〇、四〇六
一九三五年	三四七、一九三、七四九	九四〇、六二二、四三八

以上の數字は、銀行の手持ちせる有價證券の額に、發行兌換券の保證準備として保管されてゐた有價證券の額を

も、加へたものであり、これらの證券のなかには、當然公債、庫券、會社株券、道契（土地登記證）が含まれてゐる上、發行兌換券に對する保證準備の中には、一流の商業手形も亦この中に加はつてゐるとは謂へ、その百分の七十以上は公債であつて、公債のうちにも同時に中央政府の財政公債が大部分を占めてゐるのである。

而していまこれらの額が、時價の八掛として評價計上されてゐるとせば（一般的に銀行がその決算に當り、手持ちの有價證券を評價する場合は時價の八掛とするのを普通としてゐた）、及びその公債の時價が、額面額の七掛乃至六掛であると假定するとき、右の統計表に基く、銀行の有價證券手持ち額は、頗る巨額に達する勘定となり、況んやこれに對して、各銀行の擔保貸出の項目中に於ける有價證券の擔保額をこれに加ふるならば、銀行に保有されつゝある有價證券額はさらに尨大なる數字となつて現れて來るのであり、而かもその有價證券は大半政府發行の公債であるに於いてをやである。

斯くの如くにして從來政府が公債を發行する場合には、殆どその全部が先づ主要銀行によつて引受けられ、市場でこれを賣出し、または一般から募集すると謂ふことがなかつたのである。このことは一面に於いては支那の勤勞大衆の經濟生活が貧困であるために、これらの公債を消化する能力がなかつたからであるとも、一面に於いては公債の利息は、全くこれを銀行が獨占して了つた所以を物語るものであり、斯うした銀行の公債投資は、年利一割以上、甚だしきに至つては二、三割の高い利廻りとさへなつたのであつた。斯かる経緯は必然的に、銀行資本をし

て比較的危険性に富み、且つ利廻り率の頗る劣悪な工業放資を忌避せしめ、専ら公債投資に走らせた根本的要素であらねばならぬ。

X X

政府財政と公債、公債に對する銀行の投資が、如何なる關係を保ちつゝ推移したか。著者の説明はこれを避け、左に「銀行週報」(民國二十五年二月二十五日發行の第二十卷第七期)から「吾國の銀行と政府内債」と題する研究を引用しよう。

「以上の説くところにより、銀行業が發達し乍ら、社會經濟がこれに随つて活動し得ないのみでなく、社會經濟が凋落せる反面に於いて、銀行業のみが獨り自然繁榮しつゝある所以を知つた。こゝではさらに銀行業と政府の關係とを看なければならぬ。而してこの關係は、また銀行の資産負債表中に於ける有價證券の項目によつて探究することが出来る。「中國銀行經濟研究室」の發行にかゝる「主要銀行二十八行の營業概況」によれば、これらの二十八行(註、この二十八行の名稱はさきに、これを掲げた)の有價證券に對する投資額は次の如く(單位元)、

年 度	總 額(指數)	年 度	總 額(指數)
民國十年	五四、三一〇、一三六(一〇〇)	民國十一年	五五、八七九、六〇九(一〇三)
民國十二年	五〇、三四七、四四七(九三)	民國十三年	六〇、〇四七、二八二(一一一)
民國十四年	六四、七三〇、二二八(一一九)	民國十五年	九〇、〇五八、一四五(一六六)

民國十六年	一〇四、三二四、二一七(一九二)	民國十七年	一二六、三二一、七七三(二三二)
民國十八年	一四一、八九三、三三二(二七二)	民國十九年	二二二、三一一、一八九(四〇九)
民國二十年	二二九、二三六、九七四(四四〇)	民國二十一年	二二九、二三九、七三五(四四〇)
民國二十二年	二七四、九七三、六七二(五〇三)	民國二十三年	四七五、五六三、九四九(八七四)

と、銀行の有價證券に對する投資を、指數で表示すれば、民國十年から十五年に至る期間は百分の六十六を増し、民國二十年に至つて、百分の三百四十に達し、民國二十三年には百分の七百七十四に激増した。これを有價證券と各種貸出額の資産總額に對する百分比に比較するとき、その指數が次の如くであり、これを以て近年來に於ける銀行の貸出と投資に對する趨勢を知ることが出来る。

民國十年	資産總額	七五九、二五四、一一七(指數一〇〇)
同	各種貸出	五二五、三一八、一七〇(同六七・八五)
同	有價證券	五四、三一〇、一三一(同七・一五)
民國十五年	資産總額	一、三九一、〇二九、六〇〇(同 一〇〇)
同	各種貸出	八八七、三四四、四三四(同六二・七九)
同	有價證券	九〇、〇五八、一四五(同 六・四七)
民國二十年	資産總額	二、五六九、六〇六、〇八三(同 一〇〇)
同	各種貸出	一、六〇三、九〇五、一一四(同六二・四二)
同	有價證券	二二九、二三六、九七四(同 九・三一)

民國二十三年	資產總額	三、八四九、〇九〇、三二三(同 一〇〇)
同	各種貸出	二、二五三、九六六、三八四(同五八・五六)
同	有價證券	四七五、五六三、九四九(同二・三六)

と、各種貸出の資産總額に對する百分比が、民國十年の六七・八七から、民國二十三年には五八・五六と低下したのに較べて、有價證券は七・一五から、一二・三六と上昇してゐるのである。而かも各種の貸出額は有價證券を超過すること數倍を占めてゐると雖も、長期間の趨勢に従へば有價證券額の増加が急速度を以てなされてゐるのである。尙ほ二十八銀行の最近三年間の有價證券と拂込資本とを比較するに次の如く、(單位元)

年 度	拂込資本	有價證券
民國二十一年	一五六、七七七、六七九	二三九、二二九、七三五
民國二十二年	一七三、八八五、三二六	二七四、九七三、六七二
民國二十三年	二五四、四三九、九七六	四七五、五六三、九四九

と、何れも一段の増加を示現してゐる。而していまこれらの有價證券の内容についてこれを見るに、有價證券のうちには、政府債券、産業債券、及び會社株式等を包含してゐるのであるが、支那には産業債券は殆ど存在しないと稱して好く、會社株式も亦一、二信用の比較的良好なるものがあると雖も、それすら公定市價が決定されてゐない状態である(中略)。従つて以上各銀行の手持ち證券の大部分は政府債券であると推測すべきであらう。この點に關し、「一九三四年全國銀行年鑑」には「我國に於ける有價證券の流通は、政府債券が最も多く、普通の會

社債券、社債等は殆ど絶無と稱して差支がなし」と説いてあり「一九三五年全國銀行年鑑」にも亦「我國の銀行の投資は工商業を除くほか政府證券を以て大宗となす」と論斷してゐる(中略)。然らばこれらの各銀行に於ける手持ちの有價證券のうち、政府債券が幾何を占めてゐるであらうか。假りに前表の二十八銀行に於ける民國二十三年末現在の有價證券額四七五、〇〇〇、〇〇〇餘元のうち、産業債券及び會社株式、社債等に投資した額を約一億元と見積つてこれを控除するとき、結局三七五、〇〇〇、〇〇〇餘元となり、そのうちからさらに金貨公債(外國で發行したもの)の手持ち額を二〇%と假定した上、これをも引き去るならば約三〇〇、〇〇〇、〇〇〇元内外が、政府發行の内國公債であると謂ふ計算が出て来る。便宜上ここで政府が幾何の内債を發行したかを記録して置かう。左に列擧するのは民國二十四年一月現在の政府内債發行額である(單位元)——▲印は北京政府時代のもの。

公 債	未償還額	庫 券	未償還額
▲七年六厘	二一、六〇〇、〇〇〇	續發二五	一、〇〇〇、〇〇〇
▲整理七厘	八、一六〇、〇〇〇	十八年關稅	一一、七五一、五〇五
▲整理六厘	三二、六三五、三三七	十八年編造	三九、九〇〇、〇〇〇
▲十四年公債	三、七五〇、〇〇〇	十九年捲烟	三七四、〇〇〇
▲軍需公債	五、八〇〇、〇〇〇	十九年關稅	四一、二八〇、〇〇〇
善後公債	三、二〇〇、〇〇〇	十九年善後	三〇、四八〇、〇〇〇
十七年金融短期	五、七〇〇、〇〇〇	二十年捲烟	四二、〇八四、〇〇〇

支那資本機構・財閥・政權

一〇〇

十七年金融長期	四二、七五〇、〇〇〇	二十年開稅	六〇、八〇〇、〇〇〇
賑災公債	五、八〇〇、〇〇〇	二十年統稅	六二、四〇〇、〇〇〇
鐵兵公債	二九、五〇〇、〇〇〇	二十年鹽稅	六四、〇〇〇、〇〇〇
十九年關稅	一三、六〇〇、〇〇〇	二十二年愛國	一〇、七二四、〇〇〇
江浙絲業	五、一〇〇、〇〇〇	二十二年開稅	九二、五〇〇、〇〇〇
二十年賑災	二五、五〇〇、〇〇〇	二十三年開稅	八八、〇〇〇、〇〇〇
二十年金融短期	七七、四四〇、〇〇〇		
華北救濟戰區	三、二〇〇、〇〇〇		
計	二八三、七三五、三三七	合 計	五四五、二九三、五〇五

以上の總計が示す如く、民國二十四年一月現在の未償還政府内債額は、八億元以上に達してゐた。而してこの種の債券は、すべて財政部の經理に屬し、證券定期市場に於いて定期買入されてゐるものが多いためであり、銀行の手持ちにかゝるものも亦この種の債券である。右のほか財政部の經營にかゝる元年整理、八年整理、九年賑災、九六公債、一四庫券、秋節庫券等は、確實な擔保がなく、且つ利拂償還が行はれないためこれを前表から除外した。たゞそれらの各債券の銀行に手持ちされてゐるものが少くないと雖も、銀行の評価價格が頗る低く、自然銀行の手持ち有價證券中に於いて占める數字が極めて微弱である。その他の政府機關の經營するものには、鐵道部及び建設委員會の債券があり、その發行額が三千八百萬元に上つてゐると共に、各省市の地方債に至つては民國

二十三年度中に於いて發行されたもの十七種、その總額二億一千餘萬元に達しつゝあるが、その大部分は、これを以て銀行から擔保借款を受けてゐる上、その他の公私機關の發行にかゝる債券も亦、これを銀行に擔保として差入れられてあり、その額一億四千餘萬元と計上されてゐるとは謂へ、以上の何れもは、銀行の債券投資の部に屬し、銀行としては擔保貸出の項目のなかにこれを繰入れてゐる結果、手持ち證券とは何等の關係もない。斯くの如くして前表による民國二十四年一月現在の未償還債券八億元以上のうち、その銀行に手持ちされてゐるもの約三億元とせば、自餘の巨額の債券が、果たして何處へ行つたのであらうか。問題はこの點にかゝつて來る。元來我國の銀行の年末決算時に於ける手持ち有價證券に對しての評価價格は、額面より低く、且つ市價よりも低いのを原則となしてゐた。このことは資産の確實を求むる上に於いて當然であり、中國銀行の如きは、かゝる場合市價の八掛けとしてこれを計算した。その他の各銀行も亦ほゞ同様であつたことは謂ふまでもない。而して政府發行の公債未償還額八億元と謂ふのは單に額面額を以てするそれであつた。従つて二十八銀行に手持ちされてゐた政府債券三億元は、評價價格によつて計上された數字であるがため、この額は額面額の五億元以上であつたこと勿論である（政府債券の市價は約六掛乃至七掛の間であり、銀行の評価價格は、市價の八掛けでこれを計算したとして）。さらに銀行の兌換券發行に對する準備はその六割が現金準備であるに對し、その四割は保證準備であつた。そして保證準備のうちには、有價證券、商業手形、土地建物道契、及び聯合準備委員會の發行せる公庫證券等が含まれてゐた。民國二十三年度に於ける九銀行並びに四行準備庫の兌換券準備金と、十四銀行の領用兌

換券準備金の数字は次の如く、

發行兌換券準備金	五七八、八五七、一九二元
領用兌換券準備金	七八、四三一、一〇〇元
合 計	六五七、二八八、二九二元

であつた。この準備金のうち、保證準備として有價證券が幾何の額を占めつゝあつたかに對し、中國銀行の民國二十三年度に於ける例に徴するとき、次のやうに、

中國銀行の發券準備内譯（民國二十三年末）

發券準備 總額	二〇四、七一三、四六五元
保證準備中の有價證券	六一、六一七、二六八元

と、全額に對する百分の三十三を占めてゐたのであり、これを以て各發券銀行及び領用發券銀行に當てはめるとき、それらの各行の有價證券を以てする保證準備額は、二億元以上に達し、その有價證券の二分の一が政府の内債であると假定せば、結局一億元の債券が兌換券の保證準備として銀行の手中にある計算となる。右の計算によつて政府發行の内國公債八億元以上のうち、その四分の三は、前述の主要二十八銀行によつて占有されてゐる所以である。尙ほ且つ銀行の擔保貸出についてこれを謂ふとき、その證券擔保が決して鮮少ではなく、二十八銀行の擔保貸出中證券擔保に屬するものが最少限度三億元以上と想像することが出来る。この項目の中にはさきに舉

げた各省市及び公私機關の發行にかゝる債券總額三億五千萬元は勿論、その他政府發行の内國債券も亦相當の額に上つてゐるのである。勢ひ支那に於ける「持券人會」(著者註 政府債券の所有者が公開的に組織しつゝある團體)の代表は、すべて銀行界の主要人物であるのも亦理由はこゝに存し、銀行と内國債券との密接なる關係が、この點によつても亦證明されてゐた。銀行が政府債券に對し競つて投資した所以のものは(一)水旱匪患のち、農産の慘落下に於いて、内地の富民が、或は、通商大都市に逃避し、或は農村投資を忌避するに至つた等、内地の資金が都市に流入し、都市の資金が銀行に集中しながら、銀行としては凋落の趨向にある工業にこれを放棄し得なかつたため、必然的に公債投資に走らざるを得なかつた。(二)さらに銀行は高利を以て預金を吸収した結果、自ら利益の雄厚な方面にこれを運用せねばならなかつた際、政府の債券が、その利廻りに於いて頗る高度的であつたため、投資の對象をそこに集中せしめるに至つた。(三)國內の經濟組織が幼稚であつたため、銀行としては複雑な工業に對する投資をなし得なかつたに拘らず、公債に對する投資は安全で、且つ簡單であつたため、競つてこの方面に向つての資金の運用に努めて——等々の三つの原因に基いた結果である。この意味に於いて「一九三四年全國銀行年鑑」では、その緒論の中で「銀行は政府の公債發行の最も有力な代理人となり、その利潤の雄厚さに誘致されて成立した銀行が八十餘行に達した」と喝破してゐるのであつた(中略)。兎まれ銀行がその資金を生産の途に運用せずして、如實の繁榮を廣らし得たのであるが、それは一種の虚偽の繁榮であり、自らの墓穴を掘るに等しいものであつた。そもく我國の内債基金は多く關稅收入の項目から支出されてゐた。關稅收入

の多寡は社會經濟の盛衰に繋がつてをり、社會經濟の盛衰は、國民の生産力と、購買力の増減に關してゐた。銀行がたゞ眼前の利益のみを顧みて、根本の原則を忽視せんか、政府の内債は、さらに一再ならず償還の延期と利子の引下げを行はねばならなくなるであらう」(民國二十五年二月二十五日發行「銀行週報」沈祖杭氏の「吾國銀行と政府内債」を抄譯)。

X X

支那の銀行業者の營業の對照となつたところの土地建物に對する銀行資本の活躍状態は、精確な統計がないため、これを詳かにするを得ないが、銀行資本の土地建物への放資は、重要都市——とくに外國租界地及び租界地に近接した地帯——の土地に對してであり、一般的な土地建物に向つての投資ではない。外國租界地及びその近接地帯が、秩序の安全を保持され、とくに國際資本帝國主義の支那侵略のための、中心地帯として、その繁榮をも保障されてゐた結果、地價の騰上は、これらの土地建物に對する投資の隆興を促した所以であり、就中農村經濟の恐慌と、地方不安の増大によつて、土豪劣紳、官僚、地主等の上海を中心とする重要都市への逃避が行はれ、益々重要都市に於ける人口の増加を招致するに至つたなど、一層銀行業者の土地放資の激増を促すこととなつたのである。

然しながら、斯うした土地建物の價格は、上海事變以來、上海に於ける地價の暴落を來たした。それは金融恐慌により、銀行錢莊の貸出減と、地産商の金融難とに基因して賣物が殺到した上、大衆の貧乏化、それに基づく生活費の必然的節約、これらに伴ふ家賃回収難、借家人の拂底等々が、その主なる原因であつた。

斯くて民國二十一年以後銀行のこれに對する投資額の漸減を見せるに至つた。支那の銀行資本が、所謂地産に對する放資に趨つた所以のものは、單に利潤の獲得を追求するに熱中した結果からのみでなく、そこに銀行資本の本質的な要求がさうさした點をも亦看過することが出来ない。このことに關し章乃器氏の「上海地産の今昔」(民國二十四年七月發行の「社會經濟月報」)では、次の如く論斷してゐる。

「半植民地的經濟組織の下に於いて、外商銀行は、既に中央銀行としての、職能の大きな部分をすら受持つに至つた。而してこれらの外商銀行が、その資金運轉の手段として認めてゐたのは「道契」(土地登記證)と、外商の産業證券とであつた(中略)。地産が流通性の最高信用手段となつたと謂ふことは世界的な奇怪事であると共に、このことは畸形的發展中に於ける最も畸形的な一種の現象であつた。而かも斯うした現象の據つて來つた原因は、上海租界の主人——外商が、その自身の資金の運用を企圖したのと、専ら租界の假想的繁榮の造成を企畫しつゝ、何等支那の國民經濟の發展形態としての金融市場の發展を希望しなかつたのみでなく、同時に自身の資本市場の開發にのみ汲々として、半ば意識的に、半ば盲目的に地産の發展に努力したからであると謂はざるを得ない。尙ほ且つこれに附庸せる支那の金融資本も亦、手形割引業務の發展を計ることにより、現代的金融市場を完成せしめようとする智識がなく、同時に、さらに産業證券の發行と、その發展とによつて、一つの現代的資本市場を完成せしめようとするの智識すら持たず、却つて外商資本の背後に追隨しながら、地産の隆興を助長した結果が、當時に於いて、地産の高度化的流通の奇現象を形成させるに至つた所以である。斯くの如くにして、一九三二年

以前に於ける數年間の、上海の地價は、銀價の崩落に随伴しつゝ身騰を續けた。然しながら同時にまた家賃の收入は、これに比例して提高することを得なかつた。勢ひその収益は漸次降下するに至つたのである。共同租界の中央區に於ける地産の収益さへも、遂ひにその年利廻り三分以下となつた。斯かるとき外商銀行は依然低利を以て、それに對する擔保融通を計つたとはいへ、その年利は五、六分を下らず、自然その収益は比較的遞減しなかつた。斯かる不合理な情勢の下に於いて、上海の地産は、必然的に次の如き二つの方向への發展を過程したのである。(一)投機的買入(それは短期間に轉賣して高度の利潤を計るにあつた)ため、利息の負擔の如きは問題でなかつた。(二)高價の建築の隆興(これは収益の増高を求めらるゝにあつたが、一種の投機的危險の伴つたことは明白であり、それと共に爾來建築の發達が地産自身の矛盾を形成せしめるに至つた)——こゝに謂ふところの地産自身の矛盾とは、高價の建築が必然的に家屋の過剰を引起し、それによつて地價を低落せしめる原因を造つた事實を指すのである——。然るに經濟恐慌は、資本を集中への段階にまで進めしめるに至つた。即ち「九・一八」「二・二八」事變は、上海の假想的繁榮を打破して、中小工商業者の破産が、自然資本の集中を促進した。かゝる際上海の南京路に巍然として聳立した大百貨店は、必然的に中小商店に致命的の打撃を與へた。その結果中小商店の破産は、南京路一帯に於ける地産の没落を促成せしめねば熄まなかつた。その他外商はその勢力の伸展を計り、市政當局が地稅、家屋稅の收入増加を計つた。さらに越界築路の方式によつて租界の範圍を擴張せざるを得なかつた。現代的交通の發展は、市街接續地の家屋をして市區の人民の居住に適せしめた。以上の如き地産自身の矛

盾の展開は、必至的に租界中央區に於ける地價を惨落せしめたのである。就中上海市政府の新市區の建設は、租界地産に對して打撃を與ふること夥しかつた。但し上海の地産にとつての最も致命的絶大な打撃は、米國の銀政策の實行であつた。元來上海に於いて地産の暴騰を促した理由は、一九三一年以前の銀價の慘落にあつた。然るに一九三一年以後、銀價の恢復は、必然的に上海の地價をして低下せしめねば熄まなかつたのである。尤も一九三四年六月までは、尙ほ上海には依然空前の巨額の銀を保有してゐたため、地産は相變らず資金融通の手段となり得た結果、地價の低下を示現したとは謂へ、些程峻烈ではなかつた。然るに一九三四年の秋以降、上海の外商銀行は、その所有銀の大量を海外に輸出した。この手持ち銀の海外流出は、同年末に至つて終熄したと雖も、これによつて外商銀行の手持ち銀は、三億元から五千萬元内外にまで激減するに至つた。外商銀行の手持ち銀の減少は、當然營業上に於ける信用の收縮を來たし、同時に從來彼等の信用の膨脹の主要對象であつた地産は、必至的にその打撃を受けざるを得なかつた。彼等は單に新たに地産に對する擔保貸出をなし得なかつたと共に、從來の分に對しての處分をも急いだのであつた。上海金融市場に於いて、信用手段の第一位を占めつゝあつた「道契」は頓みに流通しなくなつた(民國二十四年七月發行「社會經濟月報」に於ける章乃器氏の「上海地産の今昔」の一部を抄譯)。

第五節 銀行資本の發展を圍む主要條件

前節に叙述した通り、支那に於ける銀行資本の集積と、その驚くべき程度にまで達するに至つた膨脹とは、結局著しく畸形的な發展過程の下に於いて、これをなされて來たのであるが、このことは支那の如く、生産信用が少しもその擴大を示現しないため、銀行資本が産業資本に轉化することを得なかつた上、投機や、商業の意義が何等減少しなかつた當然の結果として、銀行業者にとつては、その貨幣資本をば、依然流通信用や、投機信用に充用せしめ得る餘地が残されてゐたのみでなく、投機信用が、大都市を中心とする地産取引の旺盛、及び中央政府の公債濫發に伴ひ公債の投機取引が熾烈を極めるに至つたのや、爲替並びに標金に向つての投機的賣買を行つた等、甚だしくその範圍を擴大して行つたことは謂ふまでもない。

而してさうした傾向は、支那に於ける銀行資本をして驚くべき膨脹を來たさしめた本質的な要素であつたからである。即ちそれは――

「銀行は財界に於いて、最も有利な自身の地位を利用することにより、巨額の投機利得を擧げることが出来る。この種の差額利得は、その成立はもとより、運用資金の如何により、その大小の點に於いて差異があると雖も、銀行自身の資本の大小に對して何等依存關係のないことは、信用業務を原因とする利得、及び發行業務を原因とする利得の場合と全く同様であり、その然る所以は、投機利得に於いて最も明瞭であらう。で銀行が營む四種の業務――出納、信用、發券、投機から生ずる四種の利得のうち、第一のものを除けば、その大小はみな銀行が運轉し得る資本の總額に關係するに止り、該總額中の預金態の部分と、自己の所有に屬する部分との割合如何には

依存しないものである」(猪俣津南雄氏著「金融資本と帝國主義」から)。

等、等の定律に基き、支那の銀行業者としても亦、何れも銀行資本の投機信用、流通信用に對する充用の擴大に處せんがため、努めて資金の吸収に當つた結果であり、ここまでは、銀行資本集積の定律的現象であつて、先進資本主義國に於ける銀行資本集積の過程と何んの異なるところもなかつた。

然しながら、支那に於ける銀行資本が、これらの投機利得や、發券利得を中心とする流通信用より生ずる利潤と、預金の吸収(これは銀行のあらゆる預金吸收策と共に、慢性的な農村經濟の恐慌に伴ふ生産の萎縮、が却つて期せずして銀行預金を増加せしめた所以であることは前節に詳述した如くであるが)等に基き、直接、間接の動機によつて、驚くべき膨脹を現出するに至つたと雖も、これらの貨幣資本の流通が、相變らず、流通信用、投機信用の域から毫も進展しないところに――謂ふまでもなく産業資本に轉化し得ない環境におかれて居つた――支那の銀行資本を圍む基本的特殊條件が存在することは、前章各節で、既にこれを具體的に明らかにしたところであつた。

X X

而してこの特殊的條件のうちには、支那の銀行資本をして、恐慌の深化に伴ふ國民經濟の破局的危機の上に於いてすら、依然その優越性を保持せしめるに至らしめたところの本質的作用が含まれてをり、従つてまたそのためにもこそ、如實の畸形的な發展段階を過程せしめるに至つた所以でもある。謂ふまでもなく支那の銀行資本は公債地産、標金、爲替等々の投機事業の上に建築せられた假態的の殿堂であつて、産業の發展の上に建築されたのではなく、

勢ひ産業を基礎としない點に、その特異性をもつてゐたのである。従つて著しく脆弱たるを免れないことは勿論であつた。ここに謂ふところの支那の銀行資本の脆弱性とは、それが先進資本主義國の如く「銀行資本をもつて健全な金融組織により、その産業發達の結果が定められ、さらに銀行資本自身の基礎をして鞏固たらしめ、同時にその發展も亦健全に且つ合理化され得た」——秩序整然たる有機體でない所以を指して爾か謂ふのであり、自然極めて複雑な畸形的成分を具有してゐる點を看過出来ない。

X X

支那の銀行資本は、生産信用の不擴大——といはんよりは寧ろ生産信用との關聯の稀薄さ——に於いて、銀行業者のその方面に對する充用が、頗る不活潑であるとは謂へ、換言せば、銀行がその投下せる資本の寡少なるにも拘らず、各産業部門に於ける銀行資本の支配力は極めて高く、ここにまた先進資本主義國の銀行資本と、同じやうな形態の下に、優越な地位を占めつゝある一局面を展開してゐた。

と謂つたからとて、その優越な支配的地位と雖も、頗る消極的たるを失はず、産業資本との聯結の下に構成されたものでないだけに、その結果は、當然生産信用の擴大に對して、何等の作用を齎らさないものであつた。これを具體的に謂ふとき、支那の銀行資本は民族工業の發展に對しては、少しも積極的に融資の途を講ぜず、唯その生産品に對する擔保貸出乃至動産不動産に向つての抵當貸が、偶々市場の凋落に直面して回收不能に終つた際、工場を管理し、またはその機械建物等を差押へる程度の支配力の高さであつたのである。

現在紡織工業を主として、その他保險業、乃至交通事業等に於いて、銀行の管理、若くはその支配下におかれてゐるものが多いのは、この間の經緯を物語つてゐる。

このことは、銀行資本の畸形的發展が、同時に金融機構の正常的な發展をも過程せしめなかつたからであり、金融機構の健全な發展が展開されない結果は、益々銀行資本をして、生産信用の擴大の上に作用せしめる機會をすらなからしめたのである。

「我國の金融機構は尙ほ健全でなく、信用制度が改革されてゐない。それが故に産業債券及び商業手形が普及され難いのである。従つて工商業が銀行から資金融通を受ける場合は、依然商品を抵當となさねばならなかつた（工場機器の抵當も亦一部分を占めてゐたが、それは到底商品に及ばなかつた）。銀行も亦單に商品を以て工商業への投資に對する保障となした。斯うした抵當品は品質の不良、販路の廣狹によつて評價々格を定めたが、普通六、七掛を擔保價格とし、最低三、四掛を以てすることもある（中略）。工業の需要する資金は多く長期に屬し、商業は常に短期であり、兩者には多少の差異がある。故に金融機構が健全で、信用制度の發達せる國家には、所謂長期資金市場と、短期資金市場とがあり、前者は證券市場と稱し、後者を手形市場とも謂ひ一國の工商業の資金の融通はここになされ、銀行の資金運用はここで行はれ、中央銀行も亦その機能を展ばしてこれを操縦した。然るに我國の證券交易所は、單に政府債券の市場であり、社債及び株券は交易所に於いて、仲買人でまれにこれを賣買するのみ、正式に立會が開始されてゐない」（民國二十六年六月二日發行の「銀行週報」沈祖杭氏の「吾國の銀行と

工商業」から抄譯)。

とは、沈祖杭氏の解説するところであり、この點に關し、章乃器氏は、次の如く論じてゐる。

「一つの健全な金融組織には、二つの市場——長期資金市場と、短期資金市場——がなければならぬ。長期資金市場は産業證券市場であり、株券及び社債の引受けと投資とを以て工商業の資本を得せしめ、短期資金市場は、手形市場であり、手形の引受けと割引とを藉りて工商業の流動資金を得さしめるのである。然るに支那の金融業が國際資本帝國主義と、封建殘餘を以てする兩種の勢力の支配下に於いて、長期資金市場は「喧賓」に「主」を奪はれた形勢となり、短期資金市場は、反對に依然高利貸的商業資本時代の域を脱し得ないのである。上海には元來支那人の創設經營するところの證券市場を有し、華商證券交易所がそれであると雖も、その賣買するところのものは、單に政府債券のみに過ぎず、自然財政證券市場であつて、産業證券市場ではない。資本主義先進國に於いては、政府債券が、自然に證券市場で賣買され、その地位は産業證券が主であり、政府債券は賓である。然るに支那に於いては、さうでなく政府債券が主であり、産業證券は賓である。ここに於いて前述の如く「喧賓奪主」の第一の形態がかたち造られてゐるのであつた。そしてこの種の形態は、北京政府時代に於いて、當時の封建體系の下に於ける高利貸商業資本と軍閥、官僚の勾結により形成されたものである。と謂つたからとて上海には産業證券が存在しないのではない。外國人の經營するところの衆業公所と呼ばれるものがそれであり、その市場では一百幾十種に渉る支那に於ける外商の産業證券——著名なものは上海電力公司株券、上海電話公司株券、怡

和紡織株券等——に對する公定市價を決定してゐる。而して支那人自身には産業證券市場がなく、在支外人が反對にその産業證券市場をもつてゐるところに第二の「喧賓奪主」の形態がある。斯かる形態は、我等に對して、支那の民族工業資本が、自らの歩む途がなく、而かも國際資本帝國主義の勢力が、既に支那の産業界に於いて、その支配權を取得してゐる事實を明白に告げてゐるものである。短期資金市場に至つては、誰れも知る如く、支那の工商業の利息の負擔が極めて苛重であつて、華商紗廠聯合會の報告によれば、全國の紡織工場の生産綿糸の負擔する平均利息は、十番手一俵六元、十六番手約十元、二十番手約十三元、三十二番手の如き十八元に達し、原價採算總額の三分の一を占めつゝあるものゝ如く、借利率の負擔の高いものは百分の十二(年利一割二分)、最も低いものと雖も亦、百分の八乃至九(年利八、九分)であると謂はれてゐる。同時に外商の在支紡織工場の負擔する借款利息・利率は、大體支那人經營工場の約二分の一であり、在支日本紡織工場が、支那人經營工場を壓倒しつゝある所以は、こゝに重大な原因が潜在してゐた。斯くの如くにして短期市場に於ける高利貸形態の存在には、自然種々の原因があると雖も、(一)その第一は高利貸政府債券の存在にある。そのために公債庫券の収益は、普通に於いて年利廻り一割六分以上であり、勢ひ産業界をして必然的に低利の資金を求めざることを不可能ならしめた。(二)その第二は信用手段の不發達にある。若し手形を利用して信用手段たらしめ、手形の引受けと割引の方法を以て、短期資金を貸出さしめるならば、そこには資金の停滯がなく、同時に利率の高低を平均させることが出来る筈である。然るに現在の状態では、短期資金の貸出は、依然原始的の帳面貸と抵當貸付の方式の下

に滞留してゐる。従つて一旦資金を放出した後は、その記帳を他に譲渡することが容易でなく、自然流通不能に終るのみならず、自身に資金の缺乏を來たした際の如き、毫も辦法がないのであつた。これに反して割引手形はさうでなく、隨時にこれを以て別人からの割引を受け、資金の融通を計り得るのである。現在各方面に於いて、この手形の引受けと、割引の提唱が行はれてゐると雖も、尙ほこれに對する不賛成者の多いのは、手数料の問題が、その障礙の要點であり、このことは封建勢力が、依然新式信用手段の創造を阻止しつゝあるからである。兎まれ支那には正當な長期資金市場がないために、新興事業が發展しないのであり——株券の發行が容易でなく、既設の産業も亦往々充分な資本を募集することが出来ない——、高利貸的短期資金を以て長期資金となさなければならぬところに、重大な障礙があり、同時に低利の短期資金市場の存在を缺くことも亦、支那の工商業をして、その原價採算上に於いて、在支外商の前に叩頭せしめつゝある所以で、この二つの資金市場を改造することが出来ない限り、民族資本建設の大任が果たされない（民國二十四年八月二十七日發行の雜誌「通俗文化」誌上に於ける章乃器氏の「中國金融の現勢」を抄譯）。

X X

さらに支那の銀行資本の發展を圍む主要條件として擧げなければならぬのは、銀行資本自身が、濃厚な封建性を具有してゐる點、及び銀行資本の國際金融資本に對する附庸關係であるが、このことは、支那の社會全般が、半植民地、半封建性的經濟機構の域を脱し得ない限り、それを構成する一分子としての銀行資本も亦、同様の特殊性を

具有しなければならぬ所以であり、支那社會經濟の特質が、同時に銀行資本の特質として、そこに反映してゐるのであつた。

謂ふまでもなく、支那は純粹の資本主義的國家ではないが故に、資本家自身に社會經濟、産業を支配する力をもつてゐなかつた。國際資本帝國主義と封建勢力とが到るところに於いて優勢な地位を占め、これがために銀行資本自身も亦この二つの勢力に参加してゐるのであり、従つてその發展が純粹な資本主義的ではなく、及び半封建性的たらざるを得なかつたのである。

支那の銀行資本が、純粹な資本主義的發展を過程し得ず、同時に半封建的な畸形的發展を過程するに至つたことは、前各節に於いて、これを概説したのであつたが、いまこれらの諸項につき——とくに銀行資本の封建性を主として——若干の考察を加へんがため、左に章乃器氏の「貨幣金融に反映するところの中國社會」と題する論文から、さうした部分を摘録しよう。

「支那に於いて一般的に行はれた貨幣擄取の方式は、（一）先づ第一に分量の軽い銅元を以て分量の重い銅元と交換することによつてなされた。斯かる事例は四川に於いて多く散見するところであつた。（二）その第二の方式としては、品位の低い補助銀貨を發行することによつてなされた。斯うした事實は廣東に於けるそれがその代表的であつた。（三）第三の方式としての貨幣擄取は、品位の低い銀貨の發行によつてなされた。この種の方式は四川に於いて最も顯着な發展を示した。（四）とくに貨幣擄取の普通方式としては、第四に紙幣の發行によつてなされ

たそれを擧げねばならぬ(中略)。さらに封建性の貨幣擄取に於いては、軍閥との關係を注意しなければならぬであり、同時に商業資本下に於ける貨幣擄取をも忽視すべきではなかつた。商業資本下に於ける貨幣擄取の内容は「銀兩」と「劃洋」(小切手の一種で振出人が錢莊に所持人に對して洋銀を以てする支拂ひを請求する手形)と、「私票」の三つに分たれてゐた。元來商業資本は、歴史的には封建制度を動搖せしむべき一つの素因であつたが、それ自身が依然封建制度の下に立て籠つてゐるところの一つの存在であり、「銀兩」は疑ふべくもなく商業資本に於ける一種の貨幣を代表してゐた(中略)。「銀兩制度」の下に於ける封建勢力と、帝國主義との勾結關係の、最も明らかに表現されてゐたのは、上海に於ける錢業公會であつた。往時華商銀行は銀兩のもつ貨幣としての資格を支持する目的上、外商銀行組合に對し、「寶銀」(馬蹄銀)の品位を擔保保證した。これがために上海の「規元」は、幾十年來、その大量の收授の用をなす資格を維持して來たのであり、廢兩改元の運動が、新興銀行資本の封建勢力に對する一種の攻撃であり、十餘年に渉る長期の闘争中、外商銀行は、錢莊と其の共同戦線の上に立ち、銀兩の存在を保持した。「劃洋」は現在に至つても尙ほ幾多の地方に残存してゐる——浙江省の杭州、紹興、寧波等、に於いて——。新興銀行資本が、幾度かその廢除を力争したが、結果は依然「改頭換面」的に保存されてゐるのである。それは錢業が二種以上の異つた貨幣の流通の上に於いて「加水」(打歩)と「去水」(劃引)等の名目を以てその利潤を取得するための要求から出た結果である。「私票」の發行も亦、依然ある地方に於いては、紳富、地主、より雜貨店、理髮店等々に至るまで、これを發行し、新興工業——炭礦、水電、紡織會社等々からも

亦發行されてをり、尙ほ或る地方では「私票」が手形の形式の下に發行されてゐる。杭州の「上單」重慶の過去に於ける「劃條」及び現在の「本票」等は、事實上、手形が帯びるところの普通の信用手段の作用を超過して、既に一種の流通貨幣とすらなるに至り、手形發行の動機が、該地方の通貨の缺乏に原因してゐたなど、必然的に既に貨幣の使命を負ふてゐるのである。嚴密な意味から謂ふとき、手形は客觀上、幾多の通貨を代替する作用をもつてゐるが、主觀的には、通貨に代替する作用は、これを許されないのであると雖も、上海の「莊票」は、錢業同業公會の業規に「何人を問はずその所持する莊票はこれを現金と見做す」と規定されつゝある如く、その貨幣性が限りなく高度化されてゐるのである(中略)。現在に於ける軍閥と、商業資本との關係を探究するとき、或る地方では軍閥と、商業資本とが打つて一丸となつてをり、或る地方では、交互的に作用しながら、勾結して立ち、或る地方では相互排斥の作用を起しつゝある等の諸事象を發見し得る。過去に於ける東三省の軍閥は、特産市場壟斷の方式の下に於いて、同時に商業資本家であつた。而してその壟斷的勢力は同時に民間の商業資本を排斥した。軍閥が貨幣擄取を施行するとき、中小の商業資本家は物價提高の方式を用ひて、さらに大きな利潤を取得し、大商業資本家は、貨幣の兌換、賣買、運輸の上に於いて暴利を取得した。四川省の軍閥が「當五十」の銅元を鑄造し、且つ強制的にこれを通用せしめた際の如き、品位の高い「當二十」の銅元が、グレシアムの法則の下に、驅逐されて行つたのに乗じて、奸商はこれを長江下流に運輸しつゝ暴利をむさぼつた。斯くの如くにして軍閥が品位の低い惡貨を鑄造行使する毎に、奸商はその間に介在しながら巨利を取得したのである。過去に於ける多

くの銀號、票號等の資本主義は軍閥であり、大商業資本家が、さらに一步を進めて軍閥と勾結し、或るものは政治的消息を探り、或るものは惡辣な貨幣政策を施行せしめて、その間に暴利を取得した事例が少くないのであつた。即ち斯うした現象が示す如く、商業資本家と軍閥とが、往々「二位一體」となるに至つた。同時に軍閥は往々また帝國主義の維護を得て、時には、彼等が生産事業に投資し、該地に於ける重要な工業資本家となつた事實をも看過出来ないのである。従つて軍閥は單純な封建勢力ではなく、封建の外殼の下に於いて、資本主義と、帝國主義との混合勢力を包含してゐる點をも亦、これを認識しなければならぬ。この意味から謂つて支那が、半植民地の國家でなかつたならば、商業資本が封建制度を動搖せしめた後、まつしぐらに、資本主義に過渡したであらうとは謂へ、不幸にして支那では、封建制度が相當の動搖を來したに拘らず、未だ資本主義の産生を見るに至らなかつた際、既に半植民地に變成した結果、自然封建殘餘の軍閥、官僚政客が、帝國主義の維護の下に於いて、變質しながら、新らしき封建勢力となつて了つたのである。そしてこの種の變質的封建勢力は、決して商業資本のよくこれを動搖せしめ得るものではなかつた(中略)。支那に於ける金融市場の中心は周知の如く上海である。上海の金融市場には、三つの集團——外商銀行集團、華商銀行集團、錢莊集團——を包含してをり、そしてこの三つの集團は、分別的に三つの勢力を代表してゐる。謂ふまでもなく、帝國主義、新興資本、封建勢力の三つの勢力がそれである。錢莊は事實上、純正なる商業資本を代表してゐることは前述の如くであり、商業資本は依然封建制度の下に立て籠つてゐる一つの存在であるがために、自然錢莊は封建勢力を代表するものであると認

めざるを得ない。内地の錢莊は疑ふべくもなく、高利貸商業資本の供給者であつて、上海の錢莊も亦、その發源地が、南市葦市街であつた。爾來葦市街一帶の雜穀商が發展しつゝ、高度化的形態の商業資本にまで到達し、錢莊は、これらの雜穀商に資本を供給する金融機關となつた。大體に於いて半植民地の國家内にあつては、比較的高度な封建勢力は、帝國主義と勾結すべくこれを免れなかつた。上海の錢莊が必然的に外商銀行買辦と「二位一體」となるに至つた所以はこゝにあつた。外商銀行は剩餘資金の貸放の上に於いて、錢莊をその媒介者となすために、これを需要し、錢莊は、またその「莊票」の流通上に於いて、外商銀行買辦の推舉を必要となした。同時に資金の流通上に於いても亦外商銀行買辦の後援を必要としたからである。斯くの如くにして「莊票」は、外商銀行買辦からその收受の拒絶を受けないことを必須條件として、然るのち市場に流通し得たのであつた。若しさうでなかつたならば、輸入外商をして先日付の莊票を收受せしめ得ない上、それによつて輸入貨物代金決済の用を果たさしめることが出来なかつた——輸入外商の收受した莊票は必ずこれを外商銀行に振り込んで、その輸入爲替の決済の用に充てたからである——のみでなく、斯やうにして主要な輸入貨物代金の決済の用をなした「莊票」は、自然その效用を失ふ恐れがあつたからである。そのほか錢莊の製造した「銀兩」と「劃洋」とは、前述の如く、その封建性を遺憾なく發揮してゐたのであり、さらに錢莊の承襲した「行會制度」は全く封建性たるを失はなかつた。斬新なる華商銀行は、表面上自然新興民族資本を代表してゐたが、然しながら畢竟それは變質的軍閥官僚の封建勢力であつたがために、前述の如く既に資本主義に代つて興起し、一面封建制度の存在を延續

すると共に、一面民族資本の發展を阻礙しつゝ、必然的に彼等の勢力は新興金融資本勢力のなかに参加するに至つた所以である。過去に於ける幾多の華商銀行は、すべて軍閥・官僚の背景を有してゐた。現在各處の省銀行は、新たに紙幣發行上に於ける努力を重ね、發行制度の紊亂が、まさに一つの新たな局勢を展開しつゝある。このことは省を中心とする統制經濟の風潮と同じく、これを以て封建勢力に走る上の一の新しい段階であると評價し得るのであり、決してこれを以て樂觀的に彼等の没落であると評價することが出来ない。さらにこれを營業方面について謂ふも、支那にはまだ相當の程度にまで成長した工業資本がないため、畸形的に發展した銀行業の投資が、銀行營業の動向をして、一部分は商業資本の方面に於いて發展せしめ、別の一部をして財政の方面に於いて發展せしめた。商業銀行の地産上に於ける投資は恐らく發展の絶頂に達してゐたであらう。斯くの如き營業上の畸形的發展は、依然として商業資本の典型たるを失はなかつた。財政方面に對しての發展の結果は、公債投資中に於いて新形態の高利貸を造成した。斯やうにして斬新なる事物はすべて封建的色彩に染めあげられ、半植民地形態が尙ほ掃蕩されないために、支那社會をして進歩的段階を走ることを不可能ならしめてゐるのである。外商銀行は帝國主義の勢力を代表し、疑ふべくもなく、依然華商銀行の勢力を壓倒しつゝある。華商銀行中に於いて預金の最も多い中國銀行の預金は、民國二十二年末に總額四億元に過ぎなかつた。而して匯豐銀行のそれは、同時期に於いて香港弗八億七千萬元に達してゐた。最近の銀恐慌中に於いて外商銀行は、大量の現銀を輸出し、支那の幣制の基礎を根本的に動搖せしめた。斯くの如くにして我等は適確的に謂ふことが出来る——一つの國家

が完整した金融壁壘をもたぬことは、そこに安定せる貨幣制度を樹立することが不可能である——と(中略)。外商銀行の偉大なる勢力は、一面に於いて支那の軍閥・官僚らが彼に替つてこれを造成せしめるに至つたものであり、この點に關しては、次の事例を引用することが出来る——(一)「日本人の調査による支那富豪の匯豐銀行に於ける定期預金は、二千萬元以上もの五人、一千五百萬元以上もの二十人、一千萬元以上もの百三十人である」と。(これは銀行週報二四七期上海の商場と銀行のなかに掲げられた一節であるが、この數字は匯豐銀行の決算報告表に擧げられてゐる數字を超過すること夥しいため、信をおき難いとは謂へ)——(二)「支那富豪の外國銀行に對する預金額は二十億元に達してゐる」(民國二十二年九月十三日北平世界日報)——以上列擧せる事例の確實性は、自然疑問であるが、官僚・軍閥の所得せる資財の多くが外國銀行に預金されてゐることは周知の通りであり、今年の十一個月間に支那人預金の香港紙幣に兌換されたもの一億元内外に達したのを見ても道般の経緯を窺知し得るのである。上海に於ける銀の海外流出は、支那幣制の破壊に對する一つの主要な素因をなしたが、この場合外商銀行は寧ろ受動者に過ぎず、主動的人物は、依然預金の最も多い支那軍閥であつた。封建勢力と帝國主義との勾結はこゝにまた端倪すべからざるものがあつた(中略)。上海には現在二つの證券市場——一つは外商の組織にかゝる業業公所で、他の一つは華商證券交易所である——がある。前者の經營するところの主要なものは産業證券であり、後者の經營するところの主要なものは財政證券である(中略)。上海證券交易所の我等に與ふる印象は、支那の生産資本は殆ど完全に帝國主義の勢力の下にあり、微弱な民族資本は論ずるに足りない状態

にあると謂ふことである。とくに「九・一八」事後の支那市場には、到るところに一種の凋落的な惨状が表現しつつ、新設された工商業は、大部分規模狭小にして民族資本としての意義が微弱であり、而かもその新設されたものと雖も數に於いては倒閉したものゝ多いのに及ばなかつた。然るに何んぞ知らんや、帝國主義の支那に於ける産業資本の發行せる産業證券が、二年半の間に於いて一億元の巨額に達したのであつた。このことについて我等の注目に値する點は、この種の外人の在支資本の發行——産業證券——に對する投資者の大半が支那人であつたことである。米國系の上海電力公司の優先株の株主は、一九三三年の同公司の報告に徴するとき、百分の六十九までが支那人であつた。銀行に於ける預金以外に、支那の紳豪と帝國主義とを勾結せしめるに至つた過程があり、我等の忽視を許さないのである。同時に華商銀行が外商の各證券に對して投資せる額も亦少くないのであり、斯うした點に民族金融資本が、民族工業資本の發展の上に、營業の基礎をおいてゐないと謂ふことを表示してをり、而かも前述の各事例——支那の金融資本が商業資本及び財政・資本の二つの方面の發展に向つてゐる——と謂ふ點を除くほかに、また帝國主義の在支資本勢力をも援助しつゝある事實をも、そこに表示してゐるのである。尙ほ我等は再びこの二つの證券市場に於ける利率關係を檢査するとき、そこに一つの奇蹟をも發見するのである。即ち華商證券交易所に於いては年利六分の政府公債の市價が額面額の八割以上を表示し得ないため、實際上の利廻りが一割二分以上となり、著名な銀行株券の偶然發現された市價が、一割以上の利廻りを表示してゐたのに對し、衆業公所に於ける各株券の市價は、普通五、六分の利廻りに過ぎず、年利六分の債券の市價が往々額面以上

にまで飛躍することさへなしとしない等々の現象がそれである。このことは我等に對して次の事實を暗示してゐる——即ち同一の上海金融市場に於いて前者は封建性的高利貸が依然民族金融資本の一方面に表現されてをり、後者即ち外商金融資本の方面に於いては、別の一つの異つた状態を表現しつゝあることを——。斯うした峻烈な利率の差異の下に於いては、支那の民族工業が、帝國主義の資本勢力と競争することなどは絶対に不可能とされてをり、かくて以上の情形に従ひ、我等は次の如き結論を下すものである。

(一) 貨幣金融に反映したところの支那社會は、帝國主義と、封建殘餘の統制の下に於ける一つの半植民地形態であり、この種の情態はある一つの帝國主義の特殊發展の上に於いて最も顯著に表現されてゐる。

(二) 典型的な國際共同市場たる長江下流に於いては、近年來幣制上、一つの表面的の獨立を取得たと雖も、畢竟金融壁壘の不完整のために、今次の銀恐慌が既にこの表面上の獨立的幣制を連帶的に動搖せしめねば熄まなかつた。内在する半植民地形態に對して忽視することを許されない所以はこの點にある。

(三) 上海金融市場の表現するところの形態に於いて新興の民族金融資本は、表面上侮るべからざる勢力を取得たと雖も、畢竟そこには、一つの相當の程度にまで成長した民族工業資本を、その營業の基礎としてゐない結果、植民地化の方面への發展に向はざるを得なかつた。事實上新興金融資本發展の動機は、本來民族工業資本の要求から出たものではなかつたのである。

(四) 支那の封建勢力を代表せる軍閥・官僚は、事實上帝國主義の維護の下に於いて、「借尸還魂」的に一種の變

質的封建勢力となつた。時代の上に於いて彼は資本主義に代替し、半植民地中國にあつて興起した。それは過渡的商業資本が、もとより彼を動搖せしめる能はず、新興の民族資本も亦、彼の基礎を覆へし得なかつたからである。そして反つて彼は支那が一步一步植民地化への段階を進めつゝあるとき、彼の新姿態が展開された。この種の新姿態は往々封建的形式の下に於いて新しい金融的生産的手段を包含してゐた。これを簡単に説明するとき、支那には一種の自救の方法がなかつたため、封建勢力は帝國主義勢力と同時に前進しなければならなかつたのであり、そしてその前進は支那がまづしぐらに植民地化した時はじめてその歩を止めるであらうからである」(民國二十四年一月十五日發行の「中山文化教育會季刊」に於ける章乃器氏の「貨幣金融に反映したる中國社會」を抄譯)。

X X

支那に於ける銀行資本の膨脹は、著しく變態的な發展の段階を過程しつゝ、而かもそれ自身に幾多の特殊性を具してをり、従つて頗る危険な基礎の上に立つてゐることは、屢述の如くであるが、近來支那經濟の崩壊、とくに一九三四年末の金融恐慌爆發以來、支那の各産業部門——農、工、商——は、何れもさらに、新しい没落の段階にまでその歩を進めた。

斯かる情勢の下に於いて、支那の貧民大衆の消費能力の急激な低下は、遂に銀行資本にまで深刻な影響を齎らざるを得なかつた。即ち銀行資本にとつては、恐慌の深化と共に、その利潤が甚だしく低下するに至つたのみでなく、公債、地産、その他の商業投資に對する從來の活躍舞臺が、急速なテムボを以て縮小されざるを得なくなつたからである。

投機信用と、流通信用に充用されつゝあつた資本は、投機や、商業の意義の縮減に伴つて、その充用の範圍が狭められた結果、當然そこに利潤の低下が運命づけられ、利潤の低下によつて銀行資本自身の運命をすら、危険に曝らさなければならぬ破目に陥つた。

斯くて「投機や、商業の意義が減少するにつれ、それらの貨幣は、ますます産業資本に轉化されざるを得なかつた」——のが、銀行資本發展の定律的なコースであるにも拘らず、産業資本との結合をもたぬ支那の銀行資本は、こゝに至つて、今後果たして「何處へ行く」かと、自身の運命を決すべき、重大な問題となつて來たのである。

「世間一切の畸形的發達は、もとよりそこに特殊の理由があるとは謂へ、同時に堅實な基礎の具有が不可能であつたからである。然しながら堅實な基礎のない畸形的發展と雖も、往々暫時、その發展の過程に於いて別の素因により、畸形的發展を正常的な發展に變轉せしめ得ることがある。我等が支那の銀行資本の畸形的發展の前途を推測せんとするに當つても亦、自然前述の原則を無視することが出來ない。この意味に於いて一般の工業をして、銀行資本の發展過程中に於いてその量と質とを適當に發展せしめ得なければ、銀行資本の畸形的發展をしてこれを正常的な發展に變轉せしめることをも亦得ないのである。然るに現在の銀行資本の發展には、さうした基礎がなく、自然自身の繁榮を保持することすらが不可能な前途の前に曝されてゐる。既に屢説した如く、金融業の基礎は、依然工商業の上に樹立されなければならぬのであり、凋落的な工商業の基礎の上に表現された金融

業の發展は恰かも枯木に咲いた花の如きものであつて、それは造花か、若くは寄生植物の花でしかないからである。かゝる場合造花であつたならば當然それには生命がなく、寄生植物の花であつたならば、それは結局國民經濟の寄生物であつて、國民經濟に對しては、もとより有害であるに止らず、それ自身も亦その繁榮を永續し得ないことは勿論である。これを具體的に謂ふとき、この種の畸形的發展は寄生的方式の下に於いて、一面支那民族の植民地化を促進せしめ、他の一面に於いては、自身がさらにその發展を一步進めて、支那の植民地化の完成された時には、依然たる帝國主義の壓迫の下に於いて、漸次消滅して行くべき運命をもつものである(中略)。一般的には銀行業の前途に對して、銀行の經營が比較的簡單であるがため、銀行の危険性も亦比較的輕微であるとの理由により、至極樂觀的たるを失はないのであると雖も、事實上銀行の經營は左様に簡單でなく、その危険性も亦世人の認識する程輕微ではないのであつた。萬能は支那官僚の特色であり、銀行經營が簡單であるとの認識は、官僚萬能の特色を代表してゐる。もとより國債投資を以て主要な營業となしつゝある支那式銀行にとつては、その經營が確かに比較的簡單であつた。然しながら國債の投資にも亦一種の熟練なる技術と、同時に事務の組織、業務の管理と、準備金の充分な見積額を必要とした。尤も支那の銀行事業は既に四十餘年の歴史を經、この期間中に於いて一般的經營技術に相當の進歩を來たし、洋式銀行は既に二十年以前から存在してゐたと雖も、現實的には幾多の銀行と信託公司とが倒閉し、而かもその倒閉の原因たるや何れも經營その宜しきを得なかつたからであつた。このことは銀行の經營が、一般的に認識されてゐるが如く、しかく簡單でない所以を表現してゐるのである。

ある。さらに銀行の營業の危険性に至つては、これまた普通に評價されつつあるが如く輕微ではないのであつた。もと／＼銀行の固定資産が比較的僅少であつたが、銀行の契約上の責任は無限的であり、幾多の銀行の破産は、幾枚かの投機買賣契約の作用に過ぎなかつた。況んや嚴密な組織と管理とのない官僚式銀行に於いては、投機買賣の契約に對し適宜な制限と監査とがなかつたに於いてをやである。その他法律上の責任問題、行員の不正問題、等等すべて銀行の基礎を動搖せしめるに足るものであつた。上海租界に於ける土地建物の價値は、現在既に百分の三十以上の暴落を現し、共同租界内の空家は、全營業家屋の百分の十四を占め、減租運動が猛烈に醗酵し乍ら、經濟恐慌をして、緩和の機會をなからしめつつある際、土地建物の前途は、多々益々悲觀されて來た。さらに國債の市價も亦、今年の七月を最高として、最早高利貸の領域から離脱せんとしてゐる。そしてこの場合、若し國家財政が常規的であつたとしても、國債に對する投資は、既に暴利を取得することが不可能とされたと共に、これに反して國家財政をして常軌を逸せしめ、益々國債の濫發に走らしめんか、その結果は、必然的に銀行業の禍根を招來せしめなければ熄まず、何れにしても、銀行資本の國債投資にとつては、既に行き詰りに直面せざるを得ないのであつた。斯くの如くにして、發展過程中の銀行業をして、繼續的に地産と國債とを、その營業の目標たらしめることの前途が遮斷されるに至つたのである。斯うした際、偶ま「資金歸農」のスローガンが高唱され出した。そしてこの「資金歸農」は、銀行資本にとつて、頗る好ましいことであつたとは謂へ、それには次のやうな條件が伴つてゐた。その第一は、銀行の資金をして單に農民の消費に供給せしめるに過ぎず、農民の生産

には、これを供給し得ないため、銀行はその流動資金を凍結させることとなり、遂に自身を危機に陥らしめねばならなかつたのと、その第二は、農民の利息負擔をして、その利潤を超過せしめ、そこに「資金歸農」は、當然農民への搾取を加重し、同時にそれが却つて農民の救済にはならないと謂ふ點にあつた。而して以上の二つの有害なる條件は「資金歸農」の過程中に表現されるに至るのみでなく、さらに少くとも農民の収益をして、安定的の保障を得せしめないものである。而かもそこには農民の収益をして充分に保障せしめ得ないばかりか、農作上の損失の結果が、生産を目的として借入れた資金をして消費に轉化せしめねば熄まぬ結果、農民救済の資金が却つて搾取に變成することとなり、斯うしたのちは、一面に於いて水旱の防止に於いて健全な設備を怠らしめ、他の一面に於いては、國外農産品と、工業生産品のダンピングを防禦するの壁壘をなからしめた。従つて水旱がもとより災害となつたに止らず、豊收も亦一種の災害となり、斯くの如くにして農民収益の保障は、これを何處にも求めるの餘地がなかつたのである」(下略) (民國二十三年十二月一日發行「時代日報二週年紀念特刊」章乃器氏の「我國銀行業の前途」の一部を抄譯)。

とは、斯かる關係——支那に於ける銀行資本の前途に對して——、一般的に認識されつゝある要點であつた。

第四章 民族資本の買辦性とその問題

第一節 緒言

以上各章に涉つて、支那に於ける民族資本の發展過程及び民族資本機構の特性、作用等をほゞ解説し得たのであるが、本章では、再び總括的に「民族資本の本質」についてこれを解説しておきたい。

そも、支那の社會的經濟機構は、所詮半植民地の社會的經濟機構であり、さらに近年來、國際資本帝國主義の支那に對する進出が、益々強化するに従ひ、半植民地から植民地化へのコースをすら進まんとしてゐるのである。それは世界恐慌を、最近の動機として強化するに至つたところの經濟的國民主義が、アウトアルキーのためにあらゆる手段を弄して、自國本位の經濟政策を強行せしめ、その結果、半植民地に對する攻勢力も亦、さらに新しい趨勢を特色づけて來たからであつた。

本來、資本主義の發展原則は、非資本主義的經濟圏の資本主義化——正確には先づ資本主義的支配から、次いで必然の趨勢として、それが自己に對抗するものをしての資本主義化への征服——にあつた。先づ國內の農、山、漁村の實物經濟を貨幣經濟化することによつて、剩餘利得の資本主義的吸収を完成し、それによつて國民經濟を工業化し、世界工場をして必至的に世界農園との相互扶助的連帶化を要求した。しかしながら、この段階に於いては、

自由通商乃至國際主義でこと足りた。然るに世界大戰によつて國際分業の分野に大きな變化を生じ、世界工場たる歐洲は、世界農園の一部たる米國、東南亞細亞の工場化に伴ひ、世界市場の獨占を失ひつゝ、貿易戰線に異常を呈し、糧食せられるだけ、こゝに双方は、舊市場の恢復と、新市場の獲得を繞つて、企業としても、國民經濟としても、生きるか、死ぬるか、競争を激化せしめた。その國家的努力が、經濟的國民主義となつて現はれ、經濟の統制化乃至計畫經濟化を產生するに至つたのであるが、その勢に拍車を加へたのが、世界恐慌であつた。抵抗の強化は、抵抗の少ない方面に活路を見出すべく轉向せしめる。失はれたる舊市場の補償は、當然に自國の經濟圏内に求められ、新興國の進取的、舊保護主義に加へて、先進國の防衛的新保護主義が促進せられ、植民地は政治的に自治主義をとると、同化主義を採るとに拘らず、本國經濟の培養化たらしめ、その領有の意味を一層強められ、植民地の貿易上に於ける、本國貿易の割合の躍進を見つゝあるのが、最近の國際經濟の傾向である。

右の如き傾向が、半植民地に對しても亦、さらに新しい攻勢力を加ふるに至つたのは、必然の徑路であり、ここに於いて半植民地に於ける、民族資本の墮つべき途も亦、自ら定められて來たのは謂ふまでもない。

斯くの如くにして、半植民地支那の民族資本は、益々買辦化し、その經濟的機構が、半封建性の上に立つところの買辦資本主義經濟化するに至つたのである。

就中前各章に於いて叙述した通り、民族資本を構成する要素のうち、殆ど支配的地位を占めつゝある銀行資本——それは國際資本帝國主義の進攻から來る、直接的壓力を受けることの、比較的輕微であつたがために、及び産

業資本が、國際輸出資本、乃至國際商品の進出による攻勢力に基いてその發展を停滯し、萎縮するに至つた結果、商業資本の畸形的發展に随伴しながら、驚くべき膨脹を來たして行つた銀行資本なのである——すらが、商業資本の買辦性と共に、買辦資本化への段階を進めつゝ發展したのである。この意味に於いて「中國金融資本論」の著者の如き、大要次の如く極言してゐるのである（但しかゝる論斷は多少誇張に失する點なしとしなが、本節では參考のため摘録することとした）。

「支那の銀行は、最近十餘年來、巨大な發展を示して來た。本行及び分支行が歴年増加し、預金、貸出額が、日増しに擴大しながら、紙幣の發行額も亦、愈々増加するに至つたと雖も、然しながら、そこには依然一個の畸形兒に過ぎないところの金融市場を構成してゐた。即ち支那の民族資本は幾十年來の奮闘を經過したにも拘らず、完全に寄生狀態から離脱することが出来なかつたのである。かゝる場合、被寄生體は謂ふまでもなく、國際金融資本の支那に於ける勢力——在支外國銀行——であつた。従來在支外國金融集團が、その資金の充實してゐた際、民族金融體系に對する遊資の融通が、この所謂寄生形態を產生せしめるに至つたのである。但しこゝに謂ふところの寄生形態とは、支那の錢莊或は銀行が外國銀行の資本に加入し、或は外人の代理者となつたことのみを指すのではなく、支那の銀行（とくに錢莊を主として）が、一面在支外國銀行の融通資金を以てその流通に資せなければならなかつたのと、別の一面では、在支外國銀行に替つて國內爲替を營んだこと、換言せば外貨の内地販賣に當つてこれを幫助せねばならなかつた經濟を指すものである。内地工場または商人の購買する外貨はそ

の代金を錢莊或は銀行から外國商人に決済しなければならず、外國商人の購入する土貨の代價は、錢莊或は銀行の手を通してこれを土貨商人に給付しなければならなかつたために、錢莊と、在支外國銀行、及び洋行との間に於ける、一種の極めて密接なる經濟關係が発生するに至つた。これによつて支那の資本家は、大部分買辦から脱化して來たものであると謂ふことが出来る。それに次いで錢莊と銀行買辦との勾結が行はれた。即ち彼等は資金を需要する際、莊票或は道契を以て在支外國銀行に向つて擔保借款し、直接資金の融通と營業の補助をなしたからである。斯くの如くにして錢莊は、さらに多くの流通資金を得ることにより、その營業の發展を可能ならしめ、在支外國銀行及び洋行は、これによつてさらに多くの商品の販賣をなすことが出来、彼等を利用して外貨を内地に侵入せしめるの橋梁たらしめた。但し最近三、四年來、「廢兩改元」後、支那の銀行が在支外國銀行から資金の融通を受けることが、漸次減少して行つた。とは謂へこのことは同時に支那の金融資本が、在支外國銀行團の支配を離脱した所以ではなかつたのである。即ち在支外國銀行は、不平等條約と、その雄厚なる資金とを挾んで、單に支那の金融市場を操縦せんとしたのみでなく、支那人の巨額の預金を吸収し、國際爲替の操縦に、將たまた、發券及び現銀の輸出の自由の上に於いて、すべて第一位に立つたのであつた。例へば去年外國銀行の現銀輸出が醸成したところの上海に於ける金融恐慌は、在支外國銀行の賜與したものであつた。而かも支那の銀行は貸出、預金、發券等の諸方面に於いて、巨大な發展を成し遂げ得たと共に在支外國銀行の預金、發券及び支那人の彼等に對する信用が、減少したとは謂へ、このことによつて彼の支那金融資本に對する統制的地位には、何等の動搖

をも來たさなかつたのである。この間の経緯に對し、章乃器氏は次の如く喝破してゐる——「現在國際資本と民族金融資本の分野についてこれを見ると、外商銀行の資金運用は、單に外貨をして國外から通商口岸に運輸せしめ得るに過ぎず、以後の工作、具體的には外貨をして通商口岸の輸入商から販賣商に移轉せしめ、さらに口岸から内地の消費者の手にまで移らしめる工作は、華商金融業の手によりこれをなされてゐた。それは在支外國銀行の主要業務は、輸出入爲替にあつたが、彼等は内地に分支行を開設することを得なかつたため、口岸から内地に爲替するの業務が不可能であつたのと、同時に彼等は支那人の情態を知ることが不十分であつた結果、直接支那人販賣商に向つて貸資することが、至難であつたからである。現在洋行の買辦より、都市の卸賣商と小賣商、及び内地の卸賣商と小賣商に至るまで、資金の融通は、すべて華商銀行と錢莊に依頼してゐる」と。これによつて帝國主義金融資本の支那經濟に對する支配——政治借款、政府への直接貸を除く以外の、金融、産業、貿易の諸方面に於ける投資——は、新式銀行と舊式の錢莊を利用して彼の工具となしたことを知り得る。そして彼は一面に於いて支那の銀行と産業の發展とを壓制し、他の一面に於いて、支那の封建金融資本勢力の存在を扶助しつゝ、彼をして支那民衆に對する搾取と、支那の工商業及び農業を破壊する屠刀たらしめたのである。ために經濟的及び政治的關係の上に於いて、帝國主義と支那の銀行、錢莊とは「三位一體」の聯合體制となるに至つた。最近幾年來、貧弱なる支那の金融資本は、さうした壓迫から脱すべく、頻りに對抗力の發展を企圖したと雖も、帝國主義の壓力が、愈々強化加重しながら、それらは結局徒勞に終つたのである。のみでなくそのことは金融上

の困難と、整個なる民族政治經濟の解放とを同時に求めなければ解決出来ないものであつて、絶対にその望みすらがなかつた。帝國主義資本と、支那の銀行、錢莊との、最も密接なる關係の發生が、輸出入貿易にあつた。前述の如く、輸入貨物の通商口岸から内地に流動する工作には、銀行、錢莊がそのために資金の回轉をなさなければならず、外國資本の貸賣と決済との工作には、支那の銀行、錢莊が彼に替つて活動せなければならなかつたからである。それは錢莊の營業上に於ける爲替業務——内地から資金を收集して外商銀行或は洋行に支拂ふ工作——が重要な項目であつたからである。同時にこのやうな事柄は、そこに雄厚な利息を得るに至つたのみならず、且つまた交換條件として外商銀行に向つての借款をなし得た。上海の中外輸入貿易商は、國際貿易局の編纂による「上海進出口貿易行商要覽」によれば、輸出入業務を經營する中外商行が、八百二十の多數に達してゐる。海關の特權と、航海船隻がすべて外國人の手中にあるがため、輸出入貿易經營者の百分の八十までは外人であり、とくに輸入商は殆んど外人の獨占するところとなつてをり、支那人は、單に輸出の方面に於いて極めて少數であるに過ぎない。従つて輸出入貿易の大權は、完全に外人の掌中に操られてゐるのである。外人の輸出入商のうち最大なるものは、日本の三井公司、三菱公司、米國の美最時洋行、英國の怡和洋行等であるが、外貨の支那に販賣したる代金の回収工作は、各本國の銀行が經營する一部分を除くほか、大部分は、支那の銀行と錢莊がこれに當つてゐる。こゝにも亦一つの絶大なる打撃があつた。それは輸入貨物の増加と、輸出貨物の減少とに伴ふ國際收支の不足が、支那の現金をして歷年大量流出を示現せしめることであり、このことは獨り國家經濟の大損失たるばかりでなく、同時にまた支那金融資本の致命傷でもあるからに他ならぬ。」（「中國金融資本論」第一章「中國金融資本の特殊性」二「買辦性の中國金融資本」を抄譯）。

第二節 所謂買辦資本の特質

支那民族資本の買辦性に關しては、大體前節の敘述によつて、殆んどこれを盡くされてゐるが、所謂「買辦資本」なるもの、本質とは、果たして如何なる作用——機能——を指してゐるのであるかを、比較的、具體的にこれを明らかにせんがため、特に本節を加へることとした。——以下雜誌「南鏡」に發表された公碩氏の「買辦資本の特質」から——

(一) 買辦資本の本質

支那經濟の凋落の渦中に於いて、買辦資本のみが、とくに發展した。これは一種の畸形的な經濟發展の趨勢であり、社會と國家とに對して好影響を與へるか、または悪影響を與へるかは、大きな問題たるを失はないが、一般的には、往々これを忽視に附しつあることを免れない。然しながら、現實的には日増しに國民經濟の破産を促しつあるのみでなく、國家の政治をして破産への過程の速度を加へしめつあることを看過出来ない。従つて本文の目的は、純粹の經濟的立場から、支那買辦資本の特質を考察せんと企圖するものである。元來植民地は帝國主義の源泉であり、これは一個の資本主義の自由經濟社會の發展の定律であつた。この定律に基いて植民地に於ける社會經濟の中に、特殊の買辦資本を產生せしめたのであり、斯うして買辦資本は、一面帝國主義國家に、

廉價な工業原料を提供し、一面帝國主義國家の各種の商品を販賣消化したのである。即ち以上の過程中に於いて、買辦階級をして帝國主義商品販賣の仲立人とならしめたことに端を發するのである。斯くの如くにして買辦資本は、帝國主義の本國に對する大量の利潤の奪掠の上に於いて一小部分の利潤の分配にあづかつた。勢ひ買辦資本は純粹の食利資本の範疇に陥り、完全に帝國主義者に依付するに至つた。換言せば買辦資本は、本國の各種の生産課程に参加せず、而かも本國の各種の生産を破壊する害蟲であつたのである。支那の前資本主義の段階に於いて形成されたところの商業資本と高利貸資本とは、すべて帝國主義の統治の下に隸屬するに至つた。自然ここに於いて支那に於ける一切の不勞働所得者の支配階級——例へば軍閥、官僚、紳士、奸商、銀行家、高利貸者は、すべて直接間接に、及びその程度の大小こそあれ、外國資本に効勞ある全支配階級——は、遂ひに準買辦階級の性質を帶了するに至つたのである。支那の買辦階級は、これを狹義の場に於いて謂ふときは、一面外國商品の買主であると共に、また支那原料の買主であつた。即ち支那商人と外國資本家との間に立つところの富商がそれであり、一面に於いては、賣買を紹介し、さらに信用賣買の際に當り、若し買主に支拂能力がなかつたならば、全額の三割乃至七割五分の保證金を供託すると同時に、さらに商品の買主を尋ね、並びに一切の營業上の紛議の解決に當つたのである。貨物購入の時に於いては、買辦は各地方の原料販賣者に對して、信用の保證を與へ、大商埠に居留する外國洋行をして、支那内地との商賣の關係を結成せしめた。斯くの如くにして買辦の機能を部分的に説明するとき、英國の *broker* と相類似してゐたのである。自然その固定した報酬は頗る細微たるを失

はなかつたが、主要収入は、その規定された手数料であつた。普通買辦は、外國洋行に對して巨額の身元保證金を納め、常に一部分の利益を支出して多數の人員を雇用した。そしてこの人員は對人的には買辦に對して責任を負ふこととなつてをり、その雇用に際しては、外國洋行の同意を得ることを必要とし、及び外國洋行の意志によつて解雇した。買辦の報償は手数料制度であるがため、外國洋行の興盛は、實に買辦自身と密接の關係があつた所以である。各買辦は銀行或は洋行に於いて別にその事務室をもつてゐた。買辦資本は概して前述の如き経緯に基き、商品の賣買、或は貸借關係に於いて外國資本のために効勞したのであり、勢ひ本國の生産過程には参加せず、尙ほ且つその中間に於いて、帝國主義の所得利潤の唾餘をのみ吸収したのである。年來買辦資本が愈々發展したに反して、民族工業の凋落を促し、以て農村經濟の破産を深化せしめ、支那をして植民地化への過程に速度を加へしめたことは、かゝる點から見ても寧ろ必然の趨勢であつたと謂はざるを得ぬ。

(二) 支那買辦資本の成長過程

支那の國土が廣大であるため、その人物、言語、文字等に通曉することに困難であつた。各省に於ける度量衡と貨幣の複雑と、及び歐洲と同じからざる營業習慣（一切の債務が、すべて舊曆で決済された等の）等々の各事象は、外國企業をして、買辦の介在をなさしめた要因である。かゝる環境に於いて若し買辦制度が存在しなかつたならば——自身が各地方に支店をおいて——直接支那商人或は消費者と直接の貿易關係を結成せんとするには、必らずや莫大の損失を招かねばならなかつたからである。この點から買辦を使用しない營業は、實に二、三

の最大な洋行のみであつた。買辦階級は斯うした情勢に於いて、帝國主義が支那を侵略する橋梁となるに至つたのである。支那の社會は、帝國主義の侵入しない以前に於いては、一個の古典的封建國家であつた。然しながら商業資本は、頗る早くから、且つ非常に繁榮的な發展をなしてゐた。その時代に於ける都市と農村との生産物の交換、或は農村と農村との生産物の交換には、早くから貨幣を使用して媒介物となし、一切の交易は大部分商業形態の下に進行してゐた。而して當時の商業は、次の三種の形態をとつてゐた。(一)農村商業、農村に於ける人煙の稠密な地區または廟舎に於いて、一定の日期を定め「趕場」の方法を用ひ、多くの商品所有者が集合しながら、商品の交換を進めた。この種の商業は、最も古典的な單純な商品の流通形態であつた。(二)城鎮商業。この背後には地主資本家階級の存在があり、同時に商業を専營するところの商店を有してゐた。農民と小手工業者の生産品の賣却は、大部分これらの商店がこれを經理した。商店は「買賤賣貴」を以て利をとつた。自然城鎮商業は農村商業に比較して進歩してをり、農民と商店、商店と消費との三者の連鎖關係を構成した。(三)都市商業。都市は城鎮に比較して頗る擴大し、貴族大官僚があり、大商人が存在してゐた。各種の商店、舖戶、各種の小手工場が、斯うした都市のなかに集り、商業を以てこれを専門の職業となし、同時に同業公會、或は同郷公會等の、ギルド制度を以てする商業中心組織が建立されてゐた。古典的商業資本は、この都市のなかに於いて、非常な繁榮を表現したのである。而かも都市の文化習慣は、ある種の條件の上に於いて商業資本の臭味を帯びてゐた。斯うして往時は長安と洛陽とがこの種の都市の代表であつたと稱して好く、清代に至つて商業の發展は、江南を中

心として福建及び廣東の一帶にまで及ばしめた。帝國主義の支那に侵入せざる以前は、前述の如き三種の商業形態が、同時に並び行はれ、而してその發展の傾向は、益々都市商業に向つて推移したのである。阿片戦争後、支那の封建的藩籬が打破され、帝國主義は、支那に於いて商業經營の特權を取得し、大量の外國商品が、支那に侵入しながら、停滯して進まなかつた支那の商品資本をして非常な活躍を表現せしめるに至つた。ここに於いて商業資本は外國資本と結合して立ち、買辦階級も亦、これに従つて誕生したのである。それは帝國主義が、單に商品市場を需要したのみでなく、尙ほ且つ工業原料をも需要し、従つて買辦階級の足跡が、漸次窮郷僻壤のなかにまで深く侵入するに至つたからである。支那の商業資本——一切のマハラ資本をも含む——と、外國資本とが結合して買辦資本を産生せしめるに至つたことは前述の如くであるが、斯かる結合の過程に對し、次の四項によつてこれを説明することが出来る。(一)帝國主義の商人は、その商品を、支那商人の手に販賣するに當り、一時に商品代金をとらず、商人が商品を市場に販賣したのち、その支拂を受けた。こゝに支那商業資本と外國資本との結合の第一の筋道があつた。(二)外國輸出商の商業資本は借款の形式を以て支那商人に資金を貸付け、低い價格で豫約しながら、支那の生絲、茶、及び各種の工業原料品を買入れた。この種の形式は高利貸借款に等しく、この背後には當然外國財政資本の支那商業資本に對する統治を成就せしめるに至つたところの第二の筋道が潜んでゐた。(三)支那の商人及び軍閥、官僚の預金は、大部分外國銀行に存在し、而かも外國銀行は、さらに高度的な利息を以て、これを支那商人に貸付けた。このことは支那の資本を以て支那を搾取する所以でしかなく、支那資本

と外國資本との結合の成るに至つた第三の筋道はこの點にあつた。(四)帝國主義は支那に於いて、多くの股份公司(株式會社)を創設し、支那の資本家、軍閥を利用しつゝ、非意識的に彼等の退職資金及び隠匿したる巨大な資財を把り、支那の股份公司の卓劣な心理につけ込んで巨額な投資を吸収し、その他の植民地——例へば馬來半島爪哇の如き地方に——これを輸出して、さらに高度的な獨占利潤を獲得した。こゝにも亦外國資本と支那資本との結合の第四の筋道があつた。支那の資本の外國資本に貢獻した過程は概して斯くの如くであつたが、自然に於ける買辦資本發展の傾向に對しては明確に次の如く説明することが出来るのである。その第一は國際貿易の擴大であり、第二は銀行資本の膨脹である。銀行資本の膨脹と國際貿易の擴大については、同時にそれが支那の生産事業の發展が輸出を増加せしめたのではなく、常に帝國主義の支那に對する商品輸出を一日一日増加せしめた結果であることを表示してゐる點を擧げねばならない。支那に於ける輸出は大量な原料品であり、帝國主義の輸入商品は、既製品であつた。去年(一九三〇年)支那に於いて災荒の最も劇しかつた一年に於いてすら輸入貿易は、その輸出貿易を超過することが甚だしかつたのである。銀行資本の膨脹に關しては、本國の銀行資本は、大部分買辦資本と官僚資本とが結合して形成されたものであることは周知の如くである。

(三) 買辦資本と支那經濟

買辦資本の發展は、前項に考察したところによつて、ほどこれを盡くした。従つて我等はさらに具體的にその支那經濟の破産を促成した過程を考察しなければならない。このことに關しては次の三つの方向が、斯うした情

勢を最も具體的に表現してゐるのである。(一)買辦資本は帝國主義の製成品が毎年十億元以上の輸入の行はれつつある渦中に介在しながら、自然民族工業の擡頭を打撃することが著しかつた。このことは今更分析するまでもないことである。(二)農村の小手工業が完全に破産したのは、帝國主義商品の流入普遍化が、これを排撃した結果であり、次いで商品經濟の擴大によつて、農民の貨幣に對する需要の喚起を益々強化し、自然そこには耕種の改變が行はれ、稻田が、棉花、煙草、阿片、大豆、茶、桑樹の栽培に變り、帝國主義の工業原料品の需要に適應するに至つた。のみでなく、同時に軍閥、官僚の需要に應じつゝ、貨幣の獲得に汲々とした。而かも再生産の資本は、田租その他の苛捐雜税の納付に用ひられた。農村に於ける耕種の改變は一日一日擴大しながら、肥沃せる稻田は數年に渉る阿片、煙草の栽培のために貧瘦の土地となり、荒地の増加が驚くべき數字を示すに至つた。その結果は農村に於ける糧食の不足をして驚異すべき程度にまで達せしめた。斯くの如くにして、我等は農村經濟の凋落が、帝國主義と、買辦資本、軍閥官僚とによつて破壊され、且つそれが怕るべき程度に到達した事實を指摘せざるを得ないのである。(三)銀行資本の發展は、もとゞ工業資本の發展を補助すべきものであつた。然るに支那の銀行資本は恰かも相反したコースに走つた。それは彼が支那の工業の發展を阻止し、且つこれを破壊するに至つたからである。即ち支那の銀行家の吸収した現金は、工業の發展、農村經濟の改良に用ひられずして、公債地産、標金等の各種の投機事業に用ひられた。これがために大都市の地價の暴騰、公債と標金市場の波瀾により、斯かる渦中に於いて最大の利息を獲得せしめ、勢ひ脆弱な民族工業に對しては、高利貸的搾取を以て、これ

に臨み、その破滅を促さねば熄まなかつたからである。上海に於ける製絲工場の手持ち製品が、これを擔當として去年（一九三〇年）銀行團から巨額の流動資金を借入れたのや、そのほか絲業公債、航業公債の發行等々が、さらに銀行資本の民族工業に對する押壓を表現する事象であつた。尙ほ且つ農村に對しても亦、これと同様な殘酷な押取を敢行したのであり、貧窮な農民は、田産を質入れし、或は青田は勿論種々の農産品を抵當として高利を以てする銀行或は錢莊の貸出を受けなければならなかつた。而かも斯うした借金は、何等生産の改良に充用されず、その危急な飢饉を救ふがために消費された。斯うして銀行資本の農村流入は、同時に農村經濟を進歩せしめないで、只農民大衆の血汗を搾取したのみならず、農民の貧困を加速せしめたのである。銀行資本家は、さらに斯かる高度の利潤を吸収して、これを都市に集中せしめ、帝國主義の商品、軍器の販賣を始め、國內公債、地産等の投機事業を經營しつゝ、最後には、これを外國に送り、または財政資本家の金庫のなかに收容せしめた。従つて支那の政局が紊亂を發生したときには現銀の輸出がさらに猛烈となつた。例へば九・一八事變及び一・二八事變の當時の如く——支那の金融は非常な逼迫を表現し、現銀はこれに反して大量の流出をすら見るに至つたのであつた。これらの事實は、最もよく支那の銀行資本の買辦性を表現し、帝國主義に附庸しつゝあるの過程を表示してゐるのである。これを總括すると、買辦資本は、帝國主義に代替して、支那を搾取し、買辦資本の發展は、それだけ支那の經濟の凋落を加重し、支那をして益々植民地化へのコースに走らしめたのである。

（四）買辦資本と國際資本

支那の買辦資本が、國際資本に附庸しつゝある所以は、前項に屢説した通りである。商業資本から、銀行資本に至るまで、すべて國際資本の統治を受けつゝ、買辦資本は絶大な發展を表現するに至つたと雖も、但しそれは單に支那の經濟の範圍に於いて比較しただけの話であつて、これを國際資本に較べるときは、全く問題にならないのである。上海の銀行業は、如何にその投資が増大し、如何にその利益が尨大であるとは謂へ、到底一匯豐銀行の支配下から跳出することを得なかつたのであり、一切の國外爲替は勿論一切の貨幣價值の決定に於いて、支那銀行は完全に外國銀行の所定の標準に征服されたのである。同時に且つ、斯うした標準は上海で決定されるのではなく、倫敦或は紐育、及び東京で決定されたのであつた。支那の買辦資本の國際資本に對する附庸關係には、さらにまた一つの特徴をもつてゐた。それは支那が單に一つの帝國主義の植民地でなく、各個の帝國主義の植民地である點から來てゐる結果によつて、特徴づけられたものであり、同時に且つ列強帝國主義の相互の對立が、益益さうした點を顯著ならしめたことを看過出来ない。即ち支那に於いて各國の制覇するところの勢力範圍が確立され、各國はその範圍内に於いて各自の買辦階級を養成するに至つた傾向がそれである。これを換言すると、支那に於いては帝國主義の對立關係により、同時に買辦階級の中にも、一種の對立的形勢を造成した事實を擧げ得ることである。この意味に於いて政治上にあつては、同様の封建軍閥の割據を形成させた。而してこのことは支那の買辦階級は、一つの統一的の階級となるに至らなかつた所以をも明確に表示してゐる。支那に於ける一般的經濟情勢から見ると、日本の經濟的勢力は華北區域を支配し、華北の買辦階級及び封建的官僚は、日本の經濟

的勢力に附庸してゐた。米帝國主義は、長江の流域を支配し、上海の金融資本家並びに買辦階級は、すべて米國帝國主義の命を聽き、上海の買辦階級と手を携へてゐるところの南京統治階級は、米帝國主義に附庸しつゝあつた。英帝國主義の支配は、香港及び兩廣に及んだ。孫總理の統率時代に於ける廣東買辦階級は、曾て革命政府を顛覆せんとして、同時に英帝國主義が、公然これを援助したなど、この間の経緯を表明してゐる。佛帝國主義は雲南を支配した。かつて唐繼堯を指使して、革命を破壊せしめたことが、斯うした経緯を物語るものであつた。自然これらの一切の事實は、支那の買辦階級が、純粹に帝國主義の走狗であることを證明してをり、支那の封建軍閥、政客官僚も亦、すべて帝國主義と勾結するに至つたのである。従つてあらゆる方面に於いて多かれ少なかれ、買辦的性質を帯有してゐるのであり、このなかに、我等は帝國主義と買辦階級と、封建勢力とが、三位一體の支配的形態を構成してゐる所を見出し得るのである。帝國主義の利益の愈々増大することは、買辦階級、封建勢力の利益をも亦、これと共に愈々増大せしめることとなり、各帝國主義の對立が、益々激化するならば買辦階級及び封建勢力の内部的衝突も亦、これに従つて、愈々激化せねば熄まなかつた（民國二十一年十月發行の雜誌「南鏡」第一卷、第十七期「中國買辦資本の特質」を抄譯）。

第三節 買辦資本主義經濟の形成とその特徴

支那に於ける民族資本の本質を分析・解剖するとき、その特質が、結局一種の買辦資本としてのそれであり、買

辦資本が、國際資本帝國主義の支那に對する攻勢強化と共に、多々益々變體的な發展を遂げ、そこには當然、支那の社會的經濟機構をして、一種の買辦資本主義經濟機構に變形せしめるに至つたとすら、主張する論者がある。斯うした觀察評價は、或る點まで、正しい理論であると思はれる。

従つて左にその代表的なものを摘録することゝした——以下雜誌「文化批判」第一卷、第五期の「轉形期中國經濟の特質」から——

民族資本主義經濟と買辦資本主義經濟

民族資本主義經濟は、明らかに買辦資本主義經濟と、その質を異にしてゐる。民族資本主義經濟は、次の如く

- (一) 國家資本の發展を以て、資本主義の前途に向つて走ることを目的としてゐる。
 - (二) 本質的には、國際資本主義經濟の排除に立脚し、同時に國際資本主義經濟に對しては、衝突せざるを得ない機能をもつてゐる。
 - (三) 勢ひ封建經濟に對しても、これに反對する。
- 等々を、その主要な特徴となしてゐるのに對し、買辦資本主義經濟の特質としては、次の三點を列擧することが出来る。

(一) 買辦資本主義經濟も亦、資本主義經濟の發展の一部分に過ぎないとは謂へ、それは植民地的資本主義化の形態をとり、且つその方向に走りつゝ、自然獨立的でなく、而かも附庸的である。

(二) ために買辦資本主義經濟自身には既にその獨立性を缺き、單に國際資本帝國主義に附庸するのみでなく、國際資本帝國主義を排除し得ないのである。

(三) 封建經濟に對しては、排他的であることを失はないと雖も、あらゆる錯雜した情勢の下に於いて、依然封建性を保持しつゝある。

こゝに謂ふところの買辦とは、字義本來の意義からこれを見ると、經濟上に於ける一個の仲立人に過ぎない。即ち賣買兩者の間に立つところの紹介者として、所謂買辦資產階級を形成したのがそれである。そしてその特徴は、經濟上に於いて單に流通の過程を作つたのみに過ぎず、生産と、再生産の過程を作ることがなく、若しこのことありとしても亦、それは極めて鮮少であつたことを免れない(中略)。従つてその經濟上に於ける使命は、徹底的な買辦の性質たるに止り、たゞ國際資本帝國主義に附庸しながら、その二つの手となつたのみである。自然獨立的性質が有り得なかつた。我等が買辦資本主義と呼ぶ理由はこゝにあつた。多くの人はたゞ買辦階級の存在することをのみ知つて、買辦資本主義經濟の形成されてゐることを知らない。彼等は經濟に於ける一切の支配と操縦者は、すべて帝國主義であると斷定してゐる。即ちそこには、たゞ所謂帝國主義者の經濟、買辦階級のみが存在し、單に帝國主義者が主要な流通過程を作つてをり、實際上、帝國主義的經濟であつて、所謂買辦資本主義經濟ではないと思惟しつゝあるのであつた。然しながら一つの事物の分析は、その一般性の分析から具體性と特殊性にまで及ばねばならない。帝國主義經濟と、買辦資本主義經濟とは、本質上一致すべきものであるが、但し

その植民地經濟に對する作用の上に於いて、少なからぬ差異があつた。例へば帝國主義者の買辦階級に對して販賣するところの商品について謂ふならば、買辦階級が、その商品を他人に轉賣するとき——その購入した價格が一百元であつたと假定して、彼等はこれを轉賣するには、少くとも一百十元乃至一百二十元の價格を以てした等々——。そこには植民地の買辦階級の殘酷なる搾取が表示されてゐたことが、さうした事例の一つであつた。以上によつて民族資本主義經濟と買辦資本主義經濟との區別點及びその特質の大略を説明した。自然我等は支那の買辦資本主義經濟の考察に一步を進めなければならぬ。前述の如く、一九二八年以後に於ける支那經濟は、買辦資本主義經濟が主位となるに至つた。而して支那の買辦資本主義經濟は、大半民族資本主義經濟から變轉したものであり、本質上、一般的の買辦資本主義と、その趣を異にしてゐた。もとゞ支那に於ける民族資本主義經濟が、買辦資本主義に變轉しない前には、相當の發展を過程し、少なからぬ經濟力を蓄積してゐたのであつた。勢ひ前述の経緯に基き、買辦資本主義經濟に變轉した以來は、それ自身が、既に國際資本帝國主義の統治と、支配とを受くるに至つたと雖も、彼は經濟上の主要な部分に於いて、その流通過程に没入した。而かもそれは單なる流通過程に於ける役割を受つたのみに止らず、相當の程度にまでの生産過程にも亦、これに加入したのであつた。支那の買辦資本主義經濟が、小部分ながらも工業を營み、企業を創設した所以は、道般の消息を物語つてゐる。然しながらそれとも亦、依然、國際資本帝國主義の支配を受くることを前提とした點に至つては、これを否定出來ないのであつた。以上の點——買辦資本主義經濟が、少量ながら相對的獨立性を有してゐた事實と、

斯うした経済基礎とが、政治形態の上に反映して、政治形態の特殊性をも形成せしめたのである。買辦資本主義経済の経済的基礎が、以上に略述した通り、附庸的である一面に於いて、頗る部分的ながら、相対的獨立性的であるところに、その特質を有してゐるのであつた（雜誌「文化批判」第二卷、第五期「轉形期中國經濟の特質」五「何故に民族資本主義經濟と買辦資本主義經濟と呼ぶか」を抄譯）。

X X

斯くの如くにして、買辦資本主義經濟機構の下に於いて、國際資本帝國主義及び買辦資本と、封建勢力とが、如何なる交互作用を形造り、または作用しつゝあるかに對し、「轉形期中國經濟の特質」から、次の一節をとつて、これを摘録しておきたい。蓋しこれをこゝに添加した所以のものは、支那に於ける民族資本の發展過程としての銀行資本の成長を分析する上に於いて、民族資本機構全體に於ける、買辦性と、半封建性とを、充分明確に認識しておく必要があるからである。

國際資本帝國主義、買辦資本、封建勢力の相互關係と作用

以上の各項で略述したところにより、國際資本帝國主義と、買辦資本主義經濟及び、封建勢力とが、支那の國民經濟の中に於いて主要な勢力を占めつゝあることを知つた。斯くして、支那經濟の最高統治權は、國際資本帝國主義であつて、買辦資本主義經濟は、國際資本帝國主義に附庸しつゝ、封建勢力も亦、常に買辦資本と結合しながら、これらが以て一團となり、支那經濟の錯綜複雑な状態を形成してゐるのである。資本主義列強が、その

最後の發展段階として、帝國主義の段階に入つたとき、その植民地または半植民地に對する作用は、經濟上に於いて積極的主義が頗る稀薄であり、主要な役割は、消極的な、且つ徹底的な搾取の上にのみ立つた。國際資本帝國主義は、植民地、或は次植民地に對して、必然絶對的に、民族資本主義經濟の發展をば、これを阻止した。而して、民族資本主義經濟をして、植民地化へのコースに向つて走らしめ、さらに民族資本主義をして買辦資本主義經濟に轉換せしめたのである。斯くの如く國際資本帝國主義が、絶對的に支那の民族資本主義の發展を阻止し、従つて支那の民族資本主義經濟をして、買辦資本主義經濟に轉換せしめ、國際資本帝國主義と結合させた結果は、支那經濟をして、益々頹調な發展への前途をもたらしめなかつたのみでなく、寧ろ敗壞、滅亡、崩壊への段階を過程せしめた事實をも亦、これを知り得たのである。勢ひ没落期に向へる國際資本帝國主義は、支那經濟に對して、破壊と、牽制とを作用したのみに止り、支那經濟の發展に對しては、何等これに寄與するところがなかつたのである。即ち支那の買辦資本主義經濟は、没落期に向へる國際資本帝國主義の指導の下に於いて、たゞ崩壊と、牽制との作用を與へられたのみに過ぎぬのであり、而してそれ自身に相對的の民族性を帶有してゐたと雖も、それすらも亦、遂ひに國際資本帝國主義の經濟勢力の淘汰によつて、漸次殺滅されて行つた。同時に前項の叙述により、我等は、支那經濟には、封建關係が異常に濃厚であり、そこには封建勢力すらも殘存してゐる事實をも亦知り得たのであつたが、一般的の常識となつてゐるが如く、資本主義經濟が、封建勢力、乃至封建經濟を剝蝕して了ふべき筈であつたに拘らず、何故支那には、現在尙ほ濃厚なる封建經濟、或は封建勢力が殘存してゐるので

あるかと謂ふ疑問が生ずるのであると雖も、そのことは次に列挙する數項によつて、これを解釋することが出来る。

(一) 國際資本帝國主義及び支那の買辦階級は、支那經濟に對して、何等進歩的な役割を受持たなかつたのみでなく、支那をして、植民地化への過程を辿らしめたのであつたが、植民地化への過程に於いては、不斷に舊生産力に對する破壊のみ事としたのに止り、新らしい生産力が、少しも建設されなかつた。その必然の経過として生産力と、生産關係との不調和を形成するに至つた。

(二) 従つて、そこには當然封建關係が、さらにその濃度を加へ、封建經濟或は封建勢力をして、残存せしむべき餘地を與へた。

(三) もとより國際資本帝國主義及び、買辦資本主義經濟は、必然的に絶へず、封建勢力に向つてこれを壓倒し、その結果相當の程度にまで、封建勢力を破壊したとは謂へ、封建經濟を掃蕩して了ふことが不可能であつた。自然その間、商業資本、高利貸資本等の封建性的活躍を許しながら、半封建關係をして、さらにその濃度を加へしめるに至つた所以である。

(四) と共に封建勢力は、かゝる環境にあつて、非計畫的に、自らを救ふべき手段をとるに至つた。封建式の搾取の加重と、國際資本帝國主義及び買辦資産階級の懐柔に誘致されつゝ、それらに投降し、買辦資本主義經濟のなかに於いて、その作用を遅しくしたことがそれである。

(五) さらに一方封建勢力は勤勞無産大衆の階級運動の勃興と共に、それによる恐怖と、脅威を受けながら、期せずして利害の觀點を相等しくする結果、國際資本帝國主義、及び買辦資産階級との間に於いて、この三者が益々不可分の結合を形成するに至つた。

以上を總括するに、國際資本帝國主義と、買辦資産階級との間には、その相互間に、比較的何等の矛盾性がなく、自然對立關係がなかつたのに對し、國際資本帝國主義及び買辦資産階級と、對封建勢力との間には、その間に少なからざる矛盾性、對立性のあつたことを免れない。然しながら、前二者は支那經濟上に於いて、少しも進歩的な役割を受持たなかつたため、さうした矛盾性、對立性は、封建勢力をして、これを解體せしめるまでには至らなかつた。兎まれ、支那經濟の發展を阻止した障礙物は、(一)國際資本帝國主義、(二)買辦資産階級、(三)封建勢力の三つの勢力であつた。さらに以上の各項を綜合するとき、支那の國民經濟の上に於いて、經濟上の最高統治勢力は、國際資本帝國主義であり、買辦資本主義經濟は、國際資本帝國主義と勾結して、或はその分子となり、共同し乍ら、支那を經濟的に統治し、また支配してゐるのであると謂ふことが斷定出来る。その間に於いて封建經濟が、一般的國民經濟のなかに、廣汎な範圍に涉り、残存しつゝあると雖も、それは前述の如く、買辦資本主義經濟に對して、作用することが比較的微弱であり、従つて當然、買辦資本主義經濟が、より優勢たるを失はぬのであり、また比較的進歩的な地位を占めてゐるのである。斯かる経緯に基づき、現在の支那經濟の性質は、次植民地下に於ける落伍せる資本主義社會のそれであるが、その主要な性質は、買辦資本主義經濟によつ

て代表されてゐると稱せざるを得ない」(雜誌「文化批判」第二卷、第六期「畸形期中國經濟の特質」九「帝國主義買辦資本主義封建勢力の三者間の相互關係及び作用」を抄譯)。

第五章 畸形的金融資本への成長

第一節 緒言

買辦資本主義經濟下に於ける銀行資本は、大體第三章各節に於いて解剖したるが如き、發展の段階を過程したが、それは先進資本主義國の貨幣戰——とくに恐慌克復への手段として、植民地及び半植民地に對する積極的攻勢の強化と共に、支那の本位貨幣たる銀の世界的市價の劇變(はじめには英國が印度の幣制を改革して、印度政廳の手持ち銀を處分したのと、佛國も亦、佛領印度支那に、金本位を施行しつゝ、同様その手持ち銀を賣却するに至つたため、支那は全世界に於いて、殘されたる唯一の銀貨國となり、世界の銀が支那に殺到しながら、支那が世界的の銀のプールと化し、銀價の慘落に伴ふインフレーション状態を齎らし、勢ひ國民經濟は、それによる痛烈な打撃を受け、次いで米國の銀政策の樹立に基き、銀價の世界的昂騰が示現し、支那にとつては、銀價の暴騰による、極度の打撃を與へられたのに基因しながら、支那の幣制を、一步步國際資本主義に附庸せしめるに至つた過程に於いて、貨幣權(それは從來國際資本帝國主義の支配圈から殘されてゐた支那にとつての唯一の統治權としての貨幣權であつた)の直接的國際附庸への進行と共に、總括的に銀行資本の買辦性を益々發揮せしめたのであつた(從來の支那に於ける貨幣權は、直接的な國際附庸でなく、寧ろ間接的のそれであつたと謂ふことが出来る)。

而かも支那の貨幣權が、直接的に、國際金融資本に附庸するに至つた趨勢は、支那の幣制の上に於ける次の諸變遷に、遺憾なくこれを表現されてゐたのである。

(一) 世界的な銀價の慘落に基き、支那が經濟的に、財政的に困憊を續けつゝあつた際、米國は、支那の幣制を改革せしむべく、ケメラ博士等の一行を支那に派遣の上、一種の金爲替本位制への準備をなさしめた(このことは結局實現しなかつた)と雖も、現在の劃期的な幣制改革を斷行せしめるの遠因をなした。

(二) 銀價の暴落に直面しながら、それから受ける打撃に堪へ兼ねた支那は、一面國際資本帝國主義の希望を容れて、廢兩改元を斷行しつゝ、幣制整理・統一への一步を進めた(廢兩改元は、銀行の機能を集せしめることにより、銀行資本の集積・膨脹を助長する一因をなしたことは勿論である)。

(三) 海關金單位を制定して、一種の金使用、爲替本位制への基礎を築いた(このことは中央銀行の機能を擴大せしめる要素をなし、同時に海關金單位の價格の決定が、國際市場に於ける、金價を標準とし、自然英磅に基準をおいたため、直接、間接的に、英國金融資本との關聯を密接ならしめた)。

(四) 米國の銀政策の樹立と、銀價の昂騰とが、支那經濟、財政に痛切な影響を及ぼし、恐慌を彌が上にも、激化せしめねば熄まなかつたので、支那政府は、米國に對して、銀政策の撤廢方を嘆願したが、結局容れられなかつた(支那は、所謂健全通貨政策維持のため、爲替管理制への歩を進め、勢ひ、それらの必要上、政府系銀行による、貨幣統制、金融市場の管理にまで、手を伸ばした。そこには當然銀行資本の結合傾向が、益々顯著となつて行つたのである)。

(五) 米國の銀購入法案の作用が、さらに彌上世界銀價の奔騰を促し、自然支那は、銀の海外流出に苦しめられ、銀の涸渇による通貨の驚くべき收縮と、幣制の基礎の崩壞をさへ、誘致せんとするに至つたため、遂に未曾有の幣制改革を斷行することとなつたが、この改革により、支那の貨幣權は、全く國際資本帝國主義の支配下に屬するに至つた。それと共に、幣制の變更——管理通貨の制度は、銀行制度を國家の統制下におかしめ、銀行資本の發展をして高度化への趨勢に向はしめた。

以上の如く、貨幣制度が直接、間接的に國際金融資本に附庸して行つた過程は、幣制改革後と雖も、さらに管理通貨制の進展に伴ひ、彌上その段階を進めるに至つたのである。このことは、民族資本機構を主とする支那經濟組織に少なからぬ變化を與へたことは謂ふまでもない。

この間の経緯に關しては、著者が、さきに「新幣制を繞る英、米、日の對立とその新局面」と題して、次の如く解説したことがあるので、こゝに再録することとした。

新幣制を繞る英米日の對立の新局面

「世界經濟が恐慌の深化を加ふると共に、資本主義列強に於ける、恐慌克復への手段たる貨幣戰爭は、一切の經濟戰上に於いての武裝的衝突の、最後的一幕として演ぜられた。曰く金の輸出禁止、曰く金本位の放棄、曰く平價の切下げ、曰く外國爲替相場の引下げ、曰く管理通貨制等々がそれであつた。而かも一九三四年に入つて、これらの

貨幣戦争は、さらにその段階を進めた。英國を中心とするスターリング・ブロックの形成と、米國の銀政策の實行、佛蘭西を中心とする金ブロックの形成等々を、その代表的なものとして、これを擧げることが出来る。斯うした世界的貨幣戦の餘波が、支那に對して、如何なる影響を與へたかは、今さら謂ふだけが野暮であらう。

「そも／＼列強資本主義が、斯くの如き自殺的行爲に等しいところの自己の貨幣を低下せしめるに至つた意義は、單に世界貿易上に於いて、その覇權を掌握しようとする意圖から出發したのであるのみでなく、同時に植民地の壟斷と、その決定的の優勝權を獲得せんことゝにあつた點は、これを否定出来ない。即ち資本帝國主義國の資本家は、過剩商品の植民地に於ける販賣市場を、永久的に確保すべく、且つ過剩資本による擲取と、利潤獲得の繼續上、乃至一般工業と、軍需工業の豊富にして廉價なる原料を獲得するため、同時に植民地國の財政・金融的統制を促進せんとして、その貨幣制度をして、自國の貨幣に附庸せしめることを必要とした。斯かるためには、植民地國家の貨幣と、自國貨幣とを一つの固定した比率の上に黏結させ、以て商業と投資の上に生ずる、一切の危険を免れしめる必要があつたのである（中略）。全世界に於ける植民地は、世界大戰以前、既に早くも、その分割を完了したが、極東に於いては、唯一つの表面上の獨立を維持しつゝあるところの半植民地支那を残してゐた。とくにこの半植民地には、金融制度上、頗る濃厚なる買辦性を帯有してゐたに於いてをやである。然りと雖も、その貨幣の統制權は、未だ或る資本主義の掌中のみ、握られてゐると謂つたやうな状態にまでは達してはゐなかつた。従つて近年列強資本主義の努力は、支那に於ける貨幣權の爭奪に對して、これを目標となし

てゐたのである。一九三〇年アメリカ弗資本は、その代表ケメライ博士一行を、支那に派遣の上、支那の金本位制への改革を計畫せしめた（中國）。米國の銀政策は、支那が世界に於ける唯一の銀使用國であるがため、全世界の大部分の銀を、その手中に收めることにより、世界市場の銀價を自由に決定し得たとき、支那貨幣を米弗に聯結させることが出来る點を狙つたものであつた。この巨大な資本的勢力を以てするとき、それは強ち無謀な舉ではなかつた。況んや銀政策は、南米に於ける虚金本位國を、自己の勢力圏内に拉入し得る作用をも亦同時に齎すに於いてをやである。このやうにして、銀政策は、果然その威力を發揮し出した（中略）。支那にとつては、銀の巨額の流出と、それに伴ふ金融恐慌の深化促進とは、期せずして、それが英國の支那に於ける經濟的、政治的勢力を脅かすに至つた等、英國の積極的進出と共に、リス・ロス卿の來支となり、その肝入りによつて、そこに幣制の根本的改革が斷行され、破天荒の新幣制が発生するに至つた」（一九三五年中國經濟年報「新貨幣制度」から抄譯）。

大體以上の経緯に基き、支那が幣制の改革を斷行するに至つたと共に、支那の通貨は、先づ、スターリング集團の下に抱擁されるに至つたのであつた。もとより支那の幣制改革は、恐慌の深化が齎したところの、必至の趨勢であつたことは謂ふまでもなく、國際經濟の一環として支那の經濟も亦列強資本主義の貨幣戦争の渦中に捲き込まれなければならなかつた所以であるが、それを直接動機づけたのは、米國の銀政策の斷行であり、次いで幣制改革に對して産婆役となつたものは、英國であつたことは勿論である。勢ひ米國が貨幣戦に拍車を加へたことに原因し、

英國の直接的支援によつて行はれた幣制改革であつて見れば、その結果支那の新幣制がスターリング集團の下に應らねばならなかつたのも亦必然であつた。この間の消息に對し「一九三五年中國經濟年報」は大要次の如くこれを喝破してゐる。

「この變革はもとより偉大なる變革であつた。然しながら我等は、さらにリース・ロス卿の功績をより偉大なりと謂はざるを得ぬ。即ちこの偉大なる變革は、同時に彼の祖國——磅集團の巨大なる勝利であるからであつた。この理由として次の五點を擧げねばならない。

(一) 支那今次の幣制改革は、日本の新聞紙の所報の如く、英國の借款の支援によつたことは確實である。リース・ロス卿の上海到着後、匯豐銀行及び麥加利銀行が、該二行に於ける支那人の預金のうちから一億二千五百萬元の現銀を中央銀行に移し、一面中央銀行から一億二千五百萬元の紙幣を發行して、以上の英國系銀行に送り、支那人預金の引出しに備へしめた。同時に別の一面に於いて中央銀行は、この金額を以て四割の發券準備に充てたのであつた。次いで前記の一億二千五百萬元は、さらにこれを以て正金銀行から圓を買入れ、爲替資金となした。これらの消息は確實ではないが、斯うした借款方法は普通でなく、この種の流説に對しては、誰しもこれを無根據であると斷定することを得なかつた。

(二) 今次の新幣制の規定した外國爲替相場は、宋子文の説によれば、最近五年間の外國爲替相場の平均價格を根據として、標準としたものゝ如くであつた。然るにこの所謂標準なるものは、明らかに米弗及び、圓の標準

ではなく、リース・ロス卿の貨幣——磅のそれであつたことは次の數字が、これを明白にしてゐる。

年	倫敦向T・T	紐育向T・T	日本向T・T
一九三〇年	一一・二七四	二九・八五三	六〇・四〇
一九三一年	一一・一九〇五	二二・一三八	四五・五四
一九三二年	一一・二七三一	二一・四八六	七七・四五
一九三三年	一一・二八二八	二六・〇五五	一〇〇・七五
一九三四年	一一・四・四一	二三・九一一	七九・五四
平均	一一・二・四七〇	二六・六九〇	七九・五四
現在	一一・二・五〇	二九・七五	一〇三・〇〇

而して一般的に、かうした現象を以て、それは爲替釘付政策の實施であり、如何なる貨幣集團にも關係がない。且つこの現象は、支那の貨幣が釘付されたのではなく、磅の釘付を意味するものであると説明してゐたのであるが、事實上、これ等の説は、或る一貨幣集團に對する辯護に過ぎない所以を證明してゐるのである。一九三六年二月に於いて銀價低落の結果、米國向爲替相場が、三〇弗四分の一まで昂騰したに拘らず、英國向爲替相場の動かなかつた事實は、一面米弗の反攻を意味するとは謂へ、一面に於いて支那の貨幣と、磅との聯結が、とくに密接な間柄を保つてゐることを表明してゐた。

(三) リース・ロス卿の聲明によれば、幣制改革に對しては、これを豫期しなかつたものゝ如くである。但し

幣制改革は、彼の意見と符合してゐたと謂ふ。同時に、新幣制公布後の第三日に於いて、リース・ロス卿は、英國の對支借款を否認したと雖も、同時に「支那の環境としては、借款しなければならぬ立場にある旨、及び銀本位の放棄は彼の意志の中にあつた云々」と説明した。この表示に従へば、リース・ロス卿は、幣制改革に對し、豫めこれを聞知してゐたのであり、同時に豫てから、計畫されてゐたものであつたと断定して好いのである。英國の對支借款に至つては、支那に對する精神的の援助と稱する、リース・ロス卿の意志が、既に物質的の援助にまで進んでゐたのであり、この借款は、獨り支那の利益のためのみでなく、英國の利益のためでもあつた。

(四) 支那の新幣制に對する英國大使館の援助は、かつて見るを得ざりし程度に積極的のものであつた。即ち英國大使は、支那の法權を尊重して、在留英國人の銀使用を禁止し、支那法幣の普及を援けた。これは英支外交上に於いても、かつてその先例を見ざる現象であつた。

(五) 新幣制の實施後、支那は在支外國銀行に對し、その手持銀の提出と、その法幣に對する兌換とを要求したが、外國銀行の、あるものは、これを絶對的に拒絶し（日本の如く）或るものは、その時期尙早を唱へ（米國の如く）たにも拘らず、匯豐、麥加利等の英國系銀行は、無條件で、これに應ずべく回答した。このことも亦歴史上先例のないところであつた（以上「一九三五年中國經濟年報」から抄譯）。

斯くの如くにして、英國は支那の新幣制に對し、これを直接的に、支援することにより、支那に於ける貨幣權の支配に於いて米國に取つて代つたのであつた。

これに對して、米國は賢明にも沈黙を守つた。然るに支那の幣制改革に對する、英國の積極的援助が、兎角愈々れ勝ちである（この間日本の反對が強硬であり、その監視の眼が光つてゐたからでもあらう）のを眺めた米國は、支那の幣制が、スターリング・ブロックに深入りすることを牽制すべき積極的態度をとり出した。即ち英國の支那幣制に對する支援が、倫敦に於いて、支那政府の賣出しにかゝる銀の買入れを通じて、ただ爲替資金の設定を助けてゐる程度に過ぎないのを知つた結果、支那から直接に多量の銀を、而かも倫敦に於けるそれよりも安く購入したのと（五千萬オンスの銀買入れがそれであつた）、倫敦市場に於ける銀の買入れを停止した等々が、その具體的なものであつた。而してこの米國のとつたところの二つの措置は、次の如き結果を、支那幣制の上に齎らした。

(一) 支那のためには、五千萬オンスの銀賣却によつて得た米國に於ける在外資金は、倫敦に於けるそれと共に、新幣制を維持する積杆であつた。

(二) 米國にとつては、それによつて支那の新幣制が、スターリング・ブロックに深入することを、或る程度まで牽制し得た。

(三) 就中米國の倫敦市場に於ける銀の買入れ中止は、英國の支那貨幣權の操縦に對し、直接これを牽制するのに充分であつた。

(四) 米國の倫敦市場に於ける銀の買入れ中止は、銀價の反落を示現し、その後多少の恢復を見るに至つたが、ために幾度か新幣制の崩壊が豫想されたと雖も、支那の政府系三銀行の必死の防戦によつて支へられ、同時にス

タリリングにリンクされながら、辛うじて、その爲替水準相場を維持し得た。

支那の新幣制が、現在の情勢に於いて、維持されてゐるのは、一に在外爲替平衡資金の存在にかゝつてゐた。従つて在外資金の潤渇は、新幣制の崩壊を意味するものであつた。然るにその在外爲替平衡資金は、漸次潤渇して行つたのである。

そこで支那は新幣制の補強工作に、とりかゝらざるを得なかつたのであつた。支那銀行家代表團、陳光甫の一行の渡米がそのためであり、陳光甫一行が米國に渡つたのも、米國政府當局との間に於いて「米支銀協定」なるもの締結が成功するに至つた。

斯うして「米支銀協定」なるものが、一九三六年五月十二日、華盛頓で調印されたものゝ如く、その経過及び具體的内容に至つては、双方の政府からの發表がないため、詳細にこれを知り得ないと雖も、五月十七日國民政府の發表した「新幣制補強工作」によつて、これを知り得たところによると「對支銀協定」の内容は、大體次の如く、

- (一) 米國は一オンス五十仙の價格を以て、支那から七千萬オンスの銀を購入する。
- (二) その代金は、金及び信用借款として、米國內に於いて、これが支拂ひをなす。
- (三) この協定により、支那の通貨の安定及び貿易決済に要するクレヂットを設定する。

と、謂ふにあり、従つて、この協定を基礎として、國民政府の斷行した「幣制補強工作」に對しては、財政部孔祥熙から、次の宣言を發表したのである。

宣 言

法幣政策は、政府の積極的施行を経て、半年以來、國外爲替は既に安定を示し、國家經濟及び人民の生活も亦、順調に導かれた。こゝに過去の經驗を根據とすると共に、國內の金融現況を審議検討して、さらに施行事項を次に規定し、以て金融の安定を謀り、而して法幣の保護を増大せんとするものである。(一) 政府は發行準備に對して終始、金、爲替、銀の充分なる準備を維持するものなるが、こゝに銀の占める準備率の最低限度を、發行額の百分の二十五の額に規定する。(二) 政府は商民の便利を圖るため、半元、一元の銀貨を鑄造し、以て硬貨の種類を完成す。(三) 政府は法幣の地位の鞏固を増進するため、その現金準備に巨額を獲得準備し、まさに金及び外國爲替を充分増加せんとするものである。以上の規定に據つて我國の幣制は、自ら尙ほその獨立の地位を保持して、何れの國家の幣制の牽制をも受けず、法幣の地位は既に安定するに至り、國民經濟が常に繁榮に赴くことを、深く信ずるものである。

以上米國のとつた措置は、米國をして支那に於ける貨幣權爭奪戦への渦中に投ぜしめたのであり(米支銀協定は、一面米國が支那の新幣制を直接支援すると共に、支那も亦米國の銀政策に間接的の協力をなし、銀價を維持することを主要な目標とした上、支那をして全く銀から離れしめないことをも約束づけたものであつた。勢ひ支那は場合によつては——若し銀價の慘落が示現した際には、新たに銀貨の鑄造を行ひ得ることをも同時に孔祥熙の宣言がこれを公表してゐる)、これを一面から見ると、支那の幣制維持のためには、英、米兩國が協力的にこれを援助しつ

つあるが如き姿態を、そこに示現してゐるのであるが、本質的には、支那の貨幣権の争奪戦に於ける、英、米の競争激化を物語るものであつた。

支那に於ける貨幣権の争奪戦に関する限りに於いて、日本の國の勢力が、到底「磅」及び「弗」の比ではないため、日本はこれに参加し得ない結果、單に抽象的な日滿支經濟ブロックの促進、北支を中心とする經濟開發、北支に於ける國の勢力の進出、その他北支に於いての銀行の設立運動等々、特殊の行動を以て、英、米の貨幣権争奪に向つて對抗しつゝあるに過ぎない。

第二節 國家銀行資本トラストの形成

支那買辦資本主義經濟の發展過程に於ける最も顯著な特徴としては、殆どその極度にまでの膨脹を示現するに至つたところの銀行資本が、前節に略述したるが如き貨幣権の完全なる國際附庸と共に、その集積・集中への段階を押し進めて一種の國家銀行資本トラストを形成せしめるまでに成長し、すべての銀行資本がそれに統轄されるに至つた事象を指摘せねばならないのである。

然しながら、支那の銀行資本の集積・集中が、遂に、一種の國家銀行資本トラストを形成せしめるまでに、その成長の段階を進めたと謂つたからとて、その發展過程は、次に引用するが如き――

「銀行にあつては、競争の餘地が少なく、その勝負は主として資本の大小によつて決定され、而かも銀行資本の

増大は容易であり、増大の客觀的限度がない――これらすべての事情は、産業企業側に生ずる集積の根本的傾向の制約の下に、銀行資本の集積・集中をその極點にまで――獨占にまで――押進める。銀行資本が増大し、且つ銀行と産業企業との關係が、益々密接となるにつれ、二つの重要な傾向が生ずる。即ち銀行は、一方では銀行相互間の競争を出来るだけ回避し、他方では貨幣形態をとる、あらゆる資本を自己の手に集中し、銀行を通じてでなければ、それを生産的に使用し得ないやうな状態をつくり出さうとする。この二つの傾向を推し進めた結果は、一つの銀行または一團の銀行によつての全社會の貨幣資本の處分権の獲得である。かゝる意味に於いての中央銀行は、全社會的生產をコントロールするであらう」(諸侯津南雄氏著「金融資本と帝國主義」から)。

と稱する先進資本主義國に於ける銀行資本の集積・集中の定律的な過程に比して、著しく、その趣を異にしてゐたことは謂ふまでもない。

最も支那に於ける銀行資本の集積・集中への傾向に於いても亦、「一つの銀行または一團の銀行によつての全社會の貨幣資本の處分権の獲得への要求」乃至「全社會の貨幣資本の活躍をコントロールせんがため」に、期せずして、國家銀行資本トラスト形成への段階にまで發展せしめ、國家銀行資本トラストを以てする全社會の貨幣資本の處分権の獲得への要求が、益々顯著な傾向となつて來た點に於いて、先進資本主義國の銀行資本の集積・集中の發展過程と、ほぼ同様の趨勢を呈してゐると雖も、前章各節に解説した通り、銀行と、産業企業との關係が、少しも密接とならなかつたのみでなく、銀行資本の集積・集中が、寧ろ産業の荒廢の上に築きあげられた點に於いて、著しく、

寧ろ本質的に、先進資本主義國のそれと相異つてゐるのであつた。

従つて「銀行を通じてなれば、それを生産的に使用し得ないやうな状態を作り出さうとする」傾向は、殆どこれを見ることなく、且つ銀行資本に生産との關聯が全くなかつた上、そこには投機信用の作用の擴大を通じて、國家財政資本との結びつきが、極めて密接たるを失ははかつた結果、必然的に國家銀行資本を中心とする集積・集中が行はれ、遂に國家銀行資本トラストの形成への趨勢を顯著ならしめるに至つた所以である。

但し以上の事象が、金融恐慌の襲來の渦中に於いて醸成され、恐慌激化の眞只中で、實現するに至つたことは、先進資本主義國の銀行資本の集積・集中が、金融パニククの深化につれて、益々前面に押し進められたのと、ほぼその徑路を同じくしてゐる。

斯くの如くにして、國家銀行資本トラストは、銀行を財政機關化せしめるに至つたと共に、彌よその活躍の範圍を押し擴げたのであつた。然らばこゝに謂ふところの國家銀行資本トラストは、如何なる経過の下に、形成されるに至つたか。著者の解剖を避け、左に「中國金融資本論」の著者の分析に従はふ——以下「中國金融資本論」から——

「市場恐慌、金融恐慌救済のために、今年春（一九三五年の春）財政部は一億元の金融公債を發行し、一面、中央、中國、交通の三行の資本を充實して、銀行の信用基礎を鞏固すると共に、別の一面に於いて、銀行の貸出能力及び市場融通能力を強化した。前者は金融恐慌の緩和を企圖し、後者は市場の不安を除かんがためであり、

その用意に頗る深遠なるものがあつた。然るに市場救済の効力は頗る微弱であり、市場の恐慌は依然その猛威を逞くしつゝ、商店の閉鎖、工場の倒閉、錢莊倒産の續出等々の風潮は、日、一日と激化し、人心は依然不安のうちに流轉した。それは實際的には市場恐慌の深化が、一億元の金融公債を以てしてこれを救済し得る程の生やさしい程度ではなく、況んやその實際の工商業融通に使用されたものが、またその十分の一、二に過ぎなかつたに於いてをやである。斯うして一億元の金融公債の發行は、その實、財政危機を彌縫し得たのに過ぎなかつたこととなる。そしてこのことはさらにこの公債の内容を分析するとき、自ら判明するのである。即ちそのうちの五千五百萬元は、三行の基金に充當し、四千五百萬元は、財政上の赤字を填補したのであるが、財政の方面に用ひた四千五百萬元は、市場の救済に對して、何等の効果を與へなかつたことは謂ふまでもないとして、三行の基金充實に用ひられた五千五百萬元のなかゝら、三行では二千萬元を割いてこれを再擔保貸出の形式で、市場に融通したとは謂へ、畢竟それも亦、三行の發券能力を増加したのみに止り、一種の變態的な通貨膨脹を招來したに過ぎず、間接的には財政上の力を増加しながら、財政危機を緩和したのと何んの異るところもない作用を及ぼしたのである。今年末（一九三五年末）に於ける財政危機は金融恐慌、市場恐慌に比して一層痛烈なるものであつた。金融恐慌が、伸縮性的慢性的であつたのに對し、財政恐慌は硬性的急性的であつたからである。以上の點に、より、財政部の三行の基金増加は、表面的には、財政部の金融界に對する一種の資金的援助であつたが、實際上、財政部と金融界とが、さらにその密接なる結合を深めた所以を結果づけ、これによつて財政部の銀行に向つての

統制力が益々強化されるに至つた。この點に於いて中央銀行は謂ふまでもなく、中國、交通の二行も亦同様財政部の附屬機關となつた。換言すれば財政を一元化するに至つたのである。最近四明商業儲蓄銀行、中國通商銀行、中國實業銀行も亦、その政府持株が増加された。本來金融恐慌、或は市場恐慌の際に於いては、獨占發展にとつての絶好機會であり、小銀行が閉鎖して大銀行に併合された。所謂銀行シンチゲート即ち金融寡頭制を形成したのであつた。然るに右の三行の資金の充實と、資本主義銀行の獨占への發展とは、絶對的に異つた意義をもつてゐた。即ち三行の資本の増加は、明らかに政治勢力の銀行のなかに於ける強化であり、この種の銀行統制の形態と、支那經濟の性質とは、同一性を具有してゐたのである。自然それは資本主義國に於ける國家銀行の獨占への發行過程でなく、寧ろ封建性的の政治支配を帯有してゐたのである。財政部が三行の完全なる統制權を獲得してのち、錢莊に對する監督と取締りとも亦、さらに急進的に行はれた(中略)。その意圖は、市場恐慌の漫延を阻止するにあつたと雖も、確かに錢莊統制の一種の表現であらねばならなかつた(中略)。これらのことはさらに財政部が、各行に對する發券の濫發を防止し、紙幣の流通増加によるその信用の低下の影響が、市場の恐慌を誘致せしめることを防がうとした舉であつたと雖も、但しその一面に於いて、一般銀行に對する統制力の強化を圖ることにあつた所以をも亦、これを否認出來ない。かうした結果は、財政部と金融界とをして、さらに打つて一丸となさしめる程度までの緊密さを結ばせた。謂ふまでもなく、そこに財政と金融との不可分のな、緊密な關係を結合せしめるに至つたのである。「中國金融資本論」第九章「經濟恐慌と財政金融の一元化」三八「銀行の財政機關化」を

抄録)。

斯くの如くにして、國家銀行資本トラストの形成と共に、中央、中國、交通の三國家銀行を中心とする金融統制への工作が、國民政府が金融政策を施行するにつれて、多々益々積極化しつゝ、そこには國家銀行資本トラストの機能が彌が上にも強められ、延ひて「全社會に於いて貨幣形態をとるところの資本の活躍をコントロールせん」とするの域にまでその成長を進めるに至つたのである。

因に國家銀行資本トラストの統制下にある銀行は(一)中央銀行(國民政府によつて創設された株式會社の形態をとる國家銀行であることは前述の如くである)。(二)中國銀行(政府の持株が五五%)、(三)交通銀行(政府の持株が六〇%)、(四)中國農民銀行(資本金一〇、〇〇〇、〇〇〇元全部政府の持株)、(五)中國實業銀行(資本金一千萬元のうち五百萬元は政府から出資)、(六)四明商業儲蓄銀行(政府から財政部委員葉孫堂を總經理に任命してゐる)。(七)中國通商銀行(財政部から顯胎毅を總經理に任命してゐる)と、その拂込資本總額が、一七五、九七一、〇五〇元に達してをり、とくに幣制改革以來、以上七行以外の各發券銀行も亦、當然、國家銀行資本トラストの支配下に屬し、國家銀行資本トラストによる金融統制は、先づ第一段の成功を收め得たと稱して好いのである。

X

X

國家銀行資本トラストの形成の本質的條件は、疑ふべくもなく「一つの銀行または一團の銀行によつての全社會

の貨幣資本の處分權の獲得にあつたことは勿論であるが、前述の経緯の下に形成されるに至つたところの國家銀行資本トラストは、先づ全社會の貨幣資本の處分權獲得工作を進むべく、幣制改革の斷行後に於いて、前に指摘した如く、管理通貨による金融統制に向つての市場の制覇權把握工作に努めたのであつた。

そして金融恐慌の破局的危機は、一先づ管理通貨の運用によつて、恐慌危機の度を緩和し得たのち、さらに國家銀行資本トラストは、政府をして財政危機の緩和のために財政に對する當面的な整調工作としての、公債整理を斷行せしめたのである。

一九三六年二月一日國民政府財政部が、舊公債整理のために、十四億六千萬元の統一公債と、同時に三億四千萬元の復興公債と、合計十八億元の巨額の公債を發行し、支那内國公債史上に於ける空前の壯舉を實行したが、それであつた。もと／＼國民政府が南京に奠都して以來發行した内國公債、庫券、證券等は、一九三六年一月現在、十四億六千萬元に上り、その公債の名稱も亦、三十餘種に達してゐた。これらの公債、庫券に對しては、二月一日から前記の統一公債と、これを交換することとし、統一公債を甲、乙、丙、丁、戊の五種（年利六分）に分け、償還期間を次の如く、甲種十二年、乙種十五年、丙種十八年、丁種二十一年、戊種二十四年となした。

因に、(一)甲種債券の發行額は一億五千萬円で、これを以て二十二年度愛國庫券、短期國庫證、十八年關稅庫券、二十二年華北戰區公債、治安債券、十九年關稅庫券とそれ／＼借換へることとし、(二)乙種債券の發行額は一億五千萬円で、これを以て十九年善後公債、二四庫券、二十四年整理四川金融庫券、二十三年關稅庫券、二十

年捲煙庫とそれ／＼借換へることに、(三)丙種債券の發行額は、三億五千萬円で、これを以て十八年編遺庫券、二十年統稅庫券、二十年金融短期公債、二十年鹽稅庫券、二十年江浙絲業公債、十八年賑災公債、軍需公債、十八年裁兵公債、二十年關稅庫券とそれ／＼借換へることに、(四)丁種債券の發行額は、五億五千萬円で、これを以て十九年關稅公債、七年六厘公債、二十年賑災公債、伊庚款證券、二十四年金融公債、二十三年關稅公債、露庚款證券、統稅證と、それ／＼借換へることに、(五)戊種債券の發行額は二億六千萬円で、これを以て二十二年關稅庫券、二十四年水災工廠公債、十五年春節公債と、それ／＼借換へることとした。

X X

前述の如く公債の整理——とくに統一公債を以てする舊公債の整理——は、その償還期限の延長と、利廻り率の引下げを行つた結果、銀行資本家にとつては、ために利潤の低下を招致すること夥しく、自然從來のやうな公債の投資によつて獲得してゐた利潤の雄厚さは、これを見ることを得ない結果となり、當然以上の整理政策に對しては、極力忌避すべき筈であつたに拘らず、寧ろ主動的に、積極的に斯かる舉に出でしめた所以のものは、結局銀行資本が、自己防衛の手段から出たものであつたと稱して差支がなかつた。

即ち當時に於ける銀行資本にとつては、政府の公債濫發のために極度にまで悩まされてをり、公債の濫發は、さらに、折柄關稅の收入減を主とする中央の稅收の減退に基く、財政上の赤字と、一方軍事費、その他の支出の遞増に伴ふ收支不平衡の増大と共に、財政的基礎を破局にまで導くべき最大の要因であつた等、公債、借款を通じて、

國家財政と、一元的連鎖關係を結成するに至つた銀行資本としては、單に目先の利潤低下の問題よりも、寧ろ財政の破局によつて生ずる連帶的破産を如何にして防止すべきかの點が、大問題であつたからである。換言せば當時の銀行資本は、既にさうした死活問題の前に曝されてゐたからであつた。

「政府は何故に舊公債を改めて、統一公債を發行するに至つたのか、このことは頗る玩味すべき問題である。一、三年來、既に外債を起すことを不可能とされてゐる政府は、同時にまた關稅收入が、國內の購買力の劇落によつて日増しに減退を告げつゝ、財政上の赤字に悩まされるに至つた等、赤字填補の途としては、一に内國公債を發行するより他に方法がなかつたのであつた。さうした結果は、内國公債の濫發によつて、暫時財政危機を緩和し得たのであつたが、さうしたことは却つて財政上の負擔を増させるのみでなく、巨額の公債の發行は、民衆の不滿を買ひ、さらに民衆生活の惡化をすら促さねば熾まなかつた。斯かる結果、遂に財政當局をして舊公債に對する償還期限の延長による債務支拂額の遞減とを決意させることゝなつた所以に外ならない。然しながら斯くの如き方法によつて財政危機の緩和を計らふと謂ふことは、結局に於いて、政府の民衆に對する搾取の變本加厲であらねばならなかつた(中略)。支那財政の最大收入は、毎年三億元内外に上る關稅收入にあつた。うち一億元は、外債の擔保となつてをり、その他の大部分は、内債の元利償還基金に充てられてゐた。従つて毎月海關總稅務司から、國債基金保管委員會に約一千五百萬元を支出せねばならぬのであつたが、現在に於ける關稅收入減の結果は、政府は、内債基金の支出に於いて毎月平均四百萬元内外の不足を來たしてゐたのであつた」(中國金融資本論)

第十一章「新公債と金融」四五「統一公債と復興公債」を抄譯。

とは「中國金融資本論」の著者がこの間の経緯に對して、解説したところの一節である。

X X

以上の如き國家銀行資本トラストの機能と、地位とを、先進資本主義國に於ける、銀行資本の集積・集中への發展、及びその資本處理の機能に比較するとき、そこに頗る好個の對照を形造つてゐるのであり、即ち先進資本主義國に於ける銀行資本の集積・集中への發展は次の如く、

「産業企業を集積は、銀行の集積を促した。集積したる銀行は、産業企業を獨占的結合に導く一主動力であつた(中略)。獨占的企業結合の成立は、銀行資本をさらに一層集積せしめ、銀行の規模をさらに一層大ならしめると同時に、銀行をば、益々緊密に産業企業に結びつける(中略)。だがかやうに獨占的結合の成立が、産業企業と銀行との關係を、ますます深密ならしめると共に、また産業に放下される資本を處理する機能は、益々多く銀行の手に收められて行く」(猪俣津南雄氏著「金融資本と帝國主義」から)。

と、産業に放下される資本を處理する機能は、ますます多く銀行の手に收められて行くのを、定律的過程となしたが、支那の國家銀行資本トラストが代表するところの銀行資本の集積・集中と、銀行の規模の増大とは、ますます密接に、銀行資本をして、中央政權に結びつかしめたのである。

支那に於ける國家銀行資本トラストの作用は、さらに政府の金融方針をして低金利政策への實施に向はしめた。

このことも亦、銀行資本の自己防衛の立脚したところの基本的な要求であり、金融恐慌の激化と、全般的な経済恐慌の深化に伴ふ投機信用、流通信用の收縮——投機や商業の意義の低減——に基因しながら、必然的に利潤の低下を來さねばならない苦しい立場におかれるに至つた環境から脱すべく、預金利子の引下げを前提とする低金利政策の實施に對し、政府の權力を行使せしめようとした企てから出た所以である（現在、驚くべき程度にまで膨脹するに至つた銀行資本が、その預金利子の支拂ひに著しい苦痛を感じ出して來た經過は、前章でこれを略述した通りである）。

而かもこの低金利政策は、國民政府の公債整理斷行による、その利廻り率の引下げ（前述の統一公債を以つてする公債整理は、公債に對する名目上の利子の引下げを行つてゐないが、償還期限の延長と、同時にその半數以上の公債が月利五厘、元金の月賦償還制度をとつてゐたのを、一律に年利六分、年二回の抽籤償還に改めた點に於いて、實質上の利子引下げと何んの異るところもなかつた）を、契機として、爾來いろんな形に於いて、働きかけてゐるのであるが、大體次に列擧するが如き幾多の障礙によつて、到底實現しさうにもない。

(一) 銀行資本の集積・集中が概してさきに述べたやうな過程の下に發展しつゝ、既に國家銀行資本トラストへの形成を見るまでに至つたとは謂へ、依然それ自身には、濃厚なる封建性を具有してゐた。

(二) 買辦資本たるの域を離脱し得ないのみでなく、益々國際資本に附庸しながら、國際資本を離れては存在することの不可能な條件にすら圍まれてゐる。

(三) 銀行預金が如實の膨脹を來たすに至つた所以のものは、銀行の信用によつて集中し得たのではなく、その高金利によつて、これを吸収したのである關係上、低金利の實施には、そこに少なからぬ矛盾が伴ひ、現に銀行資本はその矛盾に苦惱しつゝある。

従つて殆んどその極度にまで集積・集中への發展を過程するに至つたところの支那の銀行資本としては、産業企業と結びつくことによつて、成長し、且つ集積・集中への段階を過程したのではないだけに、その間に幾多の本質的の矛盾と、その矛盾に根ざした著しい脆弱性とがあり、自然さうした畸形的な膨脹の過程に基因する不自然さを、多分にもつてゐるのであつて、この矛盾性、脆弱性、不自然さが、期せずして、國家銀行資本トラストの形成——それを以てする全貨幣資本の支配——中央財政との一元化——への成長段階を過程せしめるに至つたものであると謂ひ得る。

第三節 變體的金融寡頭支配への動向

(一) 變體的金融資本への成長

「銀行が蒐集し管理する貨幣資本には二つの源泉がある。その一部は非生産的な諸階級が供給し、他は、生産的な階級すなはち、産業資本家及び商業資本家が供給する。言ひ換へれば、信用の發達とともに銀行の處理に委される貨幣資本は、ひとり資本家階級の豫備的資本のすべてのみならず、またかれ等以外の諸階級に屬する貨幣の

大部分を含むに至る。即ち今日の生産は、産業資本家が、所有する資本の全額よりも、はるかに多額の資本を以て經營されてゐる。資本主義の發展につれて、ますます非資本家的階級が銀行に託し、銀行を経て産業に投入する貨幣額が増大する。かやうに銀行資本の力が増大するの比例して、産業企業の銀行企業に依存する度合は強まらざるにはをらない。と同時に、一方銀行は非生産的な階級の貨幣を吸収するためには、それに對して利子を支拂ひ得なければならぬ。自己が蒐集し處理する貨幣資本が、それほど巨額でなかつたあひだは、これを投機信用へ流通信用へ運轉することによつて、相當な預金利子を與へることが出來た。が一方ではかゝる貨幣の全額が異常に増加し、他方では、その種の信用の重要さが減するにつれ、銀行はますますそれを産業資本に轉化する必要に迫られる(中略)。産業企業が銀行に依存するに至るのは、變化した所有關係の現はれである。産業に投ぜられる資本が、ますます多くの部分は、いまやこれを運轉する産業資本家の所有に屬さない。彼はそれを利用する權利をば、たゞ銀行を通じてのみ獲得し、銀行は彼に對して全所有者を代表する。加ふるに銀行は、自身の資本のますます多くの部分を産業に固定せしめた。銀行はかくして、いよゝ大なる範圍に於いて事實上の産業資本家となるのである。かやうにして事實上産業資本に變形されてゐるところの銀行資本——これが金融資本である。金融資本は、その所有者に對しては、常に貨幣形態をとるところの資本である。所有者は、それを貨幣形態資本、すなはち利子取得資本の形において銀行に預け、また常に貨幣形態において取戻し得る。が實際は、かく銀行に預けられた資本の大部分は、産業資本、生産資本——生産手段及び勞働力——に變形され、生産過程のうちに固

定されてゐる。で産業に於いて作用しつゝある資本のますます多くの部分は、金融資本である。産業經營者によつて使用され、銀行が處分權を有するところの獨占資本である。金融資本は、産業に於ける獨占の成立と共に、成熟し、それ自身最高最強大な獨占的資本となる。産業に於ける獨占の成立によつて、産業の収益は、より確實な、より安定したものとなる。それに應じて銀行資本を産業に投下し得る範圍が増大する。この銀行資本の處理權は銀行にあり、銀行に對する支配權は、銀行株過半數の所有者にある。所有者の集中の進むに伴ひ、この銀行に勢力を有するところの擬制資本の所有者と、産業に勢力を有するところの擬制資本の所有者とは、ますます同一個人たるに至るのである。しかも全擬制資本の處分權は、今や少數の大銀行の手に握られてゐるのである。ここに所謂金融寡頭制支配が成立する(「猪俣津南雄氏著「金融資本と帝國主義」から)。

以上の如き先進資本主義國に於ける金融資本の成立過程に對し、半植民地支那の銀行資本は、その驚くべき程度にまで膨脹するに至つた集積・集中の段階から、さらに如何なる動向に、その最後の展化を現せんとしつゝあるか、本節では専らかうした方面に關する考察を試みつゝ、支那民族資本機構の解剖を終りたいと思ふ。

支那に於ける銀行資本も亦、自己が處理する貨幣資本に異常なる増加を來たしことは周知の如くであつて、この形態に關する限り、先進資本主義國の銀行資本の發展過程と、ほと同一であつた。と共に支那の銀行資本は、その異常な増大の結果、最早これを投機信用や、流通信用に運轉せしめるべく、投機信用や流通信用の範圍が餘りに狭いものとなつて來たため、それらの充用に於いて既に著しい過剩をすら感ずるに至つたことも亦、先進資本主義國

のそれに對比して、その發展形態に異なるところがなかつたのである。

然るに支那の銀行資本にとつては、斯かるときこれを益々生産資本に轉化することの不可能な條件の下におかれてゐた。それは支那の銀行資本が資本主義的發展への定律的な基礎に於いて過程したのではなかつたからであつて、そこには當然生産信用の擴大に充用すべき發展への前途を遮断されてゐたからである。その結果、遂に預金利用の方法に窮せざるを得なくなつて來たのであつた。

勢ひ依然、公債投資、その他の政府關係の諸事業に對する融資、または高利貸資本としての活用に依存しながら、高率な利潤の獲得を維持しなければならぬのであり、このことは、産業企業との結合を缺くところの銀行資本にとつては、寧ろ必然的な成長の過程であつたとは謂へ、近來に於ける恐慌の深化、財政危機の曝露、それらに伴ふ金融恐慌の襲撃、幣制基礎の動搖等々の諸局面は、さらにさうした必然性をして、益々成長せしめねば熄まなかつた。そこで銀行資本と中央財政との結合が、愈々深められ、金融と財政との一元化への進展を促しつゝ、そこに國家銀行資本トラストの形成をすら示現せしめるに至つた所以である。

斯くの如くにして、國家銀行資本トラストの形成は、謂ふまでもなく、支那の銀行資本の如き畸形的な發展過程中に於いて必然的に到達すべき段階であり、銀行資本の優越化への發展段階として「一つの銀行または一團の銀行によつての全社會に於ける貨幣資本の處分權の獲得を要求する基礎の下に出發した」——點に於いて、先進資本主義國の金融資本への成長の過程と、ほど相似た形態を示してゐるのであると雖も、それは、たゞ形態の上に於いて

さうであるのみに過ぎず、その質と、作用と、意義とに於いて全然異つてゐることは勿論である。

この意味に於いて、支那に於いては、現在國家系銀行を主體とする貨幣・金融の統制——國家銀行資本トラストのなかに、その他のすべての銀行資本を抱擁し、これらの銀行資本をも支配せしめようとする工作が、益々特徴づけられて來たのであるが、そしてそれは國民政府の決定しつゝある金融統制政策によつて遺憾なく表現されてゐると雖も、この國家銀行資本トラストを以てする、金融制覇への要求工作が、先進資本主義國に於ける金融資本への成長の過程に較べて本質的な差異をもつてゐるのである。

而して以上の経緯による、國家銀行トラストを中心としての全社會に於ける貨幣資本の處分權獲得への工作は、具體的には先づ中央銀行の機能を絶對的のものとなし、これを銀行の銀行たらしめ、同時に紙幣の發行權をも統一して（現在の法幣を中央銀行のみに發行せしめる）、準備銀行たるの職能を附與すると共に、國家銀行資本トラストのなかへ、新たに「不動産抵當銀行」を創立の上これを加へ（強制執行處分法の公布と共に、國民政府は宋子良をして、その創設を準備させてをり、銀行資本にとつて、恐慌後苦惱の種となつてゐる地産投資の凍結を解決せしめようとしてゐる）、同時に銀行預金の引下げを斷行する傍ら、銀行業者の商業手形引受け、中央銀行の再割引の創始、全國銀行に對する八大銀行系統への分類、等々を完成しながら、先進資本主義國の銀行形態に倣はんとし、次いで銀行の相互間の競争を防止させようとする計畫の下にその歩を進めてゐるのである。

註——國民政府の銀行整理は、前述の如く、銀行改革大綱——（第一歩計畫としては銀行の性質を確立して、現在の銀行を分

類統制すること。第二步計畫としては、保管権限を平均して、社會の實力をして都市に集中せしめないこと。第三步の計畫としては、聯立制度の實行と、銀行の規率化、合理化を計ること。——に從ひ、全國の銀行業を八種に分類の上、全國に於ける百六十四行——うち紙幣發行銀行十一行——に對し、その營業の性質が明確でないために招致せしめた營業上の不振を救はんとする企畫であり、と共に政府の金融統制の實を擧げようとする點を基調としてある。そして銀行の性質を次の八種に分けてある。第一種——中央銀行（銀行の銀行として獨占の性質をもち、政府より中央銀行としての權能を附與し、及び一切の專管特權をも特許する）。第二種——實業銀行（實業銀行業務、實業預金等を專管する）。第三種——農業銀行（専ら農村投資、農村救済、倉庫保管、農産物擔保及び一切の農業の發展に關する金融事項を經營する）。第四種——不動産擔當銀行（専ら都市の土地、家屋及びその他一切の比較的多額の資金を要する地産の貸借、保管、投資等の業務を專管せしめる）。第五種——儲蓄銀行（一切の定期、不定期、及び普通儲蓄預金の業務を專管せしめ、現行儲蓄銀行法を參照の上、預金の六割を中央銀行に保管せしめる）。第六種——外國爲替銀行（國內外の爲替管理、國內外の爲替賣買を專管し、政府の命令を受けつゝ、隨時、外國爲替の安定工作を行はしめる）。第七種——工商銀行（商工業投資を専門的に經營し、機械を擔保とせる貸出及び一切の工商業の發展に關する事項を營ましめる）。第八種——信託銀行（信託金融に關する一切の業務を專管せしめる）。而して、この八種の銀行に關する管理法は、目下起草中であり、法文として公布次第、その進行に着手する筈である」（以上一九三六年五月中の「中華日報」の記事を綜合）。

X X

とくに近來、國家銀行資本トラストを中心とする「全社會の貨幣資本に對する處分權の獲得」工作は、銀行資本が産業資本との結合を缺くことによつて、激化しつゝある自身の矛盾に苦しめられつゝ、その矛盾の解決に向つて、

さらに積極的に働き出さうとする機候のあることを看過出来ない。

その現はれとしては、國家銀行資本トラストが、國家行政機關を通じて、各産業部門に對し、相當な支配權を掌握しようとする工作を進めつゝある諸點を擧げることが出来る。即ち分産的な産業部門に對して、國家行政機關を以てする一種の統制を實行せしめようとする工作——それによる國家銀行資本トラストの優越化、高度化を企畫しつゝある趨勢を、ハツキリさせて來たのがそれである。こゝに於いて支那の銀行資本が、はじめて一種の變體的な金融資本への展化を過程しつゝある傾向を、認めることを得るのである。

然しながら、それは所詮、一種の變體的な金融資本への展化の傾向に過ぎないのであるから、先進資本主義國に於ける、金融資本の具有する要項——「生産の集積、それから發生する獨占、銀行と産業との融合、または合成、これによつて金融資本の成立史とこの概念の内容が表現されてゐる」——とは、全くかけ離れた内容をもつてゐることは謂ふまでもなく、且つ銀行資本（産業資本、商業資本のすべてをも含み）が、半植民地的買辦性と、限りなく濃厚なる封建性とを帯同してゐる關係上、依然國際資本帝國主義の制覇國內に於ける制限的の工作、封建性の束縛と、制限とを同時に内包しながらの活動であると謂つた域を脱し得ないところに、特定された條件と特質とをもつてゐる所以を免れない。

國家銀行資本トラストの形成から、一種の畸形的な金融資本への成長の形態——これが支那に於ける銀行資本の發展の過程であり（獨り銀行資本のみでなく、全體的な民族資本をも含み）同時に支那經濟の發展上に於ける必然

的のコースであることは、既に解剖した通りであるが、斯うした畸形的金融資本への成長形態の特徴としては次の如く、

(一) 銀行資本の農村經濟支配への新様式化。

(二) 畸形的金融資本への成長形態中に於ける民族經濟建設運動。

(三) 分散的産業部門に對する一種の獨占的企業形態の萌芽。

等々の最近に於ける運動乃至動向に、遺憾なく、それが表現されてゐるのであるが、この傾向を一面から見るとき、銀行資本が、今更ながら、農村に於ける生産、及びその他の産業部門に於ける各種の企業との結合の必要に迫られたと雖も、それらの處女地への開拓に伴ふ、あらゆる危険を、或る程度まで政府に保證させようとする要求——少くとも政府權力の背景を得ようとする意圖が、その裏面に働いてゐると解して好く、斯うした銀行資本と政權との密接な融合、そこに畸形的な金融資本への成長の半面があるとも謂ひ得る。

(二) 銀行資本の農村經濟支配への新様式化

銀行資本の農村經濟への新様式化に關しては、國民政府が、最近「農本局」を創設して、銀行資本の農村投資に對する施設機關たらしめた以來、漸次その積極的な工作が期待されるに至つた。

そも／＼支那に於ける銀行資本の農村放出傾向は、次に指摘してゐるが如く、

「支那に於ける銀行投資は、近年漸次農村貸出に注意し出したことは既に人の知るところである。かうした傾向

は、本年に至つて愈よその趨勢を顯著ならしめた。去年（一九三五年）、新貨幣政策の實行以來、紙幣の發行權が、政府銀行に集中したため、各商業銀行の業務が縮小さるべく餘儀なくされた。而かも本年の統一公債の發行により、公債市價の安定は、さらに銀行資本をして、投機事業に對する活躍から後退させ、自然その活動の餘地を著しく縮小せしめた。況んや年來、銀行資本が、大々的の膨脹を來たしたにおいてをやである。勢ひ各銀行としては、遊資の激増と共に、投資範圍の狭小に基く、貸出利率の低下に直面せざるを得なかつた。このことはさらに別に投資の途を拓かない限り、都市に於ける資金は、過剰による流幣を鋭化せしめねば熄まぬ結果、獨り金融部門に於いてのみならず、一般經濟にも、山々しき悪影響を及ぼすべき事態を示した等、遂に都市の資金は農村に逆流するに至つた」（中華月報第五卷第四期「三月份の中國經濟」から）。

と、とくに幣制改革を機會として稍や目立つた趨勢となるに至つたのであるが、然しながら斯うした傾向は、銀行資本自身が、遊資の捌け口を農村に見出しつゝ、必然的に流出したと謂つたやうな資本自身の流通運動ではなく、寧ろ社會的輿論たる農村救済のスローガンに慫慂された結果であつたため、自然その額に於いては、頗る微々たるものであることを免れなかつた。

而かも從來農村に於ける資金の都市流入が、支那農村經濟の恐慌に拍車を加へたのみでなく、國民經濟を混亂せしめること夥しかつたのに比し、都市に於ける銀行資本の農村逆流入は、假令それが國民政府の政策的、半強制態勢によつて行はれた現象であるとは謂へ、同時に農村に對する斯かる程度の放資は——「農村の凋落が國民の購買

力を缺乏せしめ、各業の不振を齎らした。工商業の復興を圖らんとするには、先づ農業の振興こそが、その先決問題である——と稱へられつゝあるが如くに、これを以て直ちに農業の振興を促進し得るか否かは疑問としなければならぬのであつたが、兎まれ支那經濟の更生に對して、確かに一つの重要な素因をなすことは謂ふまでもないのであつた。

但しこれらの銀行資本の農村流入——還元——は、現在までのところ甚だしく個別的、分立的たるを免れなかつた。並びに金融業者としては、銀行資本の農村進出に對して、或る種の政治上の背景と、その保障とを必要とした。このことは銀行資本の農村進出には、農村に於いて根強い勢力をもつところの高利貸資本及び土着商業資本と、或る程度までの對立を餘儀なくされるに至るからである。

而かも農村投資の回收不可能の危険性、乃至資金停滞の不利等を考慮するとき、當然そこに政治的勢力の背景と保障とを必要としたことは勿論である。斯かる趨勢——銀行資本の農村進出への機運——と、要求——銀行資本の農村進出に於ける個別的、分散的の統一と政治的背景の必要——とは、前述の如く國民政府をして、「農本局」なる機關を創設せしめるに至つたのであり、國家銀行資本トラスト——畸形的金融資本の生産産業企業との結合への要求が、政府權力をして、かゝる舉に出でしめた所以である。

因にいま農本局の組織内容を知らんがため、發表された「農本局組織大綱」に従へば大體次の如くである。

(一) 農業資金を流通し、農産品を調節しつゝ、以て農村の發展を謀るため、實業部及び各銀行の聯合により、

農本局を組織する。

(一) 農本局の資金を次の三種に区分する。(イ)固定資金——總額三千萬元、政府からこれを支出し、毎年六百萬元づつ、五個年繼續の支出方法をとる。(ロ)貸出資金——總額三千萬元、各參加銀行から出資し、毎年六百萬元づつ、五個年繼續放資する。(ハ)流通資金——定額を附さない。農本局で參加銀行との間に於いて、年度始めまたは隨時にこれを協議の上、供給する。(ニ)尙ほこのほか必要に應じて農本局から農業社債をも發行し、元利支拂の責任は、政府がこれを負ふ。

(二) 農本局の事務はこれを農産部と農産部との二部に大別する。

(A)農産部。(イ)各縣及び各農村の創設にかゝる農業銀行、合作社或は農民典當(質屋)に對し、農本局が補助の必要ありと認められたものには、固定資金の中から、一千元乃至一萬元を支出してこれに投資することを得る。(ロ)一般農産品に對する擔保貸付。(ハ)各地方農業銀行、合作社、農民典當は貸付によつて得たる擔保品を農本局に再擔保し、以てその融資を求めらるることを得る。(ニ)必要に應じては農民に對しても亦、若干の信用貸付をなす。(ホ)以上の貸付利率は、各地の習慣に従ひ、農本局理事會に於いてこれを規定する。

(B)農業部。(イ)擔保農産品の處分。(ロ)一般農産品の賣買。(ハ)農産品の代理賣買。(ニ)政府の委託を受け、農産品に對する代理賣買をもなす。(ホ)農業倉庫の經營。

(四) 農本局は南京にこれを設置し、その他の重要地點に分局を置き、縣には専門員を設置する。尙ほ農本局

各項の規定は、實業部よりこれを規定する。

(五) 國營鐵道、船舶の農産品に對する運賃率、及び中央地方の農産税率の規定に關しては、農本局總裁の意見を徴し、異議ある場合は、總裁より政府に申請の上、職員を派遣し、これを裁定せしめることを得る。

(六) 農本局は各省に於いて、農業區を審査の上、これを定め、その産額及び市場の情勢に應じて、これを五區に分け、年々處理すると共に、五個年以内に完成する。

(七) 農本局の剩餘又は缺損は政府に於いてこれを負擔する。(イ)固定資本は、毎年の決算に際し、剩餘あれば、その額だけ増加し、缺損あらばその額だけこれを補足する。(ロ)貸付資金は年利八分として、農本局に於いて元利保管の責を負ひ、參加銀行に對しては、農本局より貸付資金證書を發給する。右の證書は、これを擔保となすことを得るは勿論、また農本局の許可を得て、その他の金融機關に讓渡することを得る。農本局は、毎年決算の剩餘を生じたる場合は、參加銀行に對してこれを配當する。(ハ)流通資金は、その條件、期限、利率等により、隨時にこれを回收する。

右の組織大綱の概略によつて、これを知ることが出来る如く、農本局は、銀行資本の農村進出に對する一種の統制機關として、從來に於ける銀行の農村投資の個別的、分散的形態を、この機關を以て統一し得ると共に、一種の權力を有せる機關としてその存在が許される結果、今後の銀行資本の農村進出に對し、一層その途を拓いた形となるに至つたことは、これを否定出来ない。勢ひ農本局の設立は、各銀行資本家から多大な歡迎を受け、これに参加

した銀行も亦、次の如く二十五行に達したのである。

中央、中國、交通、浙江實業、金城、中國實業、中孚、上海商業儲蓄、江蘇農民、中國實業、通商、大陸、中匯、中國農民、新華、中國農工、浙江興業、中國農商——。

斯くの如くにして、農本局は、一般的に解釋されてゐたが如く——即ち次のやうに、

「農本局は、銀行資本の農村進出に對する統一機關、乃至それを保障すべき政治權力の法文化された掩護としての必要上、產生したものであつたが、同時に國民政府が、從來口を極めて高唱しつゝあつたところの農村復興、農村救済への具體的積極化への第一歩として、一面銀行資本家の要望と合致しつゝ産れたものであると謂ふことが出来る。従つて農本局の產生と、それによつて保障され、統制されつゝ、今後銀行資本の農村進出が、如何なる程度まで、強化擴大するか、乃至それによりて、果たして農村經濟の更生が、直ちにその實現を可能とされるか否かは疑問であるが、現下の支那農村經濟の情勢は、國民政府をして、農村經濟復興運動に對し、從來のやうな空疎な、且つ抽象的な、お題目でなしに、愈よ具體的な實踐に乗り出さしめねばならない程に、急迫した客觀的姿態を、そこに示現してゐるのである。勢ひこの點に問題の重要性があり、自然農本局の創設が、最近の輿論の中心となり、同時にその前途を囑目されるに至つた所以も亦、この點にかゝつてゐる。兎まれ最近の支那農村は連年の戰禍と、民國二十年及び二十三年の大水害、旱災に次いで、不斷の封建的搾取に加へて、國際資本主義商品のダンピングの加重等、内外交々たる壓迫により、農民は今や困窮のどん底にあえいでゐるのである。自然

農村救済——農村經濟の復興は、焦眉の急であり、この意味に於いて、國民政府は、從來と雖も、曰く合作社運動、曰く農村復興運動委員會、曰く新生活運動、曰く農民銀行の創設、曰く全國水災救済委員會、等々、あらゆる農村對策を講じて來たのであつたが、現在では、もうさうした空疎な對策では、農民が承知しなくなつたこと程左様に、緊迫した問題なのであつた。斯かる客觀的情勢のなかゝら、銀行資本の農村進出の機運に乗じて、その創設を目論んだ結果、産したのが農本局であつた（濱田時太郎著「支那經濟の現勢及び動向」から）。

との意味に於いて、評價されてゐたのであるが、さうした一般的な常識論でさへが、言及してゐる通り歸するところ國家銀行資本トラストの農村經濟支配が、その第一歩を踏み出したものに外ならぬのである。

(三) 畸形的金融資本への成長形態中に於ける經濟建設運動

國民經濟建設運動に對する實踐形態として「國民經濟建設委員會」なるものが、創設せられ、その主唱者蔣介石は勿論、國民政府部内に於ける各員を始め、全國地方政府機關に至るまで、殆ど總動員のかたちで、全國的に、大がかりな運動を開始するに至つたことも亦、畸形的金融資本への發展過程に於ける、銀行資本の生産流通——産業資本——との結合を助長せしむべき、一つの素因として、特筆に値する事象である。

これに對し、一般常識的には、大要次の如く——

「國民政府の所謂經濟建設運動は、眞の國民經濟建設のためでなく、南京政權當局の國內に於ける軍事的統一、とくに剿共事業のための、軍事施設に重きをおかれてゐることは、有眼の士の等しく、これを認められるところ

であり、單なる經濟問題としてよりも、寧ろ政治問題としての重要性を帯びてゐる」。

等々の批評を浴せかけてゐたのであるとは謂へ、現國民黨政權が、所詮高度化した畸形的金融資本財閥を代表する支配的統治權力である限り、國民政府の全國に涉る經濟建設運動は、取りもなほさず、支配的階級たる財閥資本家の要望から出たものであらねばならぬ。

そもく國民政府を中心とする「國民經濟建設運動」は、蔣介石が、一九三五年八月九日、全國各省に對して「國民經濟建設運動の發起」を主唱したのに始まり、次いで一九三六年一月一日、蔣介石が「國民經濟建設の辦法及び順序」と題するラヂオ放送を行つたのち、一九三六年六月二日各省市縣に通電の上「國民經濟建設運動委員會」の設立發起を命令し、同時に國民政府から右に對する規定を公布したのにより、その事實化への第一歩を踏み出したのである。

従つて「國民經濟建設運動」の實踐要項と、その方法なるものは、大體次の如く、

(一) 農業の振興。農業振興の方法としては、農村合作社を利用すべきである。合作社よりは、製肥、選種の改進を指導し、同時に農作上の方法を改良せしめると共に、農村金融を活潑ならしめ、農産物の運輸販賣を流暢させねばならぬ。このほかまた農業生産量の増加を促し、民族工業の基礎を發展させ、同時にその加工製造を奨励すると共に、當該地に於ける需要に對しては、廉價の供給を以てせしめることを必要とする。

(二) 墾牧の奨励。一切の公私荒地は、必らずこれを開墾せしめねばならぬ。人口の稀薄なる地方の荒地に對

しては、さらに大規模の移民と、開墾と、畜牧の經營を鼓吹する必要がある。同時に屯墾制の實施による集團的勢力を利用し、大規模の種々の農利を開發する傍ら、農村の副産（例へば家畜、園藝、漁利の類）の恢復、及びその増進に力をつくし、以てよく品質の改良と、その産量の増加を促進せしめねばならぬ。

(三) 鑛産の開發。今度政府は鑛産に對して積極的の保護とその開設とに獎勵を加へる。鑛産狀況及び鑛産の發展を阻礙する原因を調査の上、鑛産に對する各種の法規を改善し、すべての負擔に對する輕減と、採掘の便利とに備へ、鑛業投資を鼓勵しながら、鑛商の獨立經營と、その發展の扶助を主要な目的としなければならぬ。このほか、また外國の投資をも歡迎し、支那の鑛業の共同開發に努力することを必要とする。

(四) 徴工の提唱。當該地に於ける同胞の努力により、先づ交通の開發、水利の修治、森林の培植、荒地の開墾等に從事せしめ、その他同時に兵工政策を實施の上、軍隊の勞力を以て各地の徴工々務を補助せしむべきである。

(五) 工業の促進。農村に於ける簡易なる工業及び農業に對する加工製造の簡單なる工業は、農村或はその附近に接合せる郡市と協力して、これを經營し、農工業の密接なる連貫を謀り、その交互の發展を促す必要がある。同時に一般工業に對しては、政府から保護と獎勵とを加へ、以て全國工業品の自給自足を求め、その他勞資協調機關を設立の上、勞資双方に於ける一切の紛糾を公平に處置せしむべきである。

(六) 消費の調節。消費の節限と、生産の増加とは、何れも救國の上に於ける重要性を帯びてゐる。従つて能

く消費を節約して需給關係を調節せんか、内地と農村とに於ける資金の耗溢を防止し得るのみでなく、同時にその一步を進めてこそ、對外貿易に於ける輸出入の平衡に到達し得るのである。

(七) 貨物運輸の暢達。貨物運輸に對する發展を促進せんとするには、各處の道路交通を發展せしめ、以て水陸兩方面に於ける貨物運輸の方法を改進せしめねばならぬ。同時にまた各重要地區に於いて、主要農産物——例へば棉、麥、米、生絲、茶等の如く——の公共倉庫と、運輸機關を設置し、以て蓄積と、流通の發展とに便せしめることを必要とする。

(八) 金融の整調。金融整調の方法としては、民間に於ける儲蓄を鼓勵して、資金の流通を活潑ならしめ、その他政府から健全なる貨幣制度を施行し、以て全國民が絶対にこれに信頼しつゝ、その擁護と、實行とを期せねばならぬ。

と、頗る廣汎な範圍に涉り、所謂民族經濟の更生に對して、半ば自力による奮闘を主唱せるものであつた。而して以上の要項に基いて創設された「國民經濟建設運動委員會」の形態は、大體次の如きものであつた。

(一) 本會は中央、地方に於ける官民一致の合作運動により、政府を協助し、社會を指導しつゝ、經濟上に於ける建設事業の發展を促すのを以て主旨とする。

(二) 本會は總會を南京に設け、分會を各省及び各直轄市に設置し、支會を各縣に置く。

(三) 本會は下記各項の事務を處理する。(イ)中央及び地方政府の經濟設計畫に對する協助の進行。(ロ)社

會各種の經濟建設事業の唱導。(ハ)各種經濟建設人材の養成訓練及び紹介。(ニ)各省の農工副業及び地方特殊産業の研究と發展。(ホ)節約の唱導と國貨の普及。(以上の各事務は、その性質に隨ひ、その施行を區分して定め、それらの規程は、總分支會に於いて分擔の上これを作製す)。

(四) 總會は中央の行政領袖を以て會長となし、委員は會長より指名してこれを招聘任命する。尙ほ分會は省政府主席或は市長を以て會長となし、その委員は分會長より指名し、或はこれを招聘任命する。支會は專員或は縣長を以て會長となし、その委員は支會長より、これを指名し、或は招聘任命する。總會の委員は分會及び支會の委員をも兼任することを得る。

(五) 總會の經費は、中央政府よりこれを支出し、分會の經費は、省市政府に於いてこれを負擔支出し、支會の經費は縣政府より支出する。

(六) 總、分、支會に於ける各種の事務規則は、總會長これを制定する。

(七) 會則(總章程)改修の場合は、總會長が各委員の意見を徵收したる上にてこれを行ふ。

即ち右の大綱に定められてあるが如く、國民經濟建設運動委員會總會を、經濟建設運動の參謀とし、各地に於ける分、支會を總動員しながら、積極的の運動を行はふとするのが、この機關の全貌であつて、これに對し、一般的には次の如く、

「組織大綱第三項に所列せる各條が、この會のその負ふところの使命を明らかにしてゐるのであるが、この運動

が、差し當り、政府の新幣制の徹底的普及に對して、可成り重要な役割を受持つであらうと共に、その他蔣介石政權にとつて、都合の好い全國的のあらゆる工作、乃至中央集權を促進すべき諸施設、或は軍事的統一に必要な基礎工作は、すべてこの國民經濟建設運動の下に集中せしめ、社會教化運動としての「新生活運動」と共に、全國の民衆をして、經濟的には、國民經濟建設運動に、社會的には新生活運動の下に總増員せしめるに至ることを暗示してゐる」。

との評價を下してゐたのであり、さらに支那側に於ける一般の批評乃至、政府に對する注意事項を列擧すると、大要左の如く、

(一) 經濟建設は、その工作の浩大なる點に於いて、徒らにこれを一蹴し去るべきでなく、さりとして急速にその効を收めんがためこれに従事すべきではない。故に吾人は政府當局に對し、人才主義の實行——専門智識を有する技術者をして、これに當らしむべき點——を切望するものである。

(二) 經濟建設は、その範圍が頗る廣大であるがため、先づ一つの詳細なる計畫を樹立して大局を定め、然るのち、一步、一步これを實踐すべきである。同時に各種の工作は、協調を保ちつゝ、これを進行せしめねばならぬ。その順序に緩急があるため、相互に牽制を起さしめるが如きは、功半ばにして無數の金錢と、勞力とを浪費するものである。

(三) 經濟建設に要する資金は、頗る巨大である。支那現在の貧困を以てしては、到底これを完成し得るもの

ではない。自然外資利用の一途に越らなければならぬ。然しながら、外資を利用するに際しては、歴來の外資利用の史實を回顧しつゝ、慎重にその進行を謀り、以て前車の覆轍を免るべきである」(以上當時の各新聞紙に現はれた評論を綜合)。

と、特に國民經濟建設運動と、外國資本との關係に言及せるものゝ多いのは、結局支那の如き半植民地に於ける國民經濟の更生には、外國資本との協力——國際資本帝國主義の扶助——によらなければならぬ所以を告白してをり、半植民地に於ける經濟更生と、國際資本帝國主義との附庸關係を遺憾なく表明してゐる。そしてこのことは、單に御用批評家たちの理論であるばかりでなく、實際は、支那に於ける支配的階級の偽らざる聲を代表してゐるものに外ならぬのであつた。

斯うした點——國民經濟建設運動が、國際資本帝國主義の協力によるにあらざれば、自力を以てこれを成し遂げ得ない點——に、國民經濟更生運動が、既に單なる經濟問題乃至、國內政治問題としてよりも、さらに國際政治問題としての重要性を帯びつゝ展開されるに至つた核心があり、斯くの如くにして、變體的ながら、漸次高度化の段階に到達しつゝある支那の銀行資本が、生産流通——産業企業をその支配下に抱擁しようとする工作も亦、歸着するところ、買辦性の羈絆から脱し得ない所以を最も有力に物語つてゐる。即ちこれを換言せば、國家銀行資本トラストによる畸形的金融資本の支配的要求——全社會に於ける貨幣資本の處分權を獲得し、同時に銀行資本のもつ矛盾を緩和せしめようとする要求——も亦、國際金融資本の最高統治下に於いてななければ達成することが出来ない

所以を暗示してゐるのである。

X X

元來支那の經濟建設は、最初國際聯盟の指導の下に——國際聯盟の對支技術的協力の形態——於いて、着々その歩を進めて來たのであつた。而して、それは純然たる技術協力であるに止り、何等政治的色彩を帯びざることを原則とされてゐたのであつたと雖も、その間別に鐵道に於いて、自動車道路に於いて、航空路に於いて、基本工業の方面に於いて、これらの建設事業に對し、歐米諸國が、極めて積極的な援助振りを示してゐるのであつた。

「歐米資本帝國主義としては、支那が半植民地であるが故に、その經濟建設事業の遂行に際しては、必らず歐米専門家の指導と、國際金融資本との提携に據らなければならぬことを深く知つてゐた。自然我等が支那に於ける經濟建設事業を仔細に研究するとき、先づ國際資本帝國主義との直接、間接の關係の少なからざる事實を發見し得るのである。例へば粵漢鐵道の修築は、香港に於ける英國の勢力をして長江に直達せしめんとする目的であり、平綏鐵道の延長は、日本の大陸西漸政策の達成に便ならしめ、山西と廣西の開発は、既に日本の資本により、日本との合作の下に行はれつゝあるは勿論、廣東と、四川の建設事業計畫は、英國資本が、その後援をなしてゐるのである。その他公路(自動車道路)の建設には、米國がその自動車と、ガソリンの販路擴張のため、これに對して積極的の援助をなし、航空事業には、米國資本と、獨逸資本との競争が表現され、最近日本の唱導しつゝある日支經濟提携運動には、半植民地支那の經濟建設が、半植民地的の本質の下に行はれてゐる所以を遺憾なく

發揮してゐる。さらに支那の經濟建設には、別の一つの特徴をもつてゐる。それはそこにも亦、割據の局面を形成しつゝある點であり、勢ひ支那の國民經濟建設は、少くとも三大體系に分れてゐる。その第一は中央系で、長江流域と、東部沿海各省を包括し、その第二は、西北系で、山西省がこれを代表し、その第三は、西南系で、廣東、廣西がこれを代表してゐる（一九三五年「中國經濟年報」から抄譯）。

とは、支那に於ける國民經濟建設事業の、國際資本帝國主義との關係に對して評價した一節である。この點に於いて國民政府——蔣介石の主唱する國民經濟建設運動なるものも亦、結局これらの國際資本帝國主義の金融資本による直接、間接の關聯乃至、その協力、若くは援助、或はこれらの提携がなくては、到底實現し得ないのである。

(四) 分散的産業部門に對する一種の獨占形態の萌芽

支那に於いては、近年來盛んに統制經濟が唱導され、國民政府を中心に、各地方統治機關に於いても亦、産業に對する一種の結合を行はしめ、それらを政府機關の統制下に置かうとする、最も畸形的な、一種の獨占形態が萌芽するに至つた。

元來統制經濟に對する運動、乃至施設は、さきに國際聯盟が、對支技術的協力の形態の下に於いて、經濟的、技術的の援助をなしつゝ、ために支那に於ける經濟開發の事業が、漸次具體化しつゝあつた際、宋子文等の主唱によつて、全國經濟委員會と稱する大規模な機關の創設を見ることとなり、勢ひその所屬として、棉業統制委員會、絲業統制委員會、糧食統制委員會等々が設置されたと共に、實現し、漸次所謂統制の實が舉がかりかけてゐたのであつた。

た。

即ちそれによれば全國經濟委員會を經濟參謀本部たらしめ、各産業部門別に附屬機關を設け、それによつて、經濟活動上に於ける一種の統制を試みんとしたもので、直接國際金融資本（とくに英、米を主とする）に、隷屬しながら、各産業部門に對して一種の獨占形態を出現せしめようとする點に重きを置いてゐたのであつたが、當時尙ほ支那では、銀行資本が現状の如き程度にまでの膨脹、集積を來たしてゐなかつた上、自然銀行資本の高度化に伴ふ矛盾も亦——投機信用、流通信用の意義と範圍とが縮小されず、且つ利潤の運減もなく、寧ろ銀行資本が生産の廢額の上に於いて、多々益々増大の過程にすらあつたため——些程の激化を來たしてゐなかつた。のみでなく、國際政治の環境が、國民主義の擡頭と共に、漸次國際主義の後退を要求しながら、その主體たる國際聯盟の職能を失つて、殆ど消滅に近いまでの無力さに陥らしめて行つた等、國際主義に根ざした統制經濟などの發展の可能をなからしめ、結局全國經濟委員會及びそれに所屬した各統制委員會は、何れも有名無實に終り、その工作の進展が全く停止するに至つたのである。

同時に爾來各省に於いても亦、——とくに山西省及び廣東省の如き——前者の十年計畫、後者の三年計畫によるそれらは、名義上、一種の統制經濟を實施するものであつたが、これらも亦、實質的には市場の獨占、原料の獨占、或は生産獨占の一種としての企業組織の獨占であり、カルテル、トラストと同様の性質は、少しもこれを帯びてゐなかつたことは謂ふまでもなく、本質的には、經濟上に於ける地方的割據と、一種の封建的な搾取關係を基礎とし

て生れ、且つ封建的勢力を發展せしめるための一つの機構でしかなかつた等、獨占の形態としては、問題とするに足りないものであつた。

然しながら最近萌芽するに至つた、實業部の「基本工業計畫」（五大基本工業の創設計畫）、「上海魚市場」、または、安徽、江西兩省の「紅茶の販賣統制」、及び内外燐寸業者の組織にかゝる「中外商燐寸産銷聯營社」乃至、桐油の輸出統制とも見るべき「植物油廠」、或は浙江省の「肥料製造廠」または「大機器廠」、並びに湖南省の「自動車公司」等々は、何れも新興の獨占的性質を帯びた形態であると稱して好い。

そして、それらには、その背後に、何れも畸形的金融資本への成長段階にある——銀行資本の膨脹が、遂にそれ自身の矛盾を激化せしめ、さうした矛盾の激化は、全社會の貨幣資本に對する處分權の獲得、國家銀行資本トラストにまで發展させた——銀行資本が働いてゐることを看過出来ないのである。

さらに、銀行資本のかうした發展は、全社會の貨幣資本の處分權を完全に自己の掌中に把握すると共に、全産業部門に涉る統制にもその手を伸ばすべく、貿易統制（管理通貨による爲替統制は、幣制改革後、その成功を收め得たことは既述の通りである）にまで、進まんとしてゐるのであり、政府權力を通じて、この方面に於ける計畫を準備せしめつゝあるものゝやうであるが、斯かる意味に於ける貿易統制は、最高支配權をもつ、國際金融資本の絕對にこれを忌避するところであるがため、到底實現しさうにもない。

第三編 支那財閥と政權の分析

支那の革命運動——嚴密に謂へば、資産階級の民主々義的革命への運動——は、折柄勃興しかけた、民族産業資本の基礎の上に發展した。勢ひ中國々民黨を中心とする國民革命運動は、民族資本の成長と共に、益々進行し、特に歐洲大戰後の新興民族資産階級の隆興につれて、急激な擴大を示した。そして所謂三民主義による啓蒙運動の普及に伴ひ、各種の階級をも、國民革命のなかに引き入れた。就中封建軍閥を主とする舊勢力に對する抗爭を擴大強化せしむべき必要上、一般民衆の獲得に努め、その結果、容共政策を採つて、共產黨との聯合戦線をすら張つた。然るに容共政策の實踐後、定律的な資産階級の民主々義的革命が、急激な躍進を以てし、無産大衆の革命的勢力の異常なる増大を來たした上、それらの動向の積極化を見るに至つた等、これに驚いた新興資産階級は、期せずして運動の戦線から後退した。自然そこには共產黨對中國々民黨との對立が結果づけられ、革命運動から退いた民族資産階級は、國際資本帝國主義と結合し、封建地主勢力、官僚、軍閥等とも聯盟するに至つた。爾來國際資本帝國主義、民族資産階級、封建性的軍閥、地主階級の三位一體の政權の基礎が固められて行つた。資本の集積・集中も亦、必然的に半植民性、半封建性の羈絆の下に於いて、その發展を過程し、尙ほ且つ商業資本の畸形的成長と、その上に於ける銀行資本の膨脹による買辦・銀行資本家財閥の支配

力を強化せしめ、それらの階級を基礎とする政權が確立されたことは謂ふまでもない。但し商業、銀行資本は、その高度的な發展と共に、それ自身の矛盾を激化させ、必至的に一種の畸形的な金融資本が形成せられ、その寡頭制をすら萌芽するに至つた。斯うした畸形的な金融資本家、財閥を代表する中央政權は、最早中國々民黨の指導理論たる民主主義的革命の實踐から全く遠ざかり、今や國際資本帝國主義の指導下に於いて、買辦・銀行資本家財閥の欲するがままに、全國に對する政治的、經濟的統一への制覇を目指しながら、その歩を進めてゐる。斯くの如くにして財閥と中央政權とを圍む本質的な主要條件は、この點に存してゐると稱して好い。とは謂へ支那の財閥はコンツェルンの發生にまで達しない脆弱な財閥でしかないだけに、その政權の基礎も亦動搖することを免れない——

第一章 中央政權の統一制覇と獨裁強化

第一節 緒 言

「産業革命は、大工業が工場式手工業制にとつて代つた。いたるところに於いて、ブルジョアジーと、その富と、その権力とを最高度に發展せしめ、そしてそれを國內に於ける第一の階級たらしめた。その結果は、このことの起つた到るところに於いて、ブルジョアジーが、政治的権力をその掌中に收め、従來の支配階級、乃至貴族、同業組合市民、及びこれらの兩者を代表する……を壓倒するに至つた。ブルジョアジーは、世襲財産、乃ち土地所有の賣買禁止、及び一切の貴族の特権を廢止することによつて、貴族の権力を撲滅した。ブルジョアジーは、すべての同業組合と、手工業の特権を廢止することによつて、同業組合市民の権力を破砕した。これら二つのものの代りに、それは自由競争を、乃ち、各人が自ら好む産業部門を經營する権利を持つやうになつた。そして各人は、その必要な資本が足りないといふことを妨げられることのないやうな社會の状態に置き換へた。ブルジョアジーは、かやうに貴族と、同業組合市民との社會的権力をも勦滅したるのち、彼等の政治的権力をも勦滅した。ブルジョアジーは、それが社會に於いて第一の階級にまで成り上つたやうに、政治的形態に於いても亦、自ら第一階級であると宣言した。そして彼等は代議制度——法律の前での社會市民的平等の、自由競争の法規的承認の

上に立ち、さうしてヨーロッパ諸國に於いては、立憲君主制の形態の下に採擇せられたるところの代議制度の採擇を通して、このことをなしたのである。これらの立憲君主國に於いては、いくらかの資本をもつもののみが、従つてブルジョアのみが、選挙人である。これらのブルジョア選挙人は、代議士を選び、そしてこの代議士が租税拒否の権利を通して、ブルジョア政府を選ぶのだ」(エンゲルス著森戸辰男氏譯——雜誌「我等」十卷四號から)。

以上は先進資本主義國に於ける新興資産階級の政權獲得への過程であり、而して典型的な資本主義國たる英國に於いては、次に摘録するが如く、

「當時のイギリス議會に於いては、新興ブルジョアジーは、選挙権を有さなかつた。これを有してゐたのは地主であつた。そこで選挙権獲得運動がおこり、一八三二年、選挙法案が議會を通過し、ブルジョアジーは漸次政治的方面に進出する鍵を握つた所以である。この運動には、新興プロレタリアートも亦参加したのであるが、結果に於いては選挙権者の範圍から除外された。一八三五年には、地方自治制度の改正が行はれて、ブルジョアジーも自治制の上に参加、監督するの権利を克ち得た。コブデン及びブライトを首班とする反穀物條例同盟は、多くのブルジョアを包含して猛烈なる運動をなし、一八四九年に於いて、遂に穀物條例を撤廢せしめた。一八五三年、リベールールのグラッドストーンは、ブルジョア新政黨たる自由黨を指導して、保護輸入税の撤廢、フランスとの自由通商を唱へた。かくしてブルジョアジーは、政治的活動を始め、富の力を以て、政治界を壟斷せんとなし始めた。労働黨が多数を占めるまで、このブルジョア政黨たる自由黨は、資本家のために大なる政治的役目を勤めた。

めたのである」(石濱知行氏著「資本主義の成立とそれ以後に於ける經濟的發展」から)。

等々の發展段階を過程したのであつた。然るに産業革命を過程しないのみでなく、従つて大工業資本の産生を見るに至らなかつた支那では、新興資産階級と、その富と、その権力とが、甚だしく微弱たるを失はなかつただけに、新興資産階級が、社會に於いて第一の階級にまで成り上り得なかつた。自然政治的形態に於いても亦、さうであつたことは謂ふまでもない。

而かも第一編各章に於いて解説した通り、産業革命發生の前提條件を具備するに至るまでの期間すらが極めて永く、且つその條件も亦薄弱であつたのと、國際資本主義の壓迫力が、著しく強化しつゝ進展するに至つたため、資産階級の民主主義革命すらが、その途上に於いて遂に挫折するの熄むなきに立ち到つた(資産階級の民主主義革命の挫折は、前各編各章でこれを略述した如く、國際資本帝國主義の壓迫と共に、さらに國內に於ける封建勢力の殘存とその復活、乃至民族資本が買辦資本主義機構の下に於いて益々畸形的な發展を過程せざるを得なかつたのと、共產黨に指導されてその組織力の強化を來たした無産階級の勢力が、これまた餘りに機械主義的な發展を來たした等々の客觀情勢に伴ふ必至的の經過であつたことは勿論である)。さうした結果は、期せずして、新興民族資産階級をして、單獨的に政權を獲得することを得せしめなかつたのであつた。

このことは、さらに前述の如く、支那社會の經濟機構が、頗る複雑を極めてゐたのと、そこに國際資本帝國主義の強力なる支配的形態が作用しつゝあつたところの當然の結果であるとは謂へ、一面に於いて、新興資産階級と、

その富と、権力とが、最低度の發展しかもち得なかつたからでもある。

この點——支那の新興資産階級の發展が、どの程度にまで達してゐたか、及びその政權の關係——については、當時、相當な理論闘争が行はれたのであり、こゝで、支那に於ける新興資産階級の地位を瞥見しておかぬがため、その問題に關する左の一節——孫倬章氏の取消派に對して加へた反駁——を摘録しておかう。

「取消派は次の如く謂ふ——全國の商業資本と、銀行資本との融合せる基礎の上に建築された國內工業は、非常に迅速に發展し、重要な農民區域の完全な市場依頼、對外貿易の偉大な、且つ日増しの増大、支那農村の各方面に於ける都市への隷屬等々、これらの事實は、すべて資本主義關係を表現し、従つて支那の社會は資本主義化し、當然偉大な資産階級が、そこに存在しつゝある。既に偉大な資産階級が存在するがために、必然的に完全な獨立的資産階級の統治政權が確立され、同時に且つ資産階級の統治政權が安定するに至つた——と。然しながら、斯うした評價、即ち彼等の認識の基礎をなすところの資産階級が、現在の支那に於ける唯一の統治階級であると謂ふ理論は、支那の資本主義が一種の初期の變體的資本主義であると謂ふことを知らない。換言せば支那の資本主義に對する機械的唯物論から來た誤謬である」(孫倬章氏著「怎樣幹」第四章「中國統治階級」——「中國統治階級は畢竟如何なる性質か」の一節を要約)。

斯くの如くにして、共產黨との分離後の國民黨は、北伐戰による舊封建軍閥の掃蕩(それは表面上の掃蕩であり舊封建軍閥との妥協結合であつた)に成功して、全國を平定の上、完全に中央政權を獲得、樹立するに至つたので

あつたが、當時の國民黨と雖も、絶對的に、これを新興資産階級を代表する政黨であると謂ふことが出来なかつた。當然國民黨を母體として生れた國民黨政權による統治も亦、純然たる意味に於いての新興資産階級の支配形態ではなかつたのである。この間の経緯に關し、孫倬章氏の「怎樣幹」は、次の如くこれを喝破してゐる。

「資産階級の政權の形式は代議制度であり、資産階級が完全にこれを支配してゐる。この定律に基いて支那の政治史を觀察するとき、一九二二年には支那に第一次の正式な國會があり、支那資産階級は始めて政治の舞臺に出現し、第一次の政權を支配するに至つた。然るにこの時の實際權力は依然封建軍閥たる袁世凱の掌中に握られ、全く國會の支配を受けなかつた。それが故に當時の状態を資産階級と封建階級との聯盟の政權と稱してよく、決してこれは資産階級單獨の政權ではないのであつた。のみでなく一年足らずの間に、封建勢力が國會を解散して了つた。そして國民黨が驅逐されて以來、封建勢力は十餘年の久しきに涉り、統治權を握つてゐたのである。それから一九二七年以後、國民黨支配の南京政府に至つたと雖も、そこにも亦、正式の國會がなかつた。漸く今年に及んで國民會議が舉行されたとは謂へ、その代表はすべて軍閥の走狗であり、眞に國民の意志を代表するものが一人もゐなかつたのである。尙ほ且つその會議も亦僅かに十餘日に過ぎず、政府の出席者が殆ど半數に上り、主席及び秘書も亦、政府からこれを指定した。斯くの如き會議は、結局有名無實で、政治上何等の影響をも引き起さず、自然人民のこれに注意するものすらなかつた所以である(中略)。斯くの如くにして、これを資産階級の統治の形態から謂ふとき、最近幾年來の南京政府は、絶對的にこれを以て資産階級の統治と稱するを得ないので

ある。假りに一步を退いて、國民黨が資産階級の代表であり、國民黨の統治（資産階級のデモクラシイ的政治の定律から謂つて、このことは實に根據のないものであつたが）が、資産階級の統治であるとしておいたところで、南京政府はその成立以來、或は西南系と、或は馮、閻系と、或は奉天系等の各軍閥と聯盟しながら、支配的政權を維持して來たのであり、そこには終始國民黨の一個の支配による政權は一日として實現しなかつたのである。これを換言せば、依然資産階級と封建階級との聯盟の政權が繼續され、資産階級の單獨支配の政權は一日と雖もその出現を見ることを得なかつたのである。さらに我等が支那資産階級の統治について論ずるとき、當然國民黨に對してこれに分拆を加へる必要がある、即ち國民黨は畢竟如何なる階級を代表してゐるのであるかと謂ふ點に關して——この問題について或るものは謂ふ——「國民黨はその最初の發生時代には各種の複雑な社會階級を包含してゐた。即ち支那に於いて初めて發生した資産階級（その主要なものは華僑である）、及び小資産階級の知識分子は勿論、工人（海員の如く）、破産せる農民、失業せる大衆（會匪の如く）、甚だしきに至つては、封建地主勢力をすらも包含してゐた。その後辛亥革命以來、幾多の官僚、軍閥が、これに加入し、一つのゴミタメとなつて了つた」——と。これは、國民黨が單に一つの階級を代表する政治團體でないことを主張してゐるのであつた。さらに或るものは謂ふ——「國民黨は、勿論その實踐の歴史上に於いて、三民主義の政綱に於いて、實業建設計畫の上に於いて、その上層領袖の構成分子の上に於いて、一つの資産階級を代表するところの政治團體である」——と。これは國民黨を一つの單なる資産階級を指導する政治結社であると認めた説に外ならぬ。然

らばこの二つの説の何れが正しいかと謂ふ結論に下さねばならないのであるが、以上の二つの主張に對して、我等は、その何れもが唯一の方面を看たのみに過ぎぬ、従つてその双方ともに夥しい誤謬のある所以を指摘しなければならぬのである。元來國民黨は常に發展しつゝあり、決して停滞してゐなかつた。従つてその本體から説明するならば、當然一つの資産階級の政黨であつたが、然しながらその發展前進への途上に於いては、常に各階級を包含してゐた。その對立的の階級、即ち社會の下層階級をも包含してゐたのである。例へば一九一一年と、一九二五—二七年前に於いては、まさにさうであつた。そして彼が政權を奪取した時には、最早この種の下層階級の分子を抛去しつゝ、上層分子を吸収したのである。例へば一九一一年以後と、一九二七年以後とが、さうであつた。斯くの如くにして現在の國民黨は、上は封建軍閥及び貧官汚吏に始まつて、下は土豪劣紳、土匪流氓に至るまで、民衆にとつての一切の對立的階級を網羅しながら、牛首蛇身の怪物がすべて國民黨に入つてゐる。最近幾年來に於ける南京政府は、既に封建勢力と、資産階級との聯盟の統治權力となるに至つた。それは國民黨が資産階級と封建勢力との混合の政黨となつて了つたからである。而かも現在に至つて獨り國民黨の代表が早くも脱退し、同時に右派西山派も亦、すべて脱出するに至つたのである。自然これを具體的に謂ふとき、資産階級を代表する國民黨員は、現在既に完全に退出して西南に集合しつゝ、別に一つの資産階級と封建軍閥との聯盟政權が形成せられてゐるのであり、當然現在の南京政府は、單に一つの蔣介石軍閥と各省軍閥及び舊奉天系軍閥との一種の「清一色」的の封建勢力の統治であると斷定せざるを得ぬのである。とくに南京の國民黨に至つては、これ

らの封建勢力に養はれる、一種の黨官の集團に過ぎないのである。即ち封建軍閥の御用機關となつて了つたのである(中略)。これを綜観するに、一九一一年以來の支那の統治權は、封建勢力によつて單獨的に統治せられた時間が、最も久しく、資産階級と封建勢力との聯盟統治の時間が最も短かいのであつた。極言せば封建勢力の支那統治上に於けるところの力が最大であり、資産階級の支那統治上に於ける力が最も薄弱であるのであつた。就中資産階級によつて單獨に統治されたことは、たゞの一回だにもないのであつた。こゝまで來ると、支那は現在既に資本主義の影響下にある社會であるがため理論上資産階級の支配的統治であるべき筈に拘らず、さうでないのは、如何なる原因に基くものであるかを解説しておく必要に迫られる。さうした點に關しては次の如く答へるものである。(一)支那は半植民地の特徵により民族資本階級の能力が頗る薄弱であるがために獨立した統治權を得し得なかつた。(二)資産階級の獨立的統治への實現には、必らず先づ徹底的に封建勢力を解消してはねばならなかつたのであるが、支那革命の發展過程に於いては、そのことは遂に成し遂げ得なかつた。尤も支那の資産階級は一九二五—二七年に於いて、勞農大衆と聯合して、長江以南の封建勢力は、殆どこれを解消するに至つたが、北伐軍が長江に到達してのち、勞農大衆の勢力の異常な増高に驚愕した資産階級は、北方の封建勢力と妥協した。のみでなく南方の封建勢力も亦、同時に復活するに至つた。これがために資産階級と封建勢力との聯盟の南京政府が成立することとなり、今日に於いては、南京政府は完全に資産階級を排斥して、「清一色」的な封建势力的な統治が實現してゐるのである(孫傳章氏著「怎樣幹」第四章「中國統治階級?」三「資産階級は統治權上に於いて

だ附庸的地位を占むるのみ」を抄譯)。

以上の経緯がこれを物語つてゐる如く、支那の支配的統治階級は頗る複雑・錯綜を極め、勢ひ畸形的な發展を過程しながら、封建勢力が、統治の上に於いて優勢な地位を占め、同時に新興資産階級は、さうした統治の上に於ける附庸的地位を與へられつゝあるに過ぎず、同時に國際資本帝國主義が最高の支配權を把握するに至つたのである。斯かる發展過程は、新興資産階級と、その富と、權力とが最低度にしか成長しなかつた必然の経路であり、同時にまた支那の民族資本機構の變體的成長への行程に徴するとき——買辦資本主義經濟機構に於ける支配的階級がどの階級であるかの事實をもつてするとき——斯うした支配的統治階級の形成されるのは、これまた必至的であつたと言つて差支がない。

前途の消息に對しても亦参考のため「怎樣幹」の著者の分析を左に摘録しておかう。

「取消派の謂ふところの説——「資産階級は革命から後退して帝國主義に投降し、封建勢力とも妥協しつゝ、部分的政權を取得するに至つた。同時に帝國主義と封建勢力の統治を押し倒して自己の一個の階級を以てする政權を建立し得なかつた。現在の統治階級が、帝國主義の指揮下に於ける地主買辦資産階級の聯盟であり、國民黨がこの一聯盟の具體的形式である所以はこゝにある」——は、たしかに支那の事實に適合してゐる。然しながら、これは經濟的分析から得た結論でなく、従つてそこには確實性がない。然らば支那の統治階級は畢竟如何なる性質であらうか。單に一個の資産階級または一個の封建階級のそれであるのか。或は封建階級と資産階級との聯盟の

それであるのか。この點に關し、我等は次の如く結論するものである。即ち、前述の經濟分析の結果を根據として、資本主義が既に相當の發展を來たしたため當然資産階級も亦發生したことを否定しないのであるが、支那の資本主義の工商業の資本には外國資本が大部分を占めてゐるため、民族資産階級の力が頗る薄弱たるを免れない。自然彼には支那を統治するの能力がなく、たゞ他の階級と聯盟してのみ統治能力をもち得たのである。その際支那には封建勢力が、頗る濃厚であつたが故に、先づ封建勢力と聯盟せざるを得なかつた。さらにまた支那資本主義の構成分子に於いて、帝國主義が大多數を占めてゐる結果、支那の資産階級は、單に封建勢力と聯盟せざるを得なかつたのみでなく、同時に帝國主義の支配をも亦受けなければならなかつた。さうすることによつてのみ、始めて支那を統治し得たのである。斯うしたことにより、支那の統治階級は頗る複雑であり、決して單一ではなないのであつた(中略)。支那は現在一種の過渡期にある。まさに封建社會から資本主義社會に過渡せんとする時期にある。而かもそこには尙ほ頗る濃厚な封建勢力が残されてゐる。このために必然的に一個の單獨的な資産階級の統治政權でもなく、さりとてまた一個の單獨的な封建階級の統治政權でもなく、事實上、封建と資産との二つの階級の聯盟政權が出來上つた所以である。而かもそこには半植民地關係が最も顯著に作用してゐる關係上、同時に帝國主義の統治を受けねばならなかつたのであり、このことは歴史的に必然である」(孫傳章氏著「怎樣幹」第四章「中國の統治階級?」)「中國の統治階級は畢竟如何なる性質か」の一節を抄譯)。

X

X

爾來先進資本主義列強に於ける資産階級の政治形態は、資本主義經濟機構が、さらに限りなき發展を續けつゝ、その間に於いて、企業の結合、資本の集中、及び獨占への形態、並びに企業家聯盟の結成等々、資本主義の高度化的發展——金融資本、金融資本財閥の寡頭制への成長に隨伴しながら、一層積極的な發展を過程した——即ち次に引用するが如く、

「斯くの如き企業の集中獨占到伴つて銀行の集中が行はれ、それが少數の銀行への集中的發展を促すことに就ては、銀行の支店網、銀行預金の集中、銀行資本の集中、銀行と株式企業との人的結合、銀行利得に於ける書券利得の増大等々に依つて既に述べた。斯くして所謂金融資本閥を首腦とする縱斷的な結合が生じ、名實共に一國の生産を獨占するに至るのである。資本の集積と、企業の集中とが、かゝる點にまで發展すると、經濟界の實權は、少數の資本家の手に握られ、延ひて政治上の權力も、それらの資本閥によつて左右せられざるを得なくなる。而かも資本の集積と、企業の獨占は、その飽くなき利潤慾に促されて、よりよき投資口を求めて、海外に流出せざるを得なくなるが故に、大資本閥と、大資本閥との國際的な衝突が必然化されるのである」(河野密氏著「社會主義の發展」改造社、經濟學全集、第三十二卷)。

と、資本主義の最後の發展段階としての帝國主義に到り、而して今や何れも帝國主義自身の内包せる矛盾と、その矛盾の展開とに悩まされつゝ、あるものはそれを克復すべくファッショ化し、あるものは計畫經濟によつて、その緩和を計るべく焦つてゐるのである。

その間に於いて支那の統治機構は、國際資本帝國主義、民族資産階級、封建勢力の三位一體の統治的勢力の結合によつて、依然半植民地性、半封建性的の發展を持続しつゝある。

而かも最近に至つて、國內的には銀行資本の驚くべき膨脹が、國家銀行トラストを主とする一種の畸形的な金融資本を形成するに至り、この畸形的金融資産階級を首魁とする縦斷的な結合が生じ、さらに國際金融資本に對する附庸關係を密接ならしめつゝ、政治的統一——そのための中央政權を以てする獨裁強化への要求が、具體化されて行かうとしてゐる。

第二節 中央派の獨裁強化とその基調

支那に於ける民族資本が、國際金融資本に附庸しながら、買辦資本主義經濟機構を特徴づけつゝ、その發展を續けて行つた渦中に於いて、とくに銀行資本の増大と、その集積・集中への段階が進められ、同時に銀行・買辦資本と、中央政權との結合が、益々深められた結果、そこに國家銀行資本トラストが、形づけられるに至り、遂に一種の畸形的な金融資本の寡頭制に似た形態にまで延長せしめたことは、一面に於いて政治上の権力も亦、それらの買辦・銀行資本財閥によつて左右せられなければならぬ客觀情勢を形成せしめた。

そして買辦・銀行資本財閥の支配階級としての勢力の増大につれて、國民黨内に於いて、これらの階級を代表する分子の勢力が、益々膨脹・擴大されて行つたことは謂ふまでもない。これを別の方面から謂ふとき、これらの階級

が、その支配的階級としての勢力の増大と共に、國民黨も亦漸次、その階級を代表する政黨として改造され——乃至その方向を轉換して行つたのである。

さらにこれを具體的に謂ふならば、國民黨内に於ける中央派——蔣介石を中心とする軍事勢力及びその政治的勢力——が、爾來久しき期間に涉つて、中央政權を獲得し、而かも政治上に於けるこの勢力が、軍事的勢力を挾んで、益々中央集積の強化——寧ろ一種の獨裁的権力の強化——を押し進めつゝある情勢によつて、以上の経緯が、遺憾なく物語られてゐる。

従つて國民黨政權の中央集積を目指す、全國統一への制覇——蔣介石中心の獨裁強化——は、極度にまで増大發展した銀行資本——それは極めて變體的な發展過程でしかなかつたが——と、銀行資本の膨脹の過程を中心として派生したところの買辦・銀行資本財閥の基本的な要求であり、勢ひ國際金融資本も亦、その支那に對する最高支配權を維持するため、買辦・資本に對しての作用を通じて、如上の中央集積、全國統一への制覇——蔣介石を中心とする獨裁強化に對しては、絶へずこれを支援し、またはこれを鞭撻つたことは勿論であつた。

就中支那に於いては、ソヴェート政權の擴大と共に、無産大衆の組織の増大は、絶へず、民族資本の發展を脅かすことが夥しかつたと共に、國際資本帝國主義にとつても亦、中華ソヴェート政權が、資産階級の政權に對立することに對しては、その金融資本の對支進出を阻礙され、且つ在來の勢力をも蠶食されなければ熄まぬばかりでなく、あらゆる意味に於いての障礙であり、その掃蕩排除のためには、軍事的、並びに經濟的の、直接または間接の援助

を吞しまつたのである。

自然國際金融資本は、國民黨政權の中央集權、全國統一への制覇——とくに蔣介石政權の獨裁強化——を援助しつゝ、獨裁政權をして徹底的な剿匪工作を斷行せしめたのであり、こゝにも亦、銀行・買辦資本家階級——國際金融資本——中央政權の三位一體の統治形態強化の基本的條件があつた。

斯かる客觀的情勢に對しては、次の摘録する一節の如き、遺憾なく、この間の關係を理論づけてゐる。

「支那資産階級——金融資産階級を指す——の發展は、一種の畸形的な發展であつた。これを換言せば、彼等は資本經濟の生産關係によつて產生して來たものでなく、反對に封建性搾取關係の中から產生して來たものであつた。これがために彼は、外に對しては、必然的に資本帝國主義に附庸しつゝ、それに庇護され、内にあつては必然的に封建軍閥と勾結した。而して金融資本の經濟上に於ける獨占の把持への要求は必然的に政治上の獨裁に反映した。而かもこの獨裁統治は中央軍事領袖を透過しながら、暴力を以て勞農大衆を鎮壓し、政治上に於いては、勞農大衆に對し、闘争の自由を少しも與へなかつた。のみでなく、同時に經濟上に於いても亦、勞農大衆に對して、息つく暇すらもなからしめたのである。そしてその残酷な搾取關係を維持しつゝ、益々發展の歩を進めたのであつた。これに對し小資産階級の立場は、自然固定的でなかつた。とくに一九二九年の革命の失敗以後、一層その傾向を顕著ならしめた。即ち支那の小資産階級は、勞農大衆と同様、帝國主義と、封建勢力との二重の壓力の下に苦惱せざるを得なかつたのである。そこで彼等も亦、反抗的な要求をもつてゐた。彼等の反抗的な要求

は國家資本の建設を主張せしめた。それは國家資本經濟の體系中に於いて、社會經濟形態を統一し、及び社會の意識形態をも統一して、社會革命の基礎をそこに造り出さうとしたのであつたのである。その主張によれば、最初には私人資本と國家資本とを同時に並存せしめ、漸次私人資本の消滅を促すべきであると謂ふ點に重きを置いてゐた。斯くの如くにして、斯うした情勢の下に於いて、一九三〇年の空前の反金融資本勢力を中心とする大内戦を爆發せしめたのである(著者註 擴大會議派の反蔣介石戦がそれであつた)。このことの基本的な原因は、小資産階級の政治上に於ける要求が民主にあり、金融資産階級の政治上に於ける要求が獨裁にあり、この二つの相反した要求は本質的に對立的形態ならしめるものである點にあつたことは謂ふまでもない。九・一八事變の發生後、一面民族意識の高潮と、一面金融資本の動搖とは、支那金融資産階級をして、その支配的統治の維持に頗る困難を來たさしめ、而かも一方勞農大衆階級の組織が薄弱であつて、勢力的に見るべきものがなかつた結果、當然中間の地位にあつたところの小資産階級が、必然的に、その機會に乗じて、一時的の政權を取得したのであつた。但しさうした政權は、特定の外交關係の維繫のために、形成するに至つたものであつたに過ぎず、勢ひ外交關係が一段落を告げた後は、必至的にその存在の條件を失却したのである。謂ふまでもなく金融資産階級のために取り潰されたのである。元來支那の經濟勢力は、自然的に長江、黄河、珠江の三大區域に區分されて對立し、各區域はまたその海口を以て——例へば上海、天津、廣州をその吞吐港となしてゐる如く——、勢ひ上海の金融資本は最高の支配地位を占めつゝあつた。さうかと謂つてこの三大區域は、また帝國主義の支配勢力の點から見て、同じや

うな關係の下におかれてゐなかつたために、相互間に對立を續け、而かも對立から來る矛盾を發生せしめ、及び矛盾の爆發が絶へなかつた。その最も顯著なるものは、華南の民族産業資本勢力に對する、金融資本勢力との對立、並びに西北封建殘餘の勢力に對する金融資本勢力との對立が、それであり、この對立の具體的に表徴されたものは、近年來の不斷の内戰であつた。但し東南金融資本と東北官僚資本との結合後——當然その間に於けるアメリカ帝國主義の積極的な作用を看過出来ないものであるが——中央軍事領袖と東北軍事領袖とに於いての合作が行はれ、華南の民族産業資本勢力と西北に於ける封建殘餘の勢力とは、痛烈な脅威を與へられた。従つてそこに一九三〇年から三一年の間に於ける暫時的の安定が過程されたのである。民主政治を號召しつゝあつた汪精衛は、六、七年來、廣州から武漢政府に、武漢政府から擴大會議に、擴大會議から南京の責任内閣にと轉々遊離しながら、その態度に不定的の嫌なしとなつたが、然しながら、彼は終始民主的傾向を保持してゐた。この點に獨裁金融資本の彼を忌避する所以があつた。今次の汪精衛の辭職は、當然小資産階級と金融資本の獨裁との矛盾の爆發であらねばならぬ」(一九三二年八月發行の雜誌「當代論壇」第一期、胡澤吾氏の「汪精衛の辭職と統治階級の内部的矛盾」を抄譯)。

X X

大體以上の如き理論的基調の下に發展するに至つたところの、現南京政權の獨裁的支配は、一方買辦・銀行資本の獨裁要望への作用の強化と共に、益々前面に押し進められた。

この間の動靜に對しては、反獨裁派の間で次の如くこれを評價反駁してゐるのであり、斯くの如き評價は、稍や一方に偏し過ぎた點なしとしないのであるが、参考のためこれを摘録することとした。

「過去に於ける多くの學者及び國民黨同志は、新軍閥領袖の獨裁政治に對し、種々にこれを分析した。あるものは獨裁政治は封建勢力の復興であると謂ひ、あるものは、これを買辦階級の政權であるとなし、あるものは獨裁政治を以て、遊民階級の結晶であるとすら評價した。而してこの何れもの分析の結論が固より正しいのであるが、然しながら我等は、現在の獨裁政治を以て次の三つの主要な基礎の上に建築されてゐるものであると認定するに躊躇しないのである。即ちその第一は寄生的金融資本階級(買辦階級の變態)の上に建築されてゐると謂ふことであり、第二には封建勢力の上に建築されてゐる形態を挙げ、第三には廣大なる遊民階級によつて集成せられてゐるところの軍閥系統の私人軍隊を基礎として建築されるに至つた彼の發展過程を指すのである。同時に寄生的金融資本階級と、封建殘餘の勢力とは、帝國主義と密接な關係が結ばれてゐるために、獨裁者の背後には帝國主義が控へてをり、帝國主義の助力が絶へず與へられてゐたのである。幾年來に渉る反蔣運動が、毫も成功しなかつた所以は、右の三つの要素が頗る根強い存在たるを失はなかつたからであることは謂ふまでもない。たゞ今次の大衆の反帝運動と、民権闘争の高潮の下に於いて、一時その獨裁の形態を動搖せしめ得たと雖も、その後幾何もなくして、彼等の勢力は、復活を來たすに至つた。このことは、獨裁者の獨裁政治が、或る一つの單獨的な反動勢力のみを以て形成したのではなく、全國の反動勢力を集合し乍ら、同時に帝國主義の助力を得て、そこに反動

的大集團が形成されて来たからである。この點に關して我等は、實例を擧げて解説を試みねばならない。それには先づ獨裁政治が、如何にしてよく今日までの存在を續け得たかと謂ふことを探究する必要がある。そしてその回答のために、我等は彼の廣大な經濟源泉について述べておきたい。而かもこの經濟的源泉は、買辦金融資産階級によつて掘り出されたものであつたからである。五年以來南京政府の名義の下に發行されたところの内債は一億元の巨額に達した。而してこれらは、すべて金融資産階級によつて消化されたものである。いまこの内債發行の状態を見るに一切の債券は、形式上額面價格の九八或は九二替へ實收と謂ふことに規定されてゐたが、實際的には、最初その三、四割掛けで、銀行をして短期抵當借款の形式による融資を行はしめ、相當の期間を経過したのち、さらに銀行からこれを證券交易所で賣出すと謂つた順序がとられてゐたのであつた。従つてその市價は平常時に於いて約六割乃至七割内外（額面價格に對して）を保たれてゐたが、一たび外來の刺戟によつて價格の低下を來さんか、銀行はその機會に乗じて、これを市場から買戻すのを常とした。斯うした経緯によつて銀行は左手で賣出し、右手ではこれを買戻しつゝ、一出一進のうちに市價の吊上と、買支へを行ひ、巧みにその操縦を行つた。そしてさらに渦中に於いて獲得した利潤の夥しく雄厚であつたことは、農村の高利貸に比較すべくもなかつたのである。同時にこれらの債券の大部分は銀行界の掌中に握られてゐたため、その利拂ひ償還がすべて額面價格に照らして、規定の如くなされたのである關係上、銀行の受けた利益たるや蓋し莫大なものであつた（中略）。支那の金融資本家の公債投資額は、斯くの如く巨額に上り、その額に於いて驚異的の數字を示してゐたので

あるが、斯うした投資は、獨裁者が、その一部分を、獨裁政治維持のための廣大な軍事實に充用されたほか、その他の一部分は、彼等の徒黨の私囊を肥やした。而して全國の各種の經濟建設に對しては何等これを顧みるところがなかつたのである。勢ひ獨裁者の浪費の下に於いて支那に既有的經濟基礎をすら破壊せしめるに至つたのである。支那の金融資本家は公債の投資に對して、非常な氣概を示したに拘らず、國內工業の投資に對しては、頗る怠病であつた。各國の金融資本家が、本國工業の資本の調節を調節し、本國工業の對外發展を扶助したのに較べて雲泥の差があつた（中略）。斯くの如くにして支那の金融資本は國內工業に對してこれを扶助するどころか高利貸資本による搾取を以てこれに臨み、延ひて工業を窮地に陥れ、同時に大量な公債の消化を挾んで民間の膏血を吸収したのであつた。このことは公債の利拂ひ償還は、政府の民衆に對する苛捐雜税によらざるを得なかつた點に明らかに表示されてゐる。最近支那の金融業界は、前述の如き重大なる利潤の搾取の上に於いて、相當的發展を表現した。然しながらこれは決して支那の國民經濟の提高を意味するものではなかつた。同時に支那の獨裁政治の建立も亦、支那が既に統一されたと謂ふことを表示するものではなかつたのである。支那の金融資本家と獨裁政治の把持者とは、帝國主義と同じく、全國の工業にとつての敵であり、全國民衆にとつての敵であつた。さらに獨裁政治の把持者は、金融資本家と、勾結して、これを廣大なる經濟的源泉となしたのみならず、その反動政權を維持すべく、多くの封建官僚と政客とを吸収した。斯うして彼等の基礎は、豪紳土劣の反動集團の上に築き上げられたのである。而してかゝる環境を形成せしめた所以のものは、獨裁者が、革命に背

叛した以來、この種の封建官僚及び政客との間に於いて利害關係を共通せしめるに至つたからであり、彼等は斯うした一つの基礎の上に、親密な結合を引き起しながら、五年以來に於ける南京獨裁政治の反動的大集團を組成したのであつた。その結果過去に於いて國民黨に反対した多くの人々も亦、現在その大部分が國民黨に忠實な同志となり、その一部分のものは、同時に中央の要人とすらなるに至つた。そして一方真正な國民黨の同志及びその領袖は排斥せられ、或は南京に入ることをさへ許されない現状を示してゐる。斯うして我等は、ことごとく南京當局の特異的な封建色彩を發見し得るのであるが、これは封建殘餘の勢力が、その反動政權の形態のなかに入りこみ、而してその基本的な要素の一つとなつたからであることを有力に物語つてゐるものである。獨裁政治構成の第三の要素としての廣大な遊民階級の集成——その軍事勢力の増大は、獨裁者の獨裁政治の形成に對して、第一義的な最も重要な條件を與へた。それは「暴力が一種の偉大な經濟力である」と謂つた意義を帯びてゐたからである。獨裁者が北伐軍總司令に任ぜられた時、彼は軍事勢力の非常な發展と、黨の力が軍事勢力を支配することすら、不能に歸しつゝあるの傾向を、看取しながら、自己の統率する軍隊を彼個人の軍隊となすことに成功した。而して寧漢分裂の一幕が演ぜられて、國民黨の内部分化が、革命の進展を遮断せしめた際、その獨裁政治を造成するの端緒を作つたのである。その後寧漢の合作によつて、獨裁者は、一たび下野したと雖も、その私人的軍隊の系統が、既に完成されてゐたがために、且つまた、上海金融資本家との間に於ける、密接な關係が、結合されてゐたが故に、久しからずして復活し、改組派の領袖汪精衛と妥協しながら、彼は總司令となり、こゝに於

いて獨裁者の獨裁政治をして、發育成長へのコースを走らしめるに至つたのであつた。爾來獨裁者は、その私人系統に屬する廣大なる軍事的勢力を藉りて、革命を鎮壓し、民衆を擧取し、或はまたその他の軍事勢力を抑壓し、乃至これを解消せしめて、その獨裁政權の安定を保護したのであつた。五年以來一次の内戦が終熄する毎に、獨裁者の個人系統に屬する軍隊をして、さらに飛躍的な擴張の結果づけねば熄まなかつたのである。こゝに以上の分析を根據として、我等は獨裁者の獨裁政權は、(一)金融資本家を以てその經濟構成の基礎(當然これは民衆に對する擧取の基礎の上に立つてゐた)とし、(二)封建的官僚政客を、その政治系統の構成分子となしつゝ、(三)軍事勢力を以て獨裁政治保護の手段となすことにより、その發展を過程するに至つた経緯を知り得たのである。而して金融資本家と、封建的官僚政客とは、彼等の間にも亦最も密接な關係が結ばれてゐた。それは金融資本家を構成するものは、大部分買辦資産階級と、官僚資産階級とであつたからであり、彼等は相異なつた形式の下に於いて、同時に帝國主義の力を藉りつゝ、支那民衆の膏血の唾餘を吸収したが、かゝる買辦は外來商品を以て、民衆を擧取したに對し、官僚政客は、ことごとくの外債の成立を循つて自身を肥やすのを常としたからである。そもそも帝國主義が、支那に於ける政治と、經濟上の利益を、取得せんとする場合には、斯うした一般の走狗の媒介を必要し、且つこれらの走狗が、そこに介在することにより、それ自身の利益をも獲得することを可能ならしめたことが、買辦資産階級と、官僚資産階級をして、それ／＼相異なつた形式の下に於いて、帝國主義に附庸せしめるに至つた所以であり、彼等にはこの意味から、帝國主義者に反抗するの意志がなく、従つて彼等の上に建築

とれた獨裁政治が、帝國主義に反對し得ない所以は、全くこゝにあつたのである」(一九三二年八月發行の雜誌「南
鮮」第一卷、第十二期、公碩氏の「中國現政府の解剖」を抄譯)。

X X

而して近年に於ける先進資本帝國主義の支那に對する進出が、多々益々積極化するに至り、金融寡頭政治の下に於ける、植民地再分割への制覇的侵略が、最も露骨な形態の下に、進められて來たのである——その間植民地再分割への制覇的進出が、國際資本帝國主義者相互の間に於ける對立を益々激化せしめて行つたと共に、そこには複雑な國際政治關係をすら發生せしめねば熄まなかつたのであるが、支那の買辦・銀行資本家階級の勢力の増大と、その支配的階級としての統治上に於ける働きに對しては、均しく國際金融資本の關係乃至作用として影響するのみに止り、その壓迫力には何等緩和されるところがなかつた——ばかりでなく、恐慌による打撃を、植民地若くは半植民地に轉化せしむべき目標の下に、その對支進出力を加重し、支那をして半植民地から完全な植民地にまで轉落せしめんとして、支那が資本帝國主義國によつて獨占的に支配されるか、または資本帝國主義列強間に新たに分割されるかの客觀情勢をすら表現しながら、頗る緊迫した環境下に立つてゐるのである。

然しながら、斯うした情態の下に於いて、買辦・銀行資本財閥及びその代表政權は、これと抗爭することを敢てなし得ざるのみでなく、依然國際金融資本の支配的・最高統治の下に於いて、その全國統一への制覇と、獨裁勢力の強化とを進めつゝあるところに、支那の支配的階級の統治上に於ける姿態を特徴づけてゐるのである。

第三節 中央政權の歐米依存性及び獨裁と憲政の關係

前節に叙述したるが如き、經緯に基き、國際資本帝國主義が、その植民地再分割への制覇的侵略として内容、及び形態をとるところの、支那に對する攻勢力を、押し進めれば押し進めるほど、支那の支配的統治階級たる買辦・銀行資本家階級のこれに對する附庸關係が、益々深められ、而かもさうした國際金融資本の進出に對して、必然的に結ばれつゝあるところの支配的統治階級たる買辦・銀行資本財閥の附庸關係が、深められ、ば深められるほど、自然それらの支配的階級を代表する中央政權も亦、益々屈辱的な條件の下に、經濟的に、政治的に、國際列強に依存しながら、その直接、間接的の援助を仰がなければならぬのは、國際資本帝國主義對支那の支配的統治階級との關係の現實的な姿態なのである。

就中支那の支配的階級たる買辦・銀行資本財閥にとつては、その發展の過程中に於いて、最大の脅威であつたところの中華ソヴェート政權の勢力の掃蕩に對し、列強——とくに歐米諸國——の軍事的財政的支援を得なければならなかつただけに、一層國際金融資本の進出の前に、何等の抗爭をも試み得なかつたのであつた。當然こゝに支那の支配的階級——それを代表する中央政權——の、歐米依存性の基調が特徴づけられてゐたのである。

而して、歐米資本帝國主義列強の、支那に對する軍事的財政的の、直接的間接的援助は、國際聯盟の華やかなりし頃に於ける對支技術的協力によつて、彌よ新様式化されるに至り、爾來米國の棉麥借款、その他英國の對支財的

援助を始めとして、それら兩國の軍需品の供給、伊太利、獨逸の飛行機及び軍器の供給等々、最初の經濟的進出に、さらに政治的の意味が加はり、遂に軍事的の性質を多分に帯びるやうにすなつたのである。斯うした趨勢は、頗る注意すべき點であり、このことに關し「中國經濟年報」第一輯では、次の如くこれを評價してゐた。

「最後に我等は「技術協力」が、列強の戰備の問題と、著しき關係をもつ點を考慮しなければならない。全國經濟委員會は、公路（自動車道路）の建設に對して努力しながら、一九三四年の築路計畫によれば「重要公路四千八百萬公里の完成を目標とする」旨公表してゐる。而かも一九三四年に於ける經費の配分について見ると、公路の建設が六、八〇〇、〇〇〇元と全額の五〇%を占め、その他江西省の建設費に一、九〇〇、〇〇〇元、西北の建設費に二、五〇〇、〇〇〇元を、それ／＼計上してゐた等、これらの大部分は、公路の建設と、その他の公共事業の工事費に充用されるものであつた。而かもこのことは國際聯盟代表をして頗る満足せしめた點であり、斯うした公路の建設は、ライヒマンが「これは貨物の運輸に對して大きな利便を與へない。自動車を以てする運輸代價は鐵道に比して頗る高くつくからである」と稱した通り、その主要な目的は「治安の維持と政令の傳達が國家統一の要政」である點に存してゐた。と同時に「江西特殊問題の處理に便ならしめる」にあつたことは謂ふまでもない。斯くの如くにして、この種の廣大なる公路の建設は、その他の航空路の擴張、鐵道の延長と共に、列強の戰略上に對して、著しき利便を提供したことに於いて、これを看過すべきでない」（「中國經濟年報」第一輯、第二章「一九三四年の中國經濟の幾個の重要問題」第一節「國際の對華技術合作」一「技術合作の經過方案」の結論を抄録）。

x

x

然るに斯くの如き客觀情勢の下に於いては、一方支那に於ける一般民衆をして、一種の國民主義に根ざした民衆的要求を高潮せしめるに至り、國際金融資本の壓迫力に反抗するところの勢力的團結をば、益々鞏固ならしめねば想まなかつた。これを換言せば、一般民衆の革命的急進勢力をして彌上増大せしめ、その爆發を結果づける條件を、そこに醸成するに至つたのである。

とくに從來、所謂國難期に於ける舉國一致のスローガンの下に、比較的沈黙を守つて來た小資産階級、民族産業資本家、及び一部の急進的智識階級の分子らを主とする支配的階級に向つての反抗が激化して來たことは勿論であつた。こゝに於いて支配的階級は、これらの抗争に對立すべく、彌上その支配力の強化を企畫するに至つたのは、これまた頗る自然な成り行きであつた。

即ち支配的統治階級の代表權力機關たる中央政權の基礎を、彌が上にも強化、擴大せしむべく、その中央集權化、中央政權を以てする獨裁化への促進——その積極化——を計つたのである。

さうした一つの現はれとして、今次の西南に對する征服（西南各派を解消せしめて、これを中央の統治下に移した）、及び山西モンロー主義に對する牽制、乃至四川省を完全に中央の統制下に歸せしめた等々を挙げ得ると共に、最近具體化への域にまで達しつゝあるところの憲政開始問題ととりあげることが出来る。

そも／＼政治形態史から見て、ある階級の計画的、指導的獨裁による統治は、その黨治形態が、豫定の段階に達

しない限り、所謂純粹な民主政治の形態に改め得ないのを常態となした。支那に於いても亦、所謂國民革命の成功後、國民黨の一黨專政が産生して以來、これを軍政期、訓政期、憲政期の三期に區分しながら、豫定の段階に達するまでは、その一黨獨裁を繼續することゝしてゐたのである。

而して現在の段階は、なほ訓政時期にあるのであつて、訓政時期に於ける國民黨々治の完成を見るに至らない限り、憲政開始——純粹な民主政治の段階に入り得ない所以であり、從來支配階級としては、依然憲政開始の前提條件を具備しないと謂ふ理由の下に、極力憲政期に遷進することを忌避しつゝあつたと雖も、統治權力を中心とする環境が、漸次既述のやうな進展を見せて來た結果、現支配的階級——買辦・銀行資本財閥の畸形的獨占支配——は、さらにその支配的の段階を進める必要上、遂に中央政權をして、憲政の開始を斷行せしめんとするに至つたのである。

元來支那に於ける——國民黨々治下に於ける——憲政開始の前提條件は「建國大綱」に従へば、次の如く——

「憲法草案は、まさに建國大綱に本づき、及び軍政、訓政の兩時期の成績により、立法院より議訂し、臨時民衆に宣布しつゝ、時りて採擇施行す」（建國大綱第二十二條）。「全國過半數の省が、憲政時期に到達し、即ち全省の地方自治が完全に成立したる時、國民大會を開きて憲法草案を決議し、これを頒布す」（建國大綱第二十五條）。「全縣の人口調査が終り、全縣の土地測定が完成し、全縣の警衛處理が整備して、四境縱横の道路の修築が成立したる上、人民が四權使用の訓練を受けて、その國民的の義務を完畢し、革命の主義を實行せるものは、縣官を選

舉しながら、以て一縣の政事を執行しつゝ、議員を選舉すると共に、一縣の議員を選舉して、一縣の法律をも制定すると共にこゝに始めて一つの完全なる自治の縣となる」（建國大綱第八條）。

と規定されてをり、謂ふまでもなく、建國大綱による憲政實施期の社會状態は、完全に民主政治の樹立に適應すべき社會的經濟機構への展化を期待してゐたのであつた。

然るに資産階級の民主主義的の運動は、前編各章に於いて、そのところゝに解説しておいた如く、既定のコースを辿らなかつたのであつた。これを謂ひかへると、支那社會の發達は「建國大綱」が望んでゐたやうな段階を過程し得なかつたのである。さらに換言せば、民主政治の實現に適應すべき社會的經濟機構が、そこには結果づけられなかつたため、民族資産階級の成長すらが、著しい畸形的な發展を過程するに至つたのであつた。そして遂ひに必然的な變體的金融資本——畸形的な集積・集中を過程するに至つた銀行資本を中心として、國家銀行資本トラストによる全社會の貨幣資本への處分權獲得、乃至産業に對する一種の獨占形態への要望等々に立脚した——の寡頭制の實現傾向と、それに根ざした買辦・銀行資本財閥の成長とが特徴づけられ、買辦・銀行資本財閥の支配的形態をさへ産生せしめたのに、何んの不思議もなかつたのである。

従つて斯かる社會には、社民的政治形式——憲政に適應すべき、完全な基礎條件が、極めて薄弱であつたことは謂ふまでもなく、寧ろ社會の上層、下層を通じて、殆ど名狀し難いまでの畸形的な、跛行的な發展段階を展開せしめるに至つたのであり、そして斯うした社會に於ける上層部の獨占的支配が、彌よその獨裁的形態を把持せんがた

めに、所謂黨治による特定の政治形態を續けて行くことに既に夥しい不便を感じて來た。その結果は寧ろ所謂憲政の名を以てする自由な形態をすら要望するに至つたのも亦當然であつた。

現南京政權を中心とする獨裁強化への統治形態のなから、憲政の実施を要望されるに至つた理論的の基調は、こゝに存してゐると稱して好む。

以上の基礎的分析に従つて、この間の経緯に對し、さらに具體的にこれを解剖するとき、當然次の各項が成立つのである。

(一) 獨占的支配的階級にとつては、所謂國民黨々治による特定の一種の民主的傾向への進展に對しては、既に本質的に矛盾を感じる事が夥しかつた。

(二) 獨占的支配的階級にとつては、所謂憲政の開始により、そこに非特定の民主的傾向への進展を特徴づけしめることが、中央集權の強化上頗る都合の好いことであつた。

(三) 一切の資産階級的要素を獨占的支配のなかに融合せしめるには、これらの一切の資産階級的要素をば、中央政權の手に操縱させる必要があつた。

(四) 國民黨内に於ける現中央政權——蔣介石の軍事的大勢力を中心とする——にとつては、憲政の開始により、國民黨の束縛を離れて、愈よその基礎を鞏固にし、且つその擴大を計ることを望んでゐた。

即ち前述の諸要項が物語つてゐる如く、憲政期の開始が、さうした諸要求と、條件との下に於いて、事實化への

段階が進められて行つたのである。

最後にこの間の経緯を極言すると、現在の獨占的支配は、その發展過程中に於いて、既に資産階級的民主主義革命を體系づけたところの、三民主義の體現——實踐に對して、著しく、これと掛け離れた形態と、内容とを本質づけるに至つた結果、さらに、最早所謂三民主義の繩絆から脱しようとする努力を擡頭せしめ、さうした努力は、現支配階級の實踐形態をして、益々三民主義を裏切らしめて行つたのであつたが、中央政權にとつては、國民黨々治の基礎を絶対に放棄することを得ない環境におかれてゐるため、その支配的階級の畸形的な發展と、國民黨々治の基本的條件との間に於いて激化する矛盾を、カモフラージュしようとする要求が、今次の憲政開始となつて現はれたものと解して好む。

斯くの如くにして、憲政の開始は、決して、支配的階級の獨占を基調とする中央政權の獨裁強化を、緩和せしめる前提でも何んでもなく、將たまた支那に於ける民族産業資本家階級の勢力の復活、擴大が、買辦・銀行資本財閥を後退せしめたのでもない。況んや國際金融資本の支那支配が、支那に於いて民主的勢力の擡頭を要望しつゝあるからでは毛頭ないのであつた。

従つて憲政期の開始、また憲法草案の宣布に對し、痛烈な反對を行つて來たのは、死んだ胡漢民を中心とする西南派の各要人であつた。その反對の要旨は、次の如く——

「現在の支那に於ける政治的段階に於いては、なほ孫文の所謂訓政時期にある。自然憲政時期を迎へることは、

時期尙早と謂はざるを得ない。訓政時期の立場を貫徹することにより、國民黨々治を強化すると共に、黨の權力を擴大すべきである」。

と、謂ふにあり、支那に於ける政治機構の現状を、飽くまでも、國民黨々治の強化——眞の憲政開始の前提條件への實現に向つて——に引き直せと謂ふ主張が、その眼目であつた。そしてこのことは次のやうに——

(一) 支那の政治機構は前述の如く、その形式に於いては國民黨の黨治であり、黨大會或は執行委員會が、最高權力機關であると雖も、實際政治の支配權は、黨權によつて生ずると謂ふよりは、むしろ兵力と、財力とを背景とする蔣介石政權が、これを左右してゐるがため、黨を唯一の背景とする、黨部要人の間に、最大の不満があつた。

(二) 勢ひ彼等は黨權の擴大を欲する立場から、憲政尙早、訓政尊重を強調するのであつた。

等々の實際上に於ける、勢力關係に基く對立の發現であつた（さきに解説したところの支配的統治階級と、民族産業資産階級及び小資産階級、並びに無産大衆との本質的な對立が、かうした事象を結果づけたものであることは勿論であるが）。

同時に憲政の開始に對する反對の第二は、憲政を通じて、その強化・擴大を見るに至るべき、中央集權の發展に對し、各地方的に割據せる軍閥勢力の反對のそれであつた。これらの軍閥勢力は、地方的地盤の獨占確保が、その生命であり、憲政開始によつて、中央政府の權力が、一層自己の頭上に及んで來ることに、最大の脅威を感ずるに至つたからである。

至つたからである。

X

X

兎まれ、支那社會の畸形的發展——買辦・銀行資本財閥の變體的寡頭制——跛行的な膨脹を過程しつゝ發展した銀行資本が畸形的金融資本への形成と共に、一種の獨占的形態をすら萌芽せしめながら、さらに國際金融資本の進攻によつて、半植民地から、植民地化への過程が特徴づけられてゐる——は、期せずして、獨占——獨裁への強化と、政治形態上に於ける中央集權擴大への、限りなき要望から、憲法政治を劃期づけんとするに至つたのであり、自然さうした要求から出發した憲政の開始であるがために、その宣布されたところの「憲法草案」も亦、斯くの如き環境にふさはしき條項をもつて充たされ、三民主義、五憲憲法の諸特質を、完全に喪失してゐることは勿論であつた。

一部の間では、この憲政開始への問題に對して、左の如く、

「蔣介石の總統就任を豫想する憲法——その一方的中央集權化、獨裁政治の一手段として、それを美化せんとする憲法でしかあり得ない」。

とすら、評價してゐるのであり、この點に於いて、さうした結論は、決して誤りではないのであつた。

而してこの憲法——嚴密に謂ふと「中華民國憲法」を公決すべき、國民大會は、一九三六年十一月開催される豫定であつたところ、折柄日支問題の紛糾化、及び西南各派の中央に對する抗争（この抗争も亦憲法問題、中央集權

の積極化、即ち中央政權の壓力が、益々彼等の頭上に加へられて行つた結果、窮鼠かへつて猫を食む的の坑争の爆發であり、日支問題の悪化が彼等に坑日の名目を與へ、それに藉口した中央政權への軍事的行動が起されんとしたので、中央では、これに對して武力壓迫を以てする傍ら、内部的の切崩し運動を行つて、一先づ解決するに至つたの爆發化と共に、さらに延期された。——憲政問題と黨治との關係については、拙著「現代支那の政治機構とその構成分子」のなかで論じておいたから同書を参照されたい——。

勢ひこゝでは宣布された「中華民國憲法草案」は、大體次の如き特徴をもつてゐた點を附言しておくだけに止めよう。

(一) 三民主義の五權憲法が五院の完全なる獨立を確保してゐるのに對し、中華民國憲法草案では、總統の權限が著しく強化され、寧ろ總統中心主義を約束づけてゐる點に特異的な意義をもつてゐる。

(二) 總統は二院以上の意見の對立に遭遇せる場合、五院々長を召集の上、會議し得る權能が定められてをり、而かも五院々長のうち、行政院は、全く總裁の自由任免であり、司法院長、考議院長も亦、總統の任命によるものであるから、總統は、五院々長の會議を完全にリードすることを得るは勿論、この會議の名において、立法院、その他の院の獨立的決定を根本から覆へすことが出来る等、これらの諸點に總統中心主義が遺憾なく表現されてゐる。

(三) 立法院の官僚機構化が特色づけられてゐる點——立法委員の半數が民選で、半數は立法院長より、總統

に申請の上これを任命すと謂ふ條文は、そこに當然立法院の官僚機構化が暗示されてゐる。

(四) 國民大會は、その選出し得る立法委員、監察委員數を全數の半數にまで制限せられてゐると、三年に一度だけ、而かも僅かに一箇月の會期を以て召集されるのであるから、その職權を自立的に行使し得ない缺點をもつてゐる——。

第二章 中央政權を繞る財閥

第一節 緒言

こゝに謂ふところの財閥とは、財閥的支配階級を指すことは謂ふまでもなく、前編及び本編前章に於いて解剖したところの、支配的統治階級——買辦・銀行資本財閥がそれであり——言葉を変へて謂ふならば、買辦資本主義經濟機構のなかに於ける變體的金融資本家階級を指すのである。

従つて先進資本帝國主義國に於ける「財閥金融資本・コンツェルン」の發展形態を、支那の社會的經濟機構の中に、求めようとするのは、結局に於いて無理であるが、少くともこれに似た形態と、作用とを、先づ買辦・銀行資本財閥の變體的な獨占的支配形態のなかに求めつゝ、その範圍に屬するものを、所謂財閥として取りあげることゝした所以である。

「資本主義生産と、蓄積の發展と共に、集積と集中の二大槓桿たる競争と、信用の發展によつて、集積と集中は、最高の段階「獨占」に達する。或る一人の支配または數個のものゝもとに、すべての資本が合して「單一の資本」となつたとき、それは集中の最高權限」である。我々が言ふ財閥金融資本とは、コンツェルンに屬する一つの獨占形態であつて、集中の最高權限の指標である。集中の最高權限の指標としての財閥金融資本は、資本の一般的

集中をめざす金融資本の本質的な機能のはたらきによつて、財閥の單一の資本のもとに集中されたもので、従つて資本機構は、混合型であつて、一つの同一生産業のみ、單一資本のもとに結合したものではない。あらゆる産業のなかに支配を確立して、これを財閥資本のもとに結びつけたものである。またあらゆる産業にわたると同時に、同一の産業に於いても、原料——商品——販賣の一貫操作を、法律的には獨立した會社であつても、これを、財閥資本のもとに結びつけた縱の結合をも内包する(中略)。また財閥資本の資本主義一般の蓄積・集中とから、その形成の過程に於いて區別されなければならぬ。金融資本は支配を要求する。従つて開争的であつて、財閥にまで、自己資本を形成させる過程は「資本家による資本家の收奪」の基礎の上に集中されたものである。「三井銀行五十年史」には「參天の喬木も半寸の種苗より成長す、三井銀行今日の發展は、叙上、若干の預金貸金等に胚胎せるものなり」とある(中略)。半寸の種苗が、參天の喬木となる過程には、あらゆる多くの銀行資本が吹き倒されたのである(中略)。財閥資本の代表的な存在は、三井、三菱や、安田等である。代表的だといふことは、生産の規模や資本の強大をのみ言ふのではなく、財閥の生産資本の基礎が、資本主義の關鍵産業、即ち重工業に置かれてゐるかどうかが、銀行資本と産業資本との結合がいかにか結ばれてゐるかどうかが、これが重要な條件である(中略)。銀行資本としての財閥も、大産業資本としての財閥も、財閥資本への發展の過程にあるもので、これらの銀行資本は、その資本支配のもとにある諸銀行を通じて放出した産業への貸付資本が、産業との結合が不充分なために、金融資本として現在、未成熟の状態にあり、これらの大産業資本は、若尾や、茂木や、その他の没落

した財閥のやうに「資本家による資本の收奪」におそはれることなく、また商船財閥や、江州財閥——甲州財閥のやうに、金融資本の進出により、分裂的崩壊のうちに、陥没することなく、今日まで財閥的存在を維持し來つたものである。そして金融資本と結合しなければならぬ資本の必然的發展過程のうちに置かれてゐるものである」(鈴木茂三郎氏著「日本獨占資本主義の展望」から)。

以上は先進資本帝國主義國に於ける財閥コンツェルンの發展過程である。

支那に於いては、屢述の如く、商業資本の畸形的な發展が、銀行資本の驚くべき膨脹を促し、そこに國家銀行資本トラストに於ける、全社會の貨幣資本に對する處分權獲得への要求を中心として、一種の畸形的な金融資本の形成を見るに至り、變體的な獨占支配への形態すらが萌芽しつゝ、従つてある種の意味に於ける財閥を產生せしめてゐると雖も、さうした財閥の、生産資本の上に於ける基礎が、極めて薄弱であると共に、銀行資本と、産業資本との結合がなく、自然財閥資本としての諸條件を缺くのみか、一方國際資本に附庸しなければ、單獨な獨占的支配への形態をさへとり得ないところに、その變體的な發展過程を示してゐるのである。

従つて財閥コンツェルンへの發展がないだけに、斯かる資本機構のなかに於ける財閥的存在には、その支配的階級としての意義も亦、頗る畸形的たるを失はないのである。自然そこには唯買辦・銀行資本財閥の集團(この集團は當然(一)商業資本の形態に於いて國內に於ける封建性を表現しつゝ封建勢力と結び、國際資本帝國主義の半植民地に對する最高統治權に附庸し、(二)同時に銀行資本の形態に於いて國家財政と結合しながら、そこに獨占的な

支配形態を形づくつてをるところから產生した買辦・銀行資本財閥がこれを代表してゐることは既述の如くである)のみが、相當な作用を發揮し、先進資本帝國主義國に於ける金融資本財閥のもつ一部分に等しい影響を全社會に及ぼしてゐるのである。

屢述の通り、支那の民族資本は、國際金融資本の進攻の積極化と共に、金融、産業、商業の各部門の發展を、相互關係の下に膠着せしめ得ず、勢ひ分散的な非連鎖的な立場をとつて、それ／＼の部門のみの發展を過程せざるを得なかつただけに、一面に於いて老大な銀行資本の集積を見るに至つたにも拘らず、銀行資本の産業資本への結合がなく、必然的にコンツェルンの獨占形態をとり得るまでの正常的な發展をなし得なかつたのであり、斯くの如くにして、支那に於いて一般的に「財閥」と稱へられてゐるところのものは、この銀行資本家の集團を指しつゝあることは謂ふまでもない。

而かもこの銀行資本家の集團は(自然廣義の買辦資本家階級をも含み)、支那に於ける資本機構が、國家銀行資本トラストの發生と共に、全社會の貨幣資本に對する處分權獲得への要求に伴ひ、一種の獨占的な形態をとりつゝ、同時に變體的な金融資本への成長の段階にまで到達せんとしつゝある過程に於いて、それを代表する點に、財閥としての特徴を見出すことが出来るのである。

然らば斯うした銀行資本集團が、如何にして形成されるに至り、乃至その集團形態が如何なる動向への發展を過程しつゝあるか。この點に關しては、著者の解説を避け、左に王承之の「中國金融資本論」から、その項を引用す

ることゝした。

「支那の現存銀行中に於いて、そこに幾つかの銀行集團が形づけられてゐる。一般的に稱呼されつゝあるところの「浙江財閥」は、商業、金融界に於ける最大の權勢を掌握しながら、その地位も亦、他の銀團を超越してゐると雖も、然しながら、所謂「浙江財閥」なるものも亦、上海金融市場に角逐する一分子であり、金融上に權威を有してゐるとは謂へ、而かもこれと對立するものが相當多いのである。現在を分析するとき、政府と關係のある各銀行が超然たる地位に處してゐるのを除き、國內の各商業銀行は、何れもその性質と動態とから見て、これを南、北、東、西の四大財閥の下に分類歸納することが出来るのである。そしてこの四大財閥の事實に反映せるものは、各地の華商銀行の分布状態と、その消長盛衰とである。例へば華南集團は福建、廣東及び南洋群島に活躍しながら、華僑金融の樞紐を握つてをり、而して、南洋方面に於ける在留支那人と、故國との經濟關係疎通の使命を負ふてゐる。華北集團は二十年前の新興勢力であり、北京政府の當時、隱然として全國金融の領袖たるの地位に居つたと共に、その發達の速度が全國の銀行に冠たるものがあつたのは勿論、同時に聯合營業の長所を採用して、各方面に著しい脅威を與へてゐた。然るに南京新都の建立後より、金融の中心が、上海の獨占するところとなつたため、その活動の中心が、漸次江蘇、浙江、安徽の各地に移り、華東集團との營業上に於ける爭奪戰が開始され、双方の競争が益々熾烈を來すに至つたのである。華東集團は、江蘇、浙江、安徽の三省の土着銀行であつて、その歴史の悠久さと、地の利と人の和とを得てゐたため、上海を中心として隆興を呈しつゝあつたが、國

民政府の成立以來彌よその勢力の旺盛を加へて行つた。そしてその中堅が中外に喧傳されつゝあるところの「浙江財閥」であつたのである。華西集團に屬する各銀行は、新興以來日尙ほ淺い關係上、實力に於いて差異のあることを免れない。同時にその活動の舞臺も亦「西蜀」に偏してゐる等、前三者に比して重要性が乏しいのである。斯くの如くにして支那の銀行業は、政府と關係のある各行を除くほか、華北、華東の兩集團が全國金融業を左右する骨幹であり、而かもこの兩者の中堅には、また所謂南四行系と、北四行系があり、政府と關係あるところの各銀行も亦、これを交通系、實業系、財政系、建設系の四系に分つことが出来る。交通系は郵便貯金爲替局に、實業系は農商銀行に、財政系は中央銀行、國貨銀行、中國農民銀行に、建設系は農工銀行（著者註、この系統には中國建設銀行をも加へなければならぬ）とに、それ／＼代表されてゐた。華北集團の下に於いては、これを、さらに直魯系と北四行系の二種に區分すべきであるが、直魯系に屬するものには、邊業銀行、東萊銀行があり、北四行に屬するものには、鹽業銀行、大陸銀行、中南銀行、金城銀行がある。華東集團の下には、南四行系（また南五行系とも稱される）、滬波系、安徽系があつて、南五行系に屬するものは、中國銀行、交通銀行、上海商業儲蓄銀行、浙江興業銀行、浙江實業銀行があり、滬波系に屬するものには、四明銀行、通商銀行、鹽業銀行等があり、安徽系に屬するものには、中孚銀行、中國實業銀行がある。華南集團の下に於いては、これを福建系と、香港・廣東系とに分つべきであつて、福建系に屬するものには華僑銀行、中國興業銀行があり、香港・廣東系に屬するものには、四海通商銀行、廣東銀行、東亞銀行、國民銀行がある。華西集團に屬するものとしては聚興誠銀行

を挙げねばならぬのであり、その他の小銀行に至つてはその資本の薄弱と、營業の範圍も亦狭小たるを失はないためこれを省略する（國華銀行は南四行系と北四行系との間に立つべきものである）。斯くて各集團の下に於ける各銀行には、それ／＼多くの分支行及び信託公司、保險公司と、實業團體——地産公司、紡績業、ホテル、倉庫等の如き——が所屬してゐる。以上のうち北四行系は、中南銀行の發行紙幣を普及するため、四行準備庫を共同設置したのに始まり、民國十二年に至つて、また四行儲蓄會を組織の上、各種の儲蓄事業を處理したが、爾來十餘年來、その優秀な成績に於いて、支那金融史の上に特筆すべき價値を示した。所謂南四行系とは、金融業者の習慣に基く名稱であり、同時に具體的な組織がなかつた。四行系は、江蘇、浙江の區域を活躍の舞臺とし、單にその歴史の悠久なるのみでなく、その資力の雄厚さに於いて、その他の各行を壓倒したのである。そして、それらの各行の支配者が「浙江財閥」の一系統を形成してゐるのであつたが、就中中國銀行の勢力が最も大である。南四行系は形式上に於いても亦、同時に一定の組織がなかつたと雖も、業務上に一致する點があつたのと、その背景及びその營業の發展の經過に大差なかつたため、會て盛んに南四行系の聯合組織説が傳へられた程であつた（このことは遂に實現しなかつたが）。一九三五年の春、政府は、中國銀行及び交通銀行の政府の持株を増加し、この二行の性質を變化せしめ、この結果は、南四行系に痛烈な打撃を與へたと雖も、然しながら、同時に南四行系の既有的體系を崩壊せしめなかつたのである。中・交兩行の政府持株増加後、政府の銀行統制が益々強化するに至り、中國實業、四明、中國通商の三行は、前後して政府持株の増資が行はれた。四明銀行と中國通商銀行は、

齊波系の先進であり、中國實業銀行は、安徽系の重鎮であつた。以上によつて知ることを得るが如く、實際的に支那の銀行界の權威者は、華北集團の下に於ける北四行系と、華東集團の下に於ける南五行系であり、この兩系は單にその資力に於いて雄厚たるのみならず、尙ほ且つ公債の消化と、工業に對する資本の投資に於いても亦、最も巨額を占めてゐたのである。勢ひこの兩系は支那金融界の權威者たる所以である」（『中國金融資本論』第三章「中國金融業の機構」十二「中國銀行の陣容」の一部を抄録）。

X X

而かも以上の各銀行集團は、現在にあつては、多かれ少なかれ、何れも國家銀行資本トラストの支配的作用を受けざるはないのである。こゝに謂ふところの國家銀行資本トラストの所屬銀行は、前編第五章に解剖した通り、中央、中國、交通の三行を始めとして、南北五行系に屬せるもの、うちの政府の統制下におかれてゐる各行及びさきに引用した「中國金融資本論」の著者の分析による政府系銀行の各行であるが、その他紙幣發行銀行は、當然トラスト銀行の支配下にあるは勿論、中國農民銀行の統制下におかれてゐる各省銀行、及び各省に於ける農民銀行も亦、必然的にトラスト銀行の、全社會に於ける貨幣權の處分權獲得への要求の、直接、間接的支配を受けつゝあることは謂ふまでもない（この點に關しては、次節に摘録するところの、銀行資本財閥の構成分子を分析した一覽表を参照された）。

従つて一般的に稱へられてゐる「浙江財閥」なるものは、斯うした銀行資本の發展過程中に於いて、この種の民

族資本機構を構成する分子中の一分子であり、單に浙江省の出身にかゝる資本家乃至企業家の、上海財界に於ける個々の勢力を、強ひてその出身地關係により、横斷面に綜合して見たまでに過ぎないのである。

勢ひ謂ふところの浙江財閥なるものが財閥としての形態を備へてをらず、財閥としての作用をも、影響をも、社會的には及ぼしてゐないと謂ふ點を看過出來ぬ。斯くの如くにして、支那の支配的階級——即ち先進資本帝國主義に於ける獨占的金融資本財閥の支配的形態に對して、ほゞこれに似通つた作用と、地位と、形態とを有するもの——は、買辦資本主義經濟機構の下に於ける、買辦・銀行資本の發展によつて形成されたところの畸形的金融資本の變體的獨占的支配形態を代表する買辦・銀行資本財閥であると謂ふことが出來、當然政治的支配權も亦、この階級がこれを掌握してゐるのであると稱して好く、延ひて中央政權の要衝には、これらの階級の代表人物が、これに加はつてゐるのである。

そしてかうした畸形的金融資本は、さらに國際資本に附庸しながら、國家銀行資本トラストの支配形態を押し進めて行かうとしてゐるところに益々支那財閥・資本機構の特徴が顯著な表現となつてゐるのである。

第二節 所謂中央財閥の構成分子と中央政府との關係

支那財閥資本の發展過程と、その支配形態及び政權との關係に對しては、前節及び前章または、前編の各章に於いて、分析解剖した點により、これを明らかにすることを得たため、ことさらに敘述する必要を認めないと思はれ

るが、本節では、改めて中央政權を繞る財閥資本家階級の主要人物をその個々について列擧し、それに基づいて所謂財閥を構成してゐる分子と、それらによつて支配されつゝある銀行資本の各々の關係とを一瞥しておきたい（兩してこれらの構成分子は、何れも買辦・銀行資本財閥の代表的人物であることは勿論である）。

いま試みに中央政府の要衝に當つてゐるところの財閥の代表的人物を拾ひ出して見ると次の如くである。

現國民政府の鐵道部長張公權は、從來中國銀行の總經理として、上海の銀行界を牛耳つてゐた人物であり、尙ほ國民政府實業部長吳鼎昌は、鹽業銀行及び上海四行準備庫を中心として、上海の金融界に重きをなしてゐた人物であるほか、さきに飛躍時代に於ける國民政府の財政を切つて廻してゐた宋子文は、現在全國經濟委員會の主席委員として、中央政權の經濟建設の衝に當りつゝあるが、同時に同人は中國銀行の董事長であり、現財政部長の孔祥熙も亦、元來金融界の出身で、いま中央銀行の總裁を兼ねてをり、その他中央政府の經濟建設上に於ける機關として、最も重要性を帯ぶるところの全國經濟委員には、孔祥熙、張公權、虞洽卿、李銘、吳鼎昌、王曉籟、徐新元、榮宗敬、劉鴻生、陳光甫、周作民等の財界人が網羅され、建設委員には張靜江、張公權、等がその實權を握つてゐる。

斯くの如くにして、銀行資本が、如何なる關係をもつて、國家銀行資本トラストの支配下に屬してゐるか、及び買辦・銀行資本財閥の代表的人物が、中央政權のなかに於いて直接如何なる役割を受持つてゐるか等を知らんがため、次の如き一覽表を作製して見た。

中央銀行總裁、中國農民銀行董事長、中國國貨銀行董事長、中國建設銀公司董事長、中國銀行董事、上海商業儲蓄銀行董事。

孔祥熙

國民政府行政院副院長、國民政府財政部長、建設委員會委員、全國經濟委員會常務委員、財政部中央造幣廠審查委員會委員長、財政部金融顧問委員會主席委員、財政部發行準備管理委員會主席委員。

宋子文

中國銀行董事長、中國建設銀公司執行董事、中國國貨銀行常務董事。

國民政府委員、全國經濟委員會常務委員、建設委員會委員、財政部發行準備管理委員會常務委員。

張公權

中央銀行副總裁、上海女子商業儲蓄銀行副董事長、中國銀行董事、交通銀行董事、中國企業銀行董事、新華信託商業銀行董事、上海信託公司董事、中國建設銀公司常務董事。

國民政府鐵道部長、全國經濟委員會委員、財政部金融顧問委員會副主席、財政部發行準備管理委員會委員。

金城銀行董事、鹽業銀行董事長、四行儲蓄會委員。

吳鼎昌

國民政府實業部長、全國經濟委員會委員、財政部金融顧問委員會委員、財政部發行準備管理委員會委員。

張靜江

南京商業儲蓄銀行董事長、中國建設銀公司監察長。

國民政府委員、建設委員會委員長。

中央銀行理事、中國銀行常務董事、江蘇銀行常務董事、上海女子商業儲蓄銀行常務董事、上海通和商業儲蓄銀行董事、徐州國民銀行董事長、中國國貨銀行常務董事、交通銀行董事、上海信託公司監察人、中國建設銀公司常務董事。

陳光甫

全國經濟委員會委員、建設委員會委員、財政部金融顧問委員會委員、財政部發行準備管理委員會委員。

浙江實業銀行董事長、中央銀行理事、中國銀行董事、交通銀行董事、上海商業儲蓄銀行董事、太平銀行董事、中國墾業銀行董事、上海市興業信託公司董事、中國建設銀公司常務董事。

李銘

全國經濟委員會委員、財政部國債基金管理委員會主席、財政部金融顧問委員會委員、財政部發行準備管理委員會委員。

錢

交通銀行常務董事、中央銀行理事、中國銀行常務董事、上海市銀行理事、江蘇銀行常務董事、大陸銀行董事長、辛泰銀行董事、中國建設銀公司董事、金城銀行董事、中國國貨銀行董事、國華銀行董事、中國農工銀行董事、浙江實業銀行常務董事、鹽業銀行董事、四行儲蓄會副主任。

水

全國經濟委員會委員、建設委員會委員（一九二七年國民政府財政部次長となつたことがある）、財政部金融顧問委員會委員、財政部發行準備管理委員會委員、財政部儲蓄銀行存款準備保管委員會委員。
中央銀行理事、四明商業儲蓄銀行董事（三北輪船公司總經理—買辦出身）。

虞洽卿

全國經濟委員會委員、財政部國債基金監理委員會委員。

中國銀行董事、交通銀行董事、北洋保商銀行董事、金城銀行董事、中國農工銀行董事、四行儲蓄會々長、中國建設銀公司常務董事。

周作民

全國經濟委員會委員、財政部金融顧問會委員、財政部發行準備管理委員會委員。

中國銀行董事、大亞銀行董事、中國通商銀行董事長、中匯銀行董事長、民孚商業儲蓄銀行董事、江浙商業儲蓄銀行董事、亞東商業儲蓄銀行董事、滬東商業儲蓄銀行董事、國信銀行董事、亞洲銀行董事、浙東商業儲蓄銀行董事、通匯信託公司董事長。

杜月笙

國民政府參事、財政部國債基金管理委員會委員、財政部上海錢業監理委員會委員、財政部發行準備保管委員會

宋子文

中央銀行理事、中國銀行董事、交通銀行常務理事、中國國貨銀行總經理、中國農工銀行董事、中國建設銀公司董事。

胡筆江

宋子文の弟で現に廣東省財政廳長として、中央の廣東省統制後に於ける同省の財政金融整理工作にその手腕を振つてゐる。財政部金融顧問委員會委員。

交通銀行董事長、金城銀行監察人、中華勸工銀行董事、中國銀行董事、江蘇銀行常務董事、大生銀行董事、中南銀行常務董事、正明商業儲蓄銀行董事、國華銀行董事、四明儲蓄會董事、中國建設司公銀董事。

劉鴻生

財政部金融顧問委員會委員、財政部發行準備管理委員會委員。

中國企業銀行董事長、中國國貨銀行監察人、上海煤業銀行董事。

榮宗

全國經濟委員會委員（産業企業家）。

中央銀行理事、中國銀行董事、上海商業儲蓄銀行董事、中和商業儲蓄銀行董事、紡織製粉工業界の重鎮。

敬

全國經濟委員會委員。

交通銀行董事、浙江興業銀行常務董事、中國企業銀行董事、上海市興業信託公司董事長、中國建設銀行公司常務董事。

徐新元

全國經濟委員會委員、財政部國債基金監理委員會委員、財政部金融顧問委員會委員、財政部發行準備監理委員會委員。

中國銀行董事、中央銀行營業局長、交通銀行常務董事、中國建設銀公司董事。

席德懋

財政部金融顧問委員會委員。

中央銀行理事、交通銀行董事、上海市銀行理事、中和商業儲蓄銀行董事、辛泰銀行董事、中國墾業銀行董事長、上海市興業信託公司董事(錢莊業界の重鎮)。

泰潤卿

財政部金融顧問委員會委員、財政部上海錢業監理委員會委員、財政部發行準備保管委員會委員。

中央銀行副總裁、交通銀行常務董事、浙江地方銀行董事、中國國貨銀行常務董事、中國建設銀公司常務董事。

陳行

一 財政部國債基金監理委員會委員、財政部金融顧問委員會委員

中國銀行監察人、浙江實業銀行常務董事。

唐壽民

中央銀行常務董事、交通銀行常務董事、江蘇銀行常務董事、太平銀行董事、正明商業銀行董事、亞洲銀行董事、國華銀行副董事長、新華信託儲蓄銀行董事、中國建設銀公司常務董事。

財政部金融顧問委員會委員、財政部發行準備管理委員會委員。

中國銀行常務董事、上海至中商業儲蓄銀行董事長、中和商業儲蓄銀行董事、新華信託儲蓄銀行董事、中國建設銀公司董事。

宋漢章

財政部發行準備管理委員會委員。

中央銀行常務理事、中國×貨銀行董事、中國建設銀公司董事。

徐堪

財政部金融顧問委員會委員、財政部發行準備監理委員會委員。

孫松貝

中央銀行理事、中國銀行董事、浙江實業銀行監察人、中國建設銀公司董事。

財政部金融顧問委員會委員、廣東省財政金融整理委員。

中央銀行理事、國貨銀行董事、東南信託公司董事。

候康林

財政部國債基金監理委員會委員。

中南銀行董事、上海商業儲蓄銀行董事、中國農工銀行監察長。

仁靜徐

浙江興業銀行常務董事、溫州商業銀行董事長、上海網業銀行監察人、中國墾業銀行董事、中央銀行理事、中國銀行董事、上海信託公司常務董事。

庭寄徐

財政部金融顧問委員會委員。

四明商業銀行董事長、中國通商銀行董事、信孚商業儲蓄銀行董事、浙江商業儲蓄銀行董事、四明儲蓄會會長。

南衡孫

財政部金融顧問委員會委員。

庵筱傅

中國通商銀行常務董事、中華商業儲蓄銀行董事、中國建設銀公司監察人。

國民政府參事。

中國銀行監察人、江蘇銀行常務董事、上海網業銀行董事長。

松延王

財政部儲蓄銀行存款保證準備保管委員會委員。

交通銀行監察人、湖北省銀行理事會主席、中國農民銀行董事。

毅士賈

湖北省政府委員（財政廳長）。

中國銀行常務董事、中國農民銀行董事、新華商業儲蓄銀行董事長。

光秋馮

大中銀行董事、上海至中商業儲蓄銀行常務董事、四明商業儲蓄銀行常務董事、江海銀行董事、四明儲蓄會經理（元來錢莊業界の重鎮）。

庭佐俞

財政部儲蓄存款保證準備委員會委員、財政部發行準備管理委員會委員。

交通銀行董事、中國建設銀公司董事。

張壽鏞

前國民政府財政部次長。

中央銀行理事、中國銀行常務董事、上海至中商業銀行常務董事、中國建設銀公司監察人。

王實齋

中國各貨銀行董事、中國農工銀行常務董事。

張軼歐

前國民政府實業部商業司長。

中國各貨銀行董事、中國建設銀公司常務董事。

李石曾

建設委員會委員、全國經濟委員會委員、國民政府委員。

交通銀行監察人、中國通商銀行董事、中匯銀行董事、江浙商業儲蓄銀行董事、國信銀行董事。

張嘯林

前陸海空軍總司令部參議。

王伯元

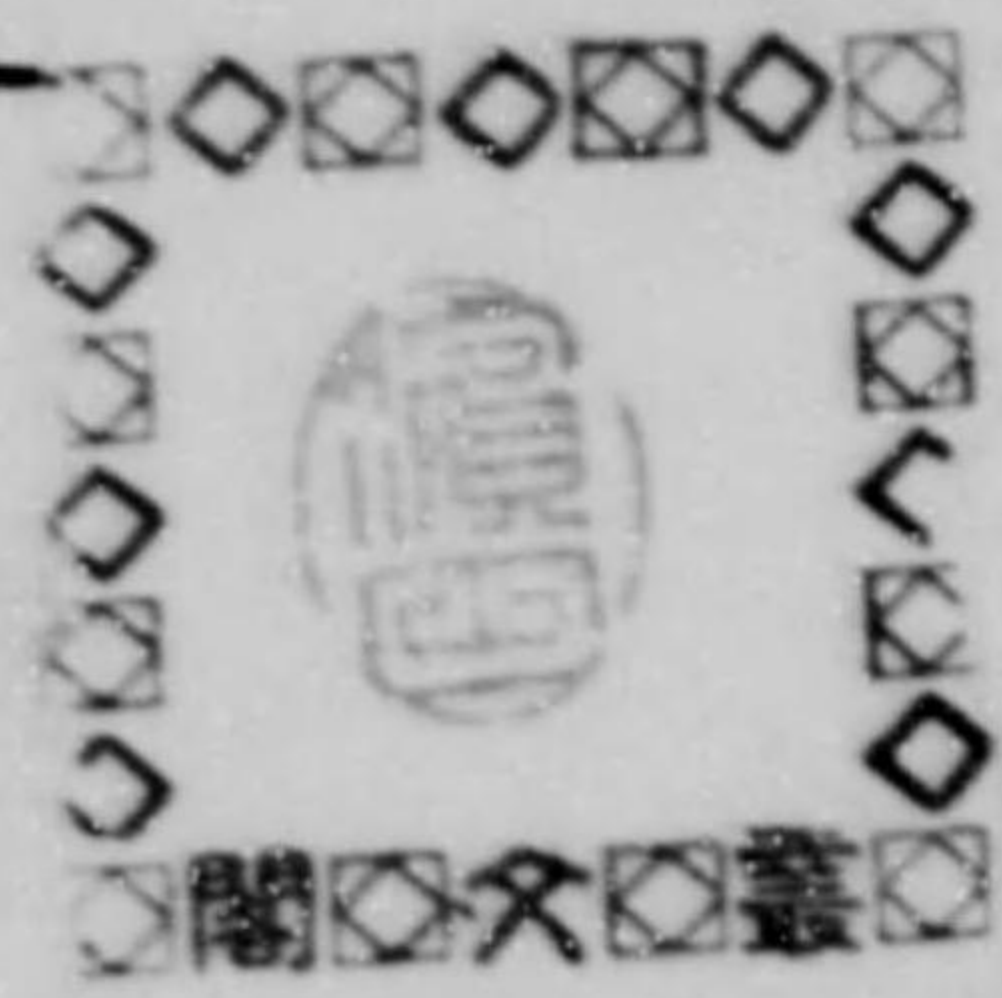
上海通和商業儲蓄銀行董事長、國華商業儲蓄銀行董事長、中國墾業銀行常務董事、中國建設銀公司監察人（錢莊業界の重鎮）。

因に右の表が示す通り、國家銀行資本トラストのうちには、トラスト銀行以外の各銀行の重役が、網羅されてゐるのであり、而かも注目すべきは、これらの銀行重役が、何れもの、中小銀行に關係をもつてゐる點にある。

支那資本機構・財閥・政權了

昭和十二年二月十日印刷
昭和十二年二月十五日發行

(定價金三圓)



支那本橋橋・財閥・政權

著者	發行者	發行所
濱田峰太郎	東京市麹町區九段四丁目八番地 西村豊吉	東京市麹町區九段四丁目八番地 文閣 振替東京四二八八九番 電話九段二五六八番

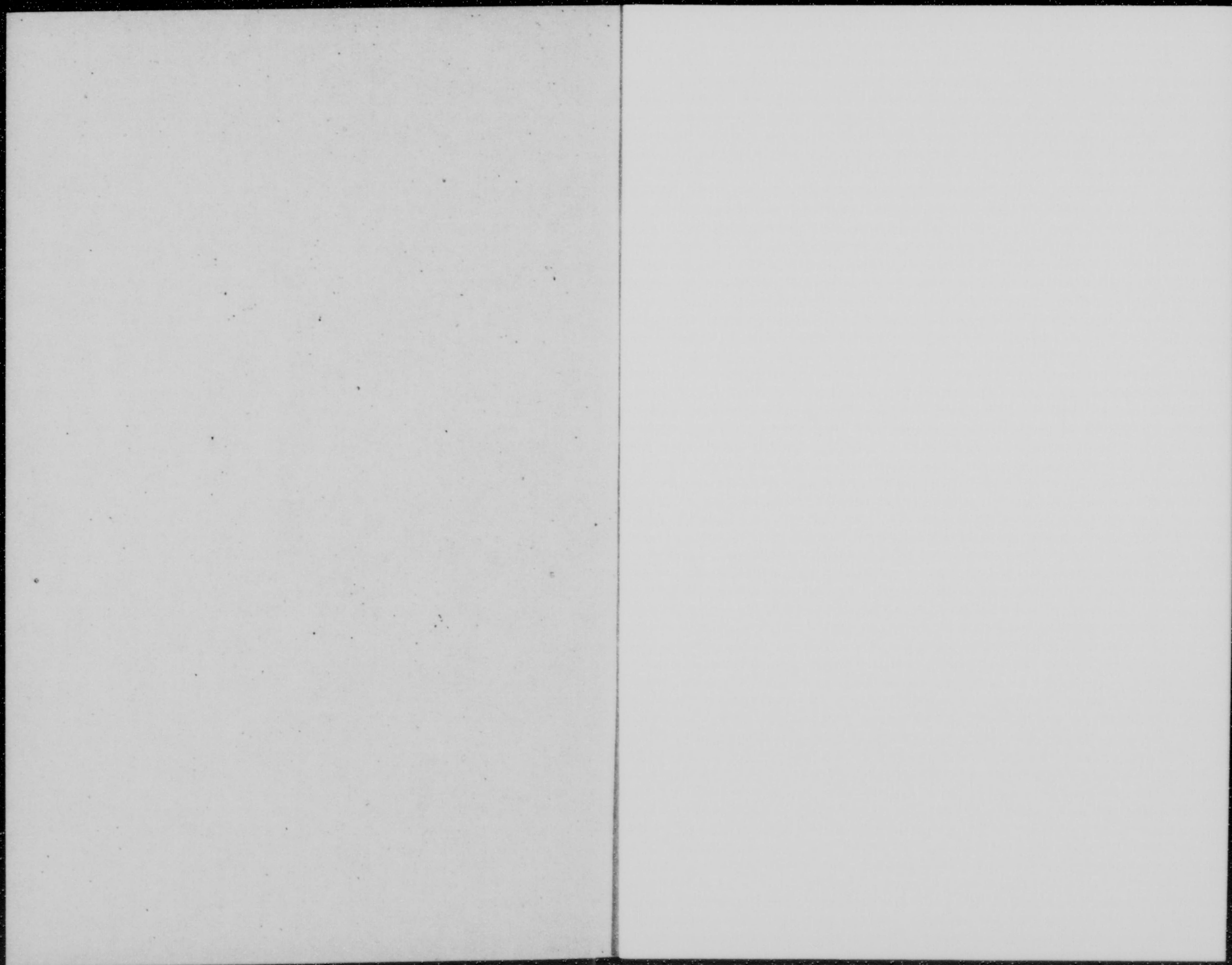
印刷者 高山信吉
東京市神田區神保町三ノ二九

叢文閣新刊書

後藤貞治著	本邦統計資料解説	定價四拾六錢
太平洋研究会譯	史觀物日本研究	定價四拾四錢
阿部市五郎譯	生活形態としての國家	定價貳圓八拾錢
松原登	譯編フアジズムの諸問題	定價九拾錢
吉田榮一譯	ドイツ・フアジズム論	定價六拾錢
松原宏譯	フアジズム論(普及版)	定價貳圓四拾錢
橋本弘毅譯	經濟地理學の諸問題	定價貳圓八拾錢
木村森之助著	日本小作制度論	定價參圓五拾錢
戸田慎太郎著	日本農業論	定價貳圓貳拾錢
經濟學研究會譯	貨幣と金融	定價貳圓六拾錢
平館利雄譯	協同組合論	定價貳圓八拾錢
廣知茂著	支那貨幣・金融發達史	定價貳圓拾錢
佐藤愛三著	南支那に於ける農村問題	定價壹圓四拾錢
廣川乃器著	支那貨幣論	定價壹圓

叢文閣新刊書

森武夫著	ブロック經濟地理	定價貳圓五拾錢
青鹿四郎著	農業經濟地理	定價貳圓五拾錢
川西正徳著	工業經濟地理	定價貳圓五拾錢
同	續工業經濟地理(1)(2)	各定價貳圓五拾錢
宮坂悟朗著	畜産經濟地理	定價貳圓八拾錢
黒正巖著	經濟地理學總論	定價貳圓八拾錢
辻村太郎著	經濟地理圖	定價貳圓五拾錢
山崎麟一郎著	經濟地理圖	定價貳圓五拾錢
今田清二著	水産經濟地理	定價貳圓五拾錢
市河三祿著	林業經濟地理	定價貳圓五拾錢
西尾滋著	鑛業經濟地理	定價貳圓五拾錢



CL	Q43-1
NO.	1

KONDO
BOOK STORE
CHINA TOKYO
TEL. 03/1280
店書贈送

CL 248-1

NO. 1

